

建築と社会

Architecture and Society

特集　東海支部特集

日本建築協会
2021 03
vol.102 No.1188

若き創造者たちへ

「第68回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年（1954年）から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。
今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。
選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1．応募できる人は満35歳（2021年３月31日現在）以下の青年技術者であって、**本会個人会員**に限る。

2．原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。

5．「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第67回青年技術者特集号」（2021年７月号予定）に掲載する。

6．**提出資料**

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードしてください。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料（A、Bあわせて A3版6枚以内／書式は任意）

A：業績資料

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合 ―― それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い

業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した、力量が活かされた、と思われる部分を説明してください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。業績資料の中に内容を含めても良いです。（**応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮をしてください。**）

7．**提出期限**　2021年3月31日（水）

8．**提出先**　（一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マート7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

9．**提出方法**　郵送（当日消印有効）または持参

10．**青年技術者選考委員会**

委員長　中原　岳夫／㈱安井建築設計事務所大阪事務所設計部部長
委　員　駒井　陽次／㈱Style-A一級建築士事務所代表取締役
橋本　　修／㈱昭和設計執行役員
松原　茂樹／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 准教授
水方　秀也／㈱竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）
阿蘇品尚士／㈱東畑建築事務所 執行役員本社オフィス東京代表
瀧野　敦夫／奈良女子大学生活環境学部住環境学科講師
小倉　良友／㈱日建設計エンジニアリング部門 設備設計グループシニアダイレクター
古久保　真／清水建設㈱関西支店設備設計部副部長
山口　善史／㈱大林組大阪本店建築事業部生産技術部長
青木　康造／大成建設㈱関西支店建築部品質管理室長

第４回片岡安賞
（日本建築協会論考コンクール）

募集テーマ：レガシーの新たな意味を問う

１次審査通過者による
オンライン（Teams）公開プレゼンテーション

第４回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）は、昨年12月から第１次審査が行われ、右の３編が１次審査通過論考と決まりました。３月14日には最終審査に向けたオンラインでの公開プレゼンテーションが行われます。片岡安賞受賞を目指すプレゼンターのオリジナリティー溢れる発表をぜひライブでご視聴下さい。

■日　時　2021年３月14日（日）
13：00～15：00（予定）

■定　員　100名（申込先着順）

■参加費　無料

■申込み方法
①催し名 公開プレゼンテーション
②氏名（ふりがな）
③職場名または学校名
④連絡先電話番号
⑤E-mailアドレス
上記項目を明記しE-mailにて右記までお申し込みください。
後日、Teamsライブイベントの参加URLをメールでお送りします。（なお、当イベントはチャット等での質問は受け付けできません）

１次審査通過論考３編（到着順・敬称略）

- **残るレガシー**
  安田徹也（竹中大工道具館学芸員）
- **記憶の中の住まい**
  丸野健雄（元南阿蘇村新所区区長）
- **変遷する京都御所のレガシーに関する考察**
  柳澤巧磨（日建設計設計部門）

■申込先　（一社）日本建築協会（担当：入谷）
E-mail：hensyu2@aaj.or.jp
TEL：06-6946-6981

■締切り　2021年３月10日（水）

審査委員
髙田　光雄（委員長・京都美術工芸大学教授、京都大学名誉教授）
倉方　俊輔（大阪市立大学准教授）
弘本由香里（大阪ガス エネルギー・文化研究所特任研究員）

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1999〜2020

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。

販売価格は2019年9月号までは1,230円、2019年10月からは1,254円（税込・送料別途）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1999 vol.80	● “らしさ”のデザイン ● 建築を綴る小粋なモノの仕掛人	● 大阪市都市整備局	● 東海支部会員作品’99 北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	● 都市のパブリック	● 関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	● 大阪城天守閣平成の大改修	● 改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	● 私の目でみた環境問題	● アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	● 木とともに＊	● 私の空間作法	● 第46回青年技術者
2000 vol.81	● 21世紀のデザインの動向を見る ● 安井建築設計事務所創業75周年＊	● 中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	● 東海支部会員作品2000 越中・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	● こころを癒す環境デザイン	● 測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	● スケルトン＆インフィル	● 改正建築基準法―パートII―	● 100年後へのメッセージ ● 日建設計創業100周年	● 来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	● 時間＊	● 私の空間作法―会員作品― ● 21世紀の高齢者の居住環境	● 第47回青年技術者
2001 vol.82	● エヌ・ティ・ティファシリティーズ＊	● 21世紀の建築設計教育	● 東海支部会員作品 ● 岐阜・大垣	● ＩＴ社会におけるきずな	● 自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	● 成熟社会をささえるまちづくり	● 現代の日本の空間・文化を探る	● 環境―近未来に向けて今できること― ● 大建設計―作品特集1996〜2001―	● 建築の力 都市の力	● 緊張 ● 都市基盤整備公団関西支社	● 私の空間作法―会員作品―	● 第48回青年技術者 ● NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館
2002 vol.83	● 国土交通省近畿地方整備局営繕部	● 再生・リサイクル	● 東海支部会員作品 ● 愛知・名古屋	● 生活環境の安全・安心―パート2―	● 塗装のいろいろ	● 都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	● いま、インテリアデザインは ● 漆町リバープレイス＊	● 建築をささえるセンサー	● 建築とボランティア	● 時を超えて〜サステナブルエンジニアリングの現在〜	● 私の空間作法―会員作品―	● 第49回青年技術者 ● 大阪市中央公会堂
2003 vol.84	● 東畑建築事務所創立70周年	● 九州の地域づくり・まちづくり	● 東海支部会員作品2003 ● 愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	● サスティナビリティ〜次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン〜	● 建築と五感	● 都市計画法及び建築基準法等の改正	● コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	● 介護と建築・設備	● 建築とノスタルジー〜建築の主観的価値について〜	● 力と楽しくつき合う方法	● 私の空間作法―会員作品―	● 第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	● 大阪市住宅局	● 都市緑化	● 東海支部会員作品 ● 愛・地球博＊	● 省リスクな「まち再生」	● リニューアルの技	● 地域住民主体のまちづくりと支援制度	● Product Design＋1	● 銭湯〜心地よさを求めて〜	● 建築家とは何か	● 巨大地震にそなえて	● 私の空間作法―会員作品―	● 第51回青年技術者
2005 vol.86	● 震災から10年	● 「健やか」 ● 長崎医療センター	● 東海支部会員作品2005 ● 東海における施設づくりへの新たな試み	● 建築の経済化	● 住まい方の変化	● 人工栽培	● 次世代に伝える「木」の建築 ● 「建築と社会」1000号記念	● 改正建築基準法と景観緑三法	● 火災から守る	● 構造の過去から未来へ	● 私の空間作法―会員作品―＊	● 第52回青年技術者
2006 vol.87	● 都市環境デザインと参加のまちづくり	● 「地方空港の時代」〜まちと共存する空港づくり〜	● 東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作	● 都市再生の本質〜光と影のはざまで〜	● 変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	● 身近な省エネルギー―エネルギーをたくわえ、有効利用する〜	● 設計図が伝えるもの	● 建築物の安全・安心	● 第53回青年技術者	● 「セキュリティ」	● もしも…〜構造が未来へつなぐ夢〜	● 私の空間作法―会員作品―
2007 vol.88	● 光り輝く京都の景観まちづくり	● 学校新時代	● 東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作	● 創立90周年記念―この10年、これからの10年	● あそび考	● こだわりが創る住まいのカタチ	● 住まいの設備と空間の移り変わり	● 建築系雑誌が伝えるもの	● 建築基準法等大改正	● 第54回青年技術者	● ガラスを考える	● 楽しい構造の世界
2008 vol.89	● 私の空間作法―会員作品―	● PFI事業、その後＊	● 東海支部会員作品2008＋東海支部特集3部作	● まちづくり2011年宣言	● 新ホテル物語	● 設備に役立つ地震対策	● 中国地方を訪ね歩いて見えるもの ● 小林聖心女子学院	● 建築と景観	● 第55回青年技術者	● 木造住宅を巡って	● 建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	● 自然と戦う構造
2009 vol.90	● 私の空間作法―会員作品― ● 京阪電車 中之島線―新線が拓く中之島新時代―	● 水の都 にぎわいのある未来に向けて	● 東海―TOKAIオムニバス	● 楽しい福祉	● 体感するインテリア	● 建築空間が求める空気環境（空気質）	● 建築と水	● 実用レベルで展開される施工管理のIT化	● 第56回青年技術者	● 地域の歴史資産を活かしたまちづくり	● 第16回会員作品特集“私の空間作法”	● 構造家日記〜頭の中をのぞいてみたら〜
2010 vol.91	● 創業110周年記念特集 NIKKEN SEKKEI	● 建築とエコ技術	● 東海支部復活50周年記念号 東海―TOKAIオムニバス	● 食と建築・都市	● ホスピタリティのあるケア空間	● 太陽光発電	● 建築と石	● 再生・受け継ぐ・繋がる＊	● 第57回青年技術者	● 建築ストック社会の形成への展望	● LED照明の活用・将来を考える〜人・地球への思いやり〜	● 東京スカイツリー
2011 vol.92	● UR向ヶ丘第一団地ストック再生実証試験―ストック活用時代の夜明け 第17回 会員作品“私の空間作法”	● BIMは設計を変革するか?	● 東海支部復活50周年記念号 東海―TOKAIオムニバス	● まちなかのサードプレイス	● 変遷する“身の置きどころ”	● ECO〜建築設備が出来るECO技術〜	● 建築と土	● 鉄道駅に注目する	● 第58回青年技術者	● 火災に強い建築を考える	● コンクリートという素材	● 構造教育と社会
2012 vol.93	● 自然災害に立ち向かう力を求めて	● 今、私が思う『和』	● 東海支部特集	● 第18回 会員作品“私の空間作法”	● 中国市場に挑む	● ZEB ネット・ゼロ・エネルギー・ビルを目指して―低炭素社会の実現に向けて―	● 建築と窓	● 巨大地震に備える	● 第59回青年技術者	● 超高齢社会に求められる住まい	● 歴史的建造物の保存活用	● 身のまわりの世界の「構造」を探る
2013 vol.94	● 東畑建築事務所創立80周年 U-35のまなざし ● 脱成長の時代を考える	● “らしくない”空間 ● 小特集 中之島フェスティバルタワー	● 東海支部特集	● 第19回 会員作品“私の空間作法”	● コミュニティの“かたち”―人と人とのつながりを再考する―	● 無駄から見える節電	● 第60回青年技術者	● グラントフロント大阪	● 素材としての建築	● 建築に携わるものに求められること	● 木の街をつくる	● 実験
2014 vol.95	● エリアマネジメントの新展開に向けて	● 融合する空間〜新たなる試み〜	● 東海支部特集 ● 小特集「ABENO REBORN」	● 第20回 会員作品“私の空間作法”	● オフィスビル設備の変遷とこれから	● オフィスのこれから	● 第61回青年技術者	● 建築と時間	● 省エネ・低炭素のこれまでとこれから	● 大阪・上町台地・あべのハルカス ● 複雑・高度化する建築とその技術について	● でっかいものはすごいぞ	● 安井建築設計事務所90周年
2015 vol.96	● フォー・オールの時代に向けて	● 場をつくる〜プログラムの挑戦〜リノベーションのリアル	● 支部復活55周年記念東海支部特集	● 第21回 会員作品“私の空間作法”	● あかり・文化・創造	● これからの学びのかたち	● 第62回青年技術者	● 建築の価値	● 空き家と向き合う	● 職人がいなくなる!!オリンピックと10年後に備えて	● 形態にあらわれた構造	● 「図面」を変える〜BIMの深化が誘う建設プロセスの変革〜
2016 vol.97	● 都市の記憶をたどって	● 非日常の棲み処〜寝泊まりの進化	● 東海支部特集	● 第22回 会員作品“私の空間作法”	● 人の移動・物の移動・情報の移動	● 第63回青年技術者	● おもてなしと建築	● UR都市機構西日本支社〜暮らし輝く先駆けのまちづくり	● 人口減少社会のまちづくり	● 見えないものを診る〜新たな技術による施工管理・検査システムへの展開〜	● 構造を支える人と技術のつながり	● ボーダレス〜消失する境界と拡張する領域
2017 vol.98	● ニュータウンから学ぶこれからの「計画」	● 第23回 会員作品“私の空間作法”	● 日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100	● 東海支部特集	● 建築設備の伝統と革新	● 第64回青年技術者	● 100年前の建築、100年後の建築〜意匠・空間の視点から〜	● 観光立国を目指した宿泊施設について	● 100年前の建築、100年後の建築〜施工・材料の視点から〜	● 社会と繋がるディテール	● 関西で木と生きる	● 時間軸に挑むクリエイター達〜時をデザインするということ
2018 vol.99	● 東畑建築事務所創設85周年 ● 温泉と暮らす	● 第24回 会員作品“私の空間作法”	● 東海支部特集	● 働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル	● スポーツイベントを支える設備技術	● 第1回片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集テーマ これからの建築と社会―その関係を問う	● 第65回青年技術者	● 平成と建築	● 安全安心な木造建築物の利用促進への取り組みと今後の可能性	● 山と建築―そこに山があるから登るのだ!―	● 重さと関わる	● こだわりの空間料理人
2019 vol.100	● 共生社会のまちづくり	● 第25回会員作品“私の空間作法” ● 京都支部創設70周年記念特集景観とまちづくり―保全・再生・創造―	● 東海支部特集「社会と建築」という流れ	● 建築と社会を繋ぐプロダクション	● 建設業2.0〜価値・意識・生産性〜	● 第2回 片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）募集テーマ：建築をつくるひと―これからの姿を問う	● 第66回青年技術者	● 建築の仮設性と恒久性	● 「災害。逃げる」	● 新素材の可能性―材料の高機能化とハイテク素材―	● 最先端技術と社会	● オープンマインドな空間
2020 vol.101	● 大阪ベイエリアの再生	● 第26回 会員作品“私の空間作法”	● 東海支部特集	● 建築教育の今	● つなぐ	● 第3回 片岡安賞（日本建築協会論考コンクール）テーマ：建築におけるダイバーシティとは	● 第67回青年技術者	● 消費志向の変化と建築〜トキを味わう空間としての建築〜	● 「都市を鳥瞰する」	● 宇宙と建築	● 構造家日記2020〜構造設計者が今感じていること〜	● バーチャルリアリティとダイレクトコミュニケーションがリンクする社会へ―フォターコロナの新しい体験の価値観を考える―

＊は欠号

建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan
日本建築協会
2021 03
Vol.102 No.1188

■特集予告
● 4月号／建築と社会の時代性を考える（仮）
● 5月号／WELL COME（仮）

今月の表紙

撮 影 者：内山貴裕（うちやま　たかひろ）
撮影場所：イタリア・ジェノヴァ
撮影時期：2019年5月

写真について
ジェノバ中心部にあるフェッラーリ広場より東北に伸びる通り「ヴェンティ・セッテンブレ通り（Via XX Settembre）」の一角。
様々なお店が並び定番のショッピングエリアらしい。歴史のある建物に入ったファッショナブルなショップ、というギャップがなぜか楽しかった。

特集　東海支部特集

■東海支部会員作品2021
浜松いわた信用金庫竜洋支店 ―― 6
愛知銀行浄心支店 ―― 8
蒲郡信用金庫岡崎北支店 ―― 9
浜松いわた信用金庫西ヶ崎支店・小松支店 ―― 10
中京大学豊田キャンパス6号館 ―― 12
トヨタ紡織グローバル本社 ―― 14
BINO 栄（日本生命栄ビル） ―― 16
トヨタL&F中部白金オフィス ―― 18
市立伊勢総合病院 ―― 20
名古屋市立東部医療センター入院・診療棟 ―― 22
株式会社デンソー新厚生センター「ミライマ・テラス」 ―― 24
愛和館　－多目的施設－ ―― 26
和歌山都市計画北汀丁地区第一種市街地再開発事業 ―― 28
AUTO TOWN LAB ―― 30

■TOKAI Sketch Book ―― 31

■特集Ⅰ　建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶　第4回
「名古屋市東山植物園温室前館」
1：名古屋市・「名古屋市東山植物園温室前館」●中井孝幸 ―― 34
2：一圓俊郎と東山植物園温室●瀬口哲夫 ―― 35
3：東山植物園温室前館その歴史的価値と保存活用
～重要文化財の指定と保存修理工事●野場裕子 ―― 40
4：東山植物園の成り立ちと特長
～自然と歴史文化を生かした日本有数の植物園●安藤有雄 ―― 44
5：ガラス温室と東海支部復活60周年
～初代支部長一圓俊郎がつなぐ縁●篠原佳則 ―― 46

■特集Ⅱ　納マリ倶楽部
～東海支部青年委員会における30代前後の若手設計者の2020年度活動報告
●塩田哲也、中井孝幸、久保久志、松下拓真、鈴木豊一郎、三宅伸幸、佐藤　剛、鵜飼浩平 ― 47

■東海の建築：ランドスケープ
地域に開放された築山遊歩道と交流テラス
愛知製鋼厚生会館 Ai-terrace●竹中工務店 ―― 51
既存のエレメントを取り込む大屋根空間
中京大学豊田キャンパス6号館●伊藤建築設計事務所 ―― 52
日常から非日常への結界となる象徴的なウェーブ
ラグーナベイコート倶楽部 ホテル＆スパリゾート●安井建築設計事務所 ― 53
名古屋テレビ塔をフィーチャーするランドスケープ
Hisaya-odori Parkの再整備と名古屋テレビ塔の免震リニューアル
●日建設計 ―― 54

会告　若き創造者たちへ「第68回青年技術者顕彰」のご案内　論考コンクール　オンライン公開プレゼンテーションのお知らせ　1
gallery　本庄西の現場●太田　翔／武井良祐　4
入賞発表　第52回　令和2年度　中部建築賞　受賞作品発表　55
法令コーナー　感染症時代に対応した容積率緩和制度の拡充●坂田　悠　56
構造の頁　建築土木一体の海上客船ターミナル　－東京国際クルーズターミナル－●安田拓矢・足立幸多朗　57
再読 関西の建築　小林聖心女子学院●玉田浩之　58
建築と社会を考える　「使う」がつなぐ建築と社会～解体と再編の時代に～●山田あすか　60
Member's Forum　U-35委員会企画　7th action　「建築と水辺」活動報告　64
information　あやしい絵展／凝然国師没後七百年　特別展　鑑真和上と戒律のあゆみ／東山魁夷　唐招提寺御影堂障壁画展／石内都展　見える見えない、写真のゆくえ／適格請求書等保存方式（いわゆるインボイス制度）事業者登録申請について　74
月間の動き　2021年1月　76

まち　建築　ひと

gallery

本庄西の現場

建築家

OSTR
太田 翔/武井 良祐





カフェや雑貨屋が立ちならぶ中崎町が隣接しつつ、住宅や町工場や居酒屋など、さまざまな用途が混在する［本庄西］エリアにある設計事務所です。既存建物の歴史や空間性を考慮しつつ、自分たちで完結しない、生き続けるスペースを運営しています。
このプロジェクトは、構造補強と床のコンクリートと設備の取り回しのみを行っていますが、それ以外は極力手を加えていません。完成時、我々が事務所として使うこと以外用途は決めていませんでした。突然カフェをやりたいという人がいるかもしれないし、ギャラリーや工房、もしくはやっぱり事務所を拡大したいとなるかもしれません。そういう状況になったときにすぐ動ける設えとしています。壁は下地の状態で止めていたり、設備配管は砂利の下に入れて容易に取り換え可能になっています。空間自体も、大きな余白として残しています。結論を極力先延ばしし、だれかに求められたときにその姿に変えられる状態が望ましいと考えました。
建築の「現場」において、竣工に向けて設計者や施工者が試行錯誤しながら少しずつモノを立ち上げていきますが、この場所でも、あえて下地のままで止めておき、みんなで考えながら空間を立ち上げています。
用途を決めていない「余白」をもつこのプロジェクトを「完成に向けて進み続ける」状態＝［現場］と呼ぶことにしました。

太田　翔（オオタ　ショウ）

1989	兵庫県神戸市生まれ
2013	京都工芸繊維大学大学院建築設計学専攻修了
2013-2019	株式会社昭和設計
2019-	株式会社OSTR

武井　良祐（タケイ　リョウスケ）

1989	福岡県福岡市生まれ
2013	横浜国立大学大学院Y-GSA修了
2013-2016	株式会社日本設計
2019-	株式会社OSTR

HP：https://www.ostrarchi.com/





企画編集：髙木秀晃（作品作風小委員会）
写　　真：大竹央祐

東海支部会員作品2021

浜松いわた信用金庫竜洋支店

愛知銀行浄心支店

蒲郡信用金庫岡崎北支店

浜松いわた信用金庫西ヶ崎支店・小松支店

中京大学豊田キャンパス６号館

トヨタ紡織グローバル本社

BINO 栄（日本生命栄ビル）

トヨタL&F中部白金オフィス

市立伊勢総合病院

名古屋市立東部医療センター入院・診療棟

株式会社デンソー新厚生センター「ミライマ・テラス」

愛和館　ー多目的施設ー

和歌山都市計画北汀丁地区第一種市街地再開発事業

AUTO TOWN LAB

『建築と社会』東海支部特集特別編集委員会
委　　員　　長：篠原佳則
特別記事担当委員：中井孝幸、塩田哲也
作品作風担当委員：土井敬三、今井　亨
委　　員（順不同）：河田克博、福田泰造、佐伯　博、加藤武範、冨田昌志、本梅　誠、宮丸孝史、夏目欣昇、川本直義、
寺西裕二、松元親司、今津芳清、西澤太良、芳山明久、野呂和弘、澤田康司、片山友見、服部昇平

浜松いわた信用金庫竜洋支店

建　築　主　浜松いわた信用金庫
設計・監理　日建設計
施　　工　イトー

所 在 地　静岡県磐田市豊岡
敷地面積　2,126.39㎡
建築面積　　657.3㎡
延床面積　　819.57㎡
構造規模　RC造、一部S造、地上２階
工　　期　2019年３月～2019年12月
最 寄 駅　JR東海道本線　磐田駅
撮　　影　株式会社鈴木文人写真事務所

建築デザインを通じて「地域に開く」企業姿勢を表現することを試みると共に、「インパクトのある外観」と「居心地の良い内部空間」を目指した。
街区の魅力向上を通した地域への貢献を意図し東西２つの道路を結ぶ通り抜け空間を設け、敷地内に人の流れを生み出す計画とした。建物は通り抜け空間に沿って両手を広げたような形状とし、地域に開かれた店舗であることを建築の姿に示した。
ロビーは手続きの待ち時間を忘れさせるような居心地のよい空間を目指した。緩やかな弧を描く曲面天井には設備器具を一切設置せず、幅50㎜の天竜杉小幅板を用いて純粋で無垢な表情に仕上げた。杉特有の色味のばらつきによって線が群れを織りなし、空間の伸びやかさが強調されている。また窓辺にも杉のルーバーを設けることで、ロビー空間全体に杉のやわらかな質感と芳香が満ちている。

（塩田哲也、藤田俊洋／日建設計）


曲面壁と大屋根を組み合わせたおおらかな外観


来客をいざなう円弧状のギャラリー





緩やかな弧を描く曲面天井がロビーを覆う



夜景　柔らかな光をまちに届ける



外観　南側正面

愛知銀行浄心支店

建　築　主　愛知銀行
設計・監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　大井建設

所 在 地　愛知県名古屋市西区秩父通２丁目84番地
敷地面積　427.99㎡
建築面積　321.09㎡
延床面積　480.82㎡
構造規模　S造、地上２階
工　　期　2020年３月 ～2021年１月
最 寄 駅　名古屋市営地下鉄鶴舞線　浄心駅
撮　　影　CENTER PHOTO JAPAN

長年地域から親しまれてきた支店の老朽化に伴う建替えである。
敷地の南に面した環状線（秩父通）の東西の流れと、交通量の多い敷地西側市道の南北の流れに対して、袖壁と一体的につながる庇のフレームを回し、庇とガラス面の配置によって周辺道路の動きに沿ったデザインとした。
１階は来客者の安全に配慮し、交通量の多い西側市道は壁面とし、南側道路の歩道からのアプローチとした。また南側道路に対してはガラス面と庇のフレームで店舗の正面性を強調した。２階部分は近隣環境に配慮し、西側道路からセットバックした形状とした。西面から南面にかけて連続するガラス面を設け、透明感のある明るい建物とした。
アプローチとなるスロープの壁面は愛知銀行のコーポレートカラーとなるタイルを配置し、従来の支店のデザインもアクセントとして採用した。

（冨田昌志、大河内直哉、柴田沙希／伊藤建築設計事務所）



外観　南西面



外観

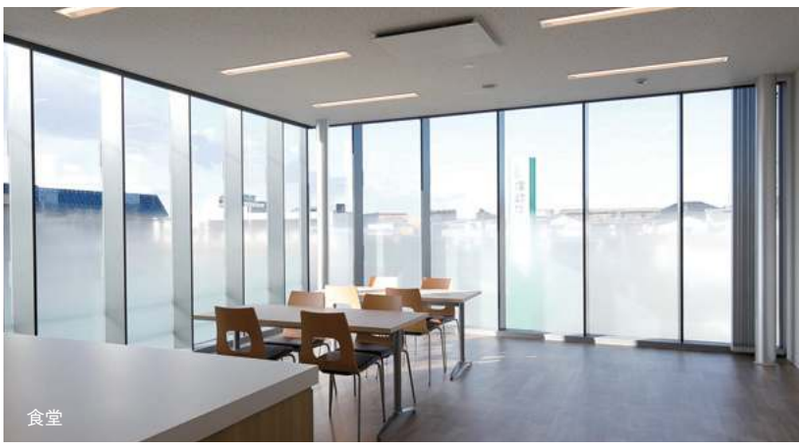
蒲郡信用金庫岡崎北支店

建　築　主　蒲郡信用金庫
設計・監理　大林組名古屋支店一級建築士事務所
施　　工　大林組名古屋支店

交通量の多い交差点の角地という好立地を活かし、地域に親しまれる店舗にしたいという施主の想いから、地域に溶け込むような建物の姿を目指した。
ファサードは彫を浅くフラットにすることで、まちと信用金庫とのバッファーを最小化することを意図した。ATMコーナーやロビーだけでなく、普段来客者が利用することのない会議室や食堂についても均質なガラス面上に配置することで、内部の活動が外部に滲み出し、まちに開かれた親しみやすいファサードとなっている。
押縁を最小限としたフラットな印象のガラスカーテンウォールは、季節や時間の移ろいにより表情を変えるまちなみを映し出し、地域特産の三州瓦をモチーフとした特殊塗装の外壁は、光のあたり方により刻一刻と表情を変える。各所のディテールをミニマルに収めてシンプルなヴォリュームを強調し、それぞれのマテリアルを同じモデュール上に配置して等価に扱うことで、マテリアルの表情がより強く意識されるよう意図した。
ランニングコストの低減にも配慮した。幅900mmのECPや押縁を最小限としたガラスカーテンウォールの使用によりシール数を削減し、漏水リスクの少ない折板屋根や補修が容易な高耐久ウレタン防水を使用した。凹凸が少ないヴォリュームとし、清掃性の良いガラスカーテンウォールや汚れの目立ちにくい自然な風合いのある外壁塗装材を使用することで、日々のメンテナンスも容易となっている。
シンプルなヴォリュームの中に豊かな表情を湛え、長く地域に愛される建築となることを願っている。

（佐畑勇樹／大林組）

所 在 地　愛知県岡崎市百々町四ツ谷33番１
敷地面積　1,172㎡
建築面積　　334㎡
延床面積　　627㎡
構造規模　S造、地上２階
工　　期　2020年５月～2020年11月
最 寄 駅　愛知環状鉄道線　大門駅
撮　　影　株式会社リフレクト


食堂



ロビー



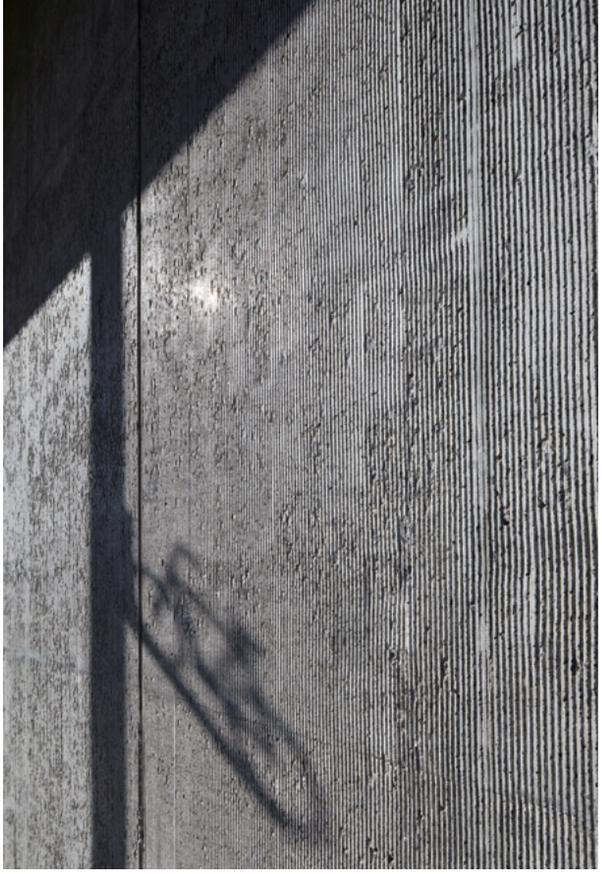
外観

浜松いわた信用金庫
西ヶ崎支店・小松支店

建　築　主　浜松いわた信用金庫
設計・監理　日建設計
施　　工　飯田組

浜松駅より約10km北上した住宅街に建つ信用金庫支店の計画。
住宅地に建つ建物として、建物高さは最小限にすると共に主要道路に面する壁面は分割・分節されて見えるように計画し、住宅街の街並みとの調和を図った。
不整形な敷地ではあったが、間口の広い南面に向かって、長さ約40ｍの大庇を設け、支店の顔作りをすると共に歩行者のための通路位置を示すサインとしての機能も兼ね備えている。
構造は諸般の理由によりコンクリート造を選択することになったが、人に近接するコンクリート壁面は「チェーン引き」という打放し面を人の手で”けがき”、骨材に使われている天竜川砂利が表出する壁面とし、地産地消のコンクリートを演出した。
シンボルツリーには地元でも庭木によく使われるキンモクセイを採用し、色や香りで四季を演出し、地域の新たな原風景として親しまれることを期待している。

（塩田哲也、神山義浩、Lauren.L／日建設計）



コンクリートチェーン引き仕上げ



大庇と軒下歩行者用通路

南正面でお客様を迎える東西40mの大庇とチェーン引き壁



住宅街の街並みに配慮したボリュームと壁面操作


水平・垂直の構成を強調したロビー

所 在 地　静岡県浜松市東区西ヶ崎
敷地面積　1,572.98㎡
建築面積　　517.24㎡
延床面積　　711.15㎡
構造規模　RC造、地上２階
工　　期　2020年１月～2020年８月
最 寄 駅　遠州鉄道　西ヶ崎駅
撮　　影　株式会社鈴木文人写真事務所

中京大学豊田キャンパス６号館

建　築　主　学校法人 梅村学園
設計・監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　大林組名古屋支店

所 在 地　愛知県豊田市貝津町床立101
敷地面積　160,069.65㎡
建築面積　［教室棟］2,828.59㎡　　［屋内走路棟］1,628.36㎡
延床面積　［教室棟］2,698.25㎡　　［屋内走路棟］1,626.61㎡
構造規模　［教室棟］S造、地上１階　　［屋内走路棟］S造、地上１階
工　　期　2019年４月～2020年８月
最 寄 駅　名鉄豊田線　浄水駅
撮　　影　エスエス名古屋支店

６号館は豊田キャンパス総合整備計画の一環として、文教機能をもつ教室棟とスポーツ機能をもつ屋内走路棟の２棟が整備された。
教室棟の大屋根は躍動感をイメージさせる特徴的なアール形状に、格子状の母屋を採用することで屋根と構造躯体を一体化し、剛性を高めている。格子状の母屋は直天井とした室内のデザイン要素としても機能するとともに、地震時の天井脱落を無くすことにも寄与している。キャンパス内の既存施設との連続性を考慮してアーチ形状の列柱を設け、周囲に調和した施設とした。屋内走路棟は教室棟とは対照的に水平のスカイラインを強調し、疾走感をもった外観とした。
教室棟は500名収容の大教室、演出照明や音響設備を備え、ダンス等の講義や課外活動で使用できる多目的室、屋外競技の練習スペースとして利用できる屋内人工芝グラウンドで構成される。大教室は床吹出空調を採用し空調効率を向上させている。
南北をつなぐロビーは、豊田の森林をイメージした暖かみのある空間としており、各室へアプローチすることができる。教室や多目的室はガラスカーテンウォールとし、天然木の暖かみを活かした内装とすることで、開かれた明るい空間の中で学生が主体的に学べる場となっている。また、トランスジェンダーの「トイレに入る際の視線」を低減させる動線や、多目的トイレの設置、わかりやすいサインにより誰もが使いやすい共用空間が設けられている。
屋内走路棟は余長を含めた全長が120mのストレート走路を備え、日本陸連の公認を取得している。床は全天候型のタータン舗装となっており、天候に左右されずに練習できる環境が整備されている。
（神保朋之、稲垣志聞／伊藤建築設計事務所）

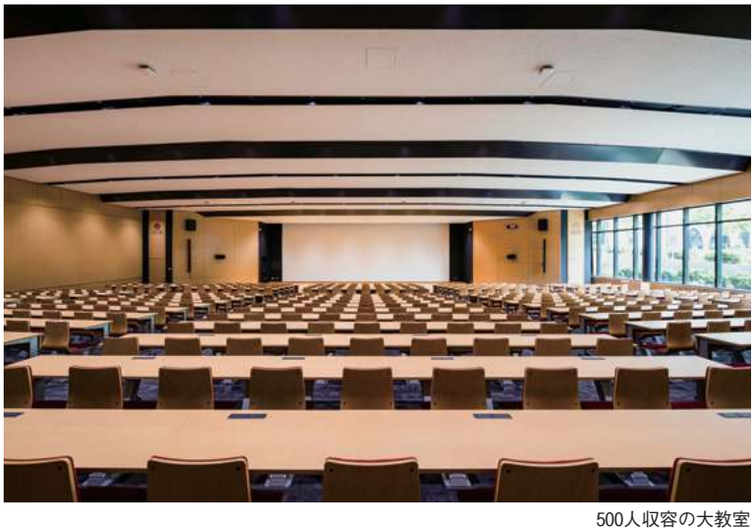


屋内走路棟





南北をつなぐロビー


500人収容の大教室

教室棟



演出照明を備えた多目的室



120m屋内走路

トヨタ紡織グローバル本社

建　築　主　トヨタ紡織株式会社
設計・監理　竹中工務店
施　　工　竹中工務店





ファブリックスクリーンからのやわらかな光に包まれる製品展示スペース ＊2

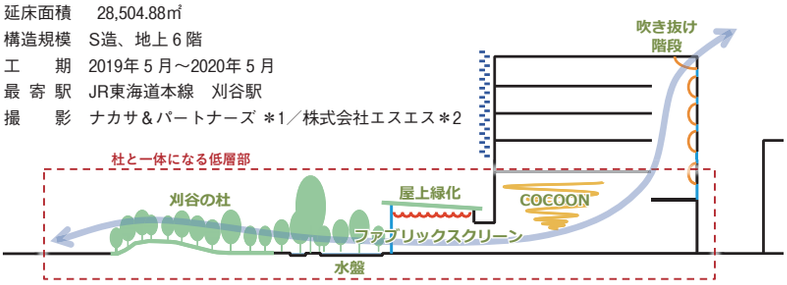
織物を起源に自動車などのシートを主力とし様々な分野に挑み続けるメーカーの創業100周年事業。培ってきた普遍的な価値を土台に次の100年を見据え、コーポレート機能を集約しグローバルの経営基盤を更に強固なものにすると共に社内外との連携強化の拠点として活用することで、成長戦略の実現に向けた取組みを加速させていくことを狙いとした本社である。

創業者・豊田佐吉が初めて工場を建設し今も工場群に囲まれる敷地において、外部に正対する場所に建物を配置した。青空駐車場であった場所に既存樹木を保存しながら建物を囲む「刈谷の杜」をつくり、人の居場所を中心とした新しい環境づくりをした。杜までを含めてひとつながりの空間と捉えてプランニングを行い、ZEB-Ready、サステナブル建築物先導事業（省CO_2先導型）採択などの高い環境性能を持つ。杜と一体となる低層部には創業の風景を想起させるレンガ壁やノコギリ屋根をモチーフにこれまでの100年の記憶を残した。上層部は南面の眺望を確保しながら年間の日射負荷を65%低減する立体的に編み込んだ形状の「紡ぎ織るスクリーン」を纏わせて、これからの100年に相応しい構えとした。

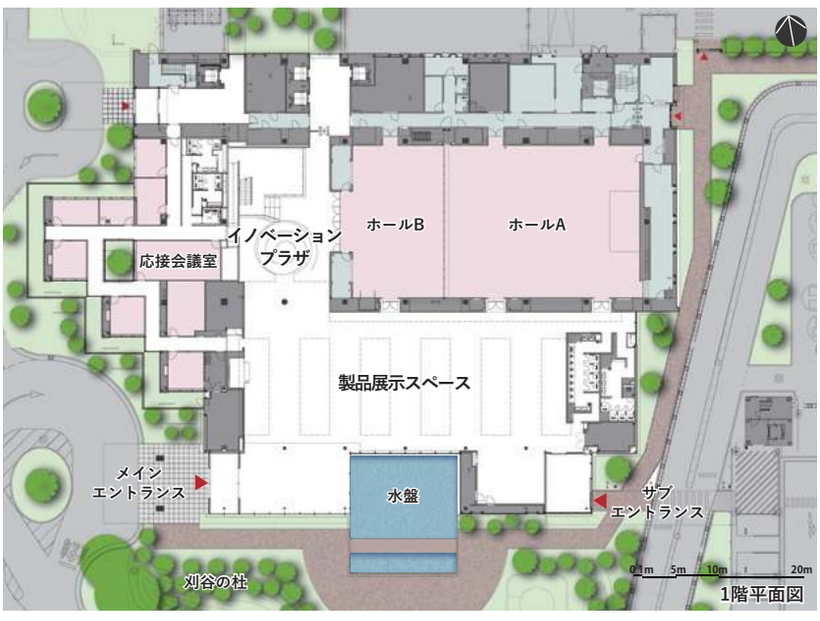
「紡ぎ織るスクリーン」をはじめとする外部環境の制御に加え、「刈谷の杜」からの自然の風の取り込み、ハイサイドライトなどによる自然光利用、高効率の空調システム、雨水の水盤や屋上緑化の灌水への利用など、自然の力を積極的に利用することで、エネルギー消費量を同規模の一般的なオフィスビルと比較して52%削減した省エネ・ウェルネスオフィスを実現した。

（長谷川寛・石黒紘介・杉森大起／竹中工務店）

所 在 地　愛知県刈谷市豊田町1-1
敷地面積　103,598.42㎡
建築面積　6,454.45㎡
延床面積　28,504.88㎡
構造規模　S造、地上６階
工　　期　2019年５月～2020年５月
最 寄 駅　JR東海道本線　刈谷駅
撮　　影　ナカサ＆パートナーズ ＊1／株式会社エスエス＊2




杜と共存する省エネ・ウェルネスオフィス ＊1



1階平面図


イノベーションプラザに浮かぶ発想の繭「COCOON」＊1

BINO 栄（日本生命栄ビル）

建　　築　　主　日本生命保険相互会社（本体）　株式会社パルコ（店舗共用部）
設　計　・　監　理　安井建築設計事務所
施　　　　工　竹中工務店・太啓建設共同企業体
内　装　監　理　スペース（テナント工事）
内装設計・施工　スペース（店舗共用部）

金色ガラスを散りばめた外装



空撮

名古屋の商業集積地である栄地区の一等地における、物販と飲食テナントが多数入居する商業ビルの計画である。
計画地は、広小路通りの南側に広がるショッピング街と北側の繁華街との境にあり、昼と夜の両方において街のランドマークとなるよう、名古屋ならではの「金シャチ」に通ずるきらめきをカーテンウォールに散りばめた金色ガラスで表現した。
刻々と変化するトレンドやニーズに呼応する商業施設という用途に対して、時間が経っても陳腐化しない表情としながら消費が生み出す喜びや楽しみを内包したトキメキを感じられる建築を目指した。
日暮れと共に高まる高揚感を 金色ガラスのきらめきが演出する。

（益田正博、藤井裕子／安井建築設計事務所）





広小路通り（南側）より望む


5階飲食店舗フロアのEVホールを望む


1階エントランスとエスカレーターを望む

■地下街との内部接続
BINO栄では従前のドライエリアを介した地下街との接続ではなく、
名古屋市地下街基本方針における接続基準の規制緩和による付室形式での接続を実現した。
地下街（サカエチカ）のバリアフリールートとしての機能も合わせ持ち、
BINO栄のスロープやエレベーターを利用した地上との連絡が可能となった。

所 在 地　愛知県名古屋市中区錦三丁目
敷地面積　1,083.99㎡
建築面積　963.46㎡
延床面積　6,341.32㎡
構造規模　S造、一部RC・SRC造　地上6階、地下2階
工　　期　2019年2月～2020年11月
最 寄 駅　地下鉄東山線　栄駅
撮　　影　株式会社エスエス名古屋



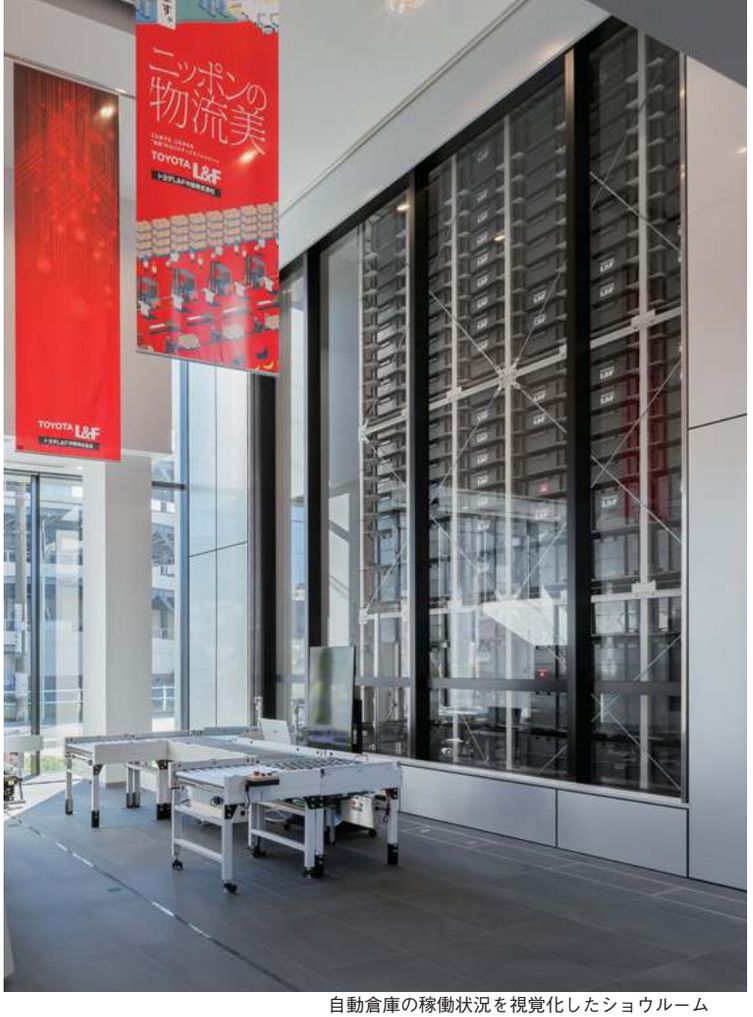
地下街から接続通路を望む

トヨタL&F中部白金オフィス

建　築　主　トヨタL&F中部株式会社
設計・監理　安井建築設計事務所
施　　工　ヒメノビルド

トヨタL&F中部は、多様化する物流のソリューションを総合的に提案する企業で、東海３県に30近い営業拠点を展開している。本施設は高辻営業所としての機能に加え、一部本社機能を併せ持っており、事務室・整備工場・ショウルーム・フォークリフト運転技能講習場等の多様な用途を、敷地内に平面的・立体的に最大限に組み合わせた複合的な建築物である。
RC造３階建ての事務所、S造２階建ての整備工場、S造３階建てのショウルーム・講習会場といった様々な要素をつなぎ合わせる為に、それらをEXP.Jで接続し、中庭を中心に構成した分かりやすい平面計画とした。事務所は屋上をフォークリフトの運転講習に利用する為RC造とし、PC梁による12ｘ22ｍの無柱空間を確保し、事務室としての汎用性を高めると共に、部門が異なる社員同士の交流を促進するよう、中庭に面してコミュニケーションラウンジを設けた。
ソリューションの多様性をアピールするように、サッシ越しに自動倉庫を視覚化したショウルームや整備工場を望める見学通路を設置し、建物内のあらゆる箇所からそれらを体感できる「建物全体のショウルーム化」を実現している。
外観は、企業カラーの白とグレーを基調に、PC板、ECP、ALC、RC、金属サイディング等、多様な素材を組み合わせ、多様性を表現。ショウルームは、物流とそのスピード感をBOXと線形のデザインで実現した。
地域貢献活動としての講習会場等の災害時避難場所転用や、フォークリフトの廃バッテリーを直流給電装置に活用し太陽光発電の高効率運用を可能にするなど、地域や地球環境にも配慮している。

（清水　満、三宅伸幸、筧　政憲／安井建築設計事務所）



自動倉庫の稼働状況を視覚化したショウルーム

所 在 地　名古屋市昭和区白金三丁目7-12
敷地面積　3,706.03㎡
建築面積　2,345.63㎡
延床面積　3,690.25㎡
構造規模　RC造一部S造　地上３階、塔屋１階
工　　期　2019年９月～2020年６月
最 寄 駅　JR東海道本線　金山駅
撮　　影　アーキフォトKATO



BOXと線形のデザインで物流のイメージを表現したショウルーム外観



多様な要素を立体的に組み合わせた外観



交流・憩いの中心空間となるコミュニケーションラウンジ



無柱空間を確保した事務室



整備工場（左手）を望める見学通路



建物の中心に設けた中庭



企業イメージを具現化したサイン

市立伊勢総合病院

建　築　主　伊勢市
設　　計　安井建築設計事務所
監　　理　安井・南勢特定建設工事監理業務共同企業体
施　　工　清水建設・吉川建設・伊藤工務店・山信工業・シンフォニアエンジニアリング特定建設工事共同企業体



本計画は市立伊勢総合病院の現地建替計画である。伊勢市固有の豊かな自然風土や歴史文化に育まれた景観にふさわしいデザインが求められた。
外構は周囲の山並みや田園風景と調和する計画とし、アプローチ部には雨水貯留槽上部を活用したホスピタルガーデンを設置した。１周80ｍの散策路と芝生広場にはADL遊具やパーゴラを配置し、患者だけでなく市民の健康増進スペースとして開放している。また、東西の敷地のレベル差を利用し、１，２階に車両アプローチを設置している。当敷地は津波や洪水時の影響は受けないが、東側国道は洪水時には冠水の可能性がある。その際も西側道路から２階へ車両でのアプローチが可能な災害に強い計画としている。
外装においては「生成りの文化のまち伊勢」の市立病院として、素材の風合いを活かした計画とし、地元産杉材や伊勢瓦を採用している。また、町並みのスケールに合わせるため、ワンフロア３看護単位の病棟計画として建物高さを抑え、分節化した外観デザインとした。建物高さを抑えるため建築面積の大きくなった建物に対して、７つの光庭と３つの屋上庭園を効果的に配置し、光・風・緑を取り入れた明るく快適な療養環境を提供している。
内装は、白木や白を中心とした明るくあたたかみのある色彩計画とし、日本の伝統色に伊勢型紙の模様を施したビジュアルサインをアクセントとしている。

（中原岳夫、山本善宏、高野直樹、篠原佳則／安井建築設計事務所）

所 在 地　三重県伊勢市楠部町3038
敷地面積　32,362.65㎡
建築面積　 8,156.48㎡
延床面積　26,108.22㎡
構造規模　RC造一部S造（免震構造）、地上７階
工　　期　2017年１月～ 2018年９月（解体・外構を含む
　　グランドオープン：2020年３月）
最 寄 駅　近鉄鳥羽線　五十鈴川駅
撮　　影　米田正彦／米田正彦写真事務所



素材そのものの風合いを活かしたシンプルな外観デザイン



鳥瞰：伊勢志摩国立公園の山並みをのぞむ



緑に囲まれたアプローチ



中央待合　素材感を重視した和テイストの内装デザイン



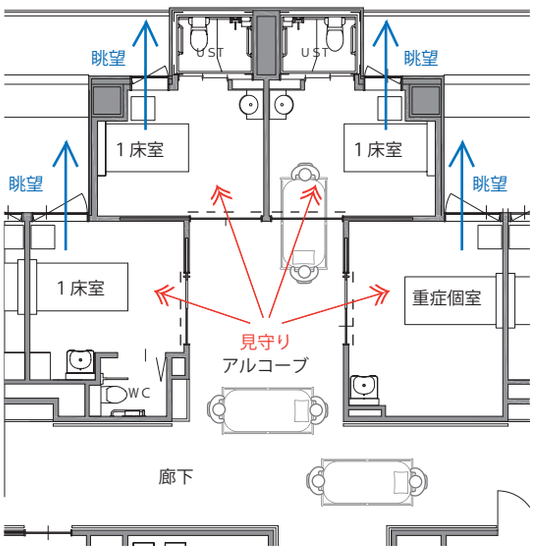
光・風・緑を取り込む光庭を配置した外来待合

名古屋市立東部医療センター入院・診療棟

建　築　主　名古屋市
設　　計　名古屋市住宅都市局営繕部営繕課、安井建築設計事務所
施　　工　大成建設株式会社（建築工事特別共同企業体代表企業）

旧東市民病院全面建替えにおける免震構造、ヘリポートを設けた8階建ての入院・診療棟の整備である。H26年に開棟した４階建て救急・外来棟と各階で連結し、一体的に運用されている。
31m高度地区の都心の限られた敷地において、診療・療養環境の両立を目指した。救急・外来棟とフラットに接続するため、BIMによる検討により、3.5ｍの階高で天井高2.5ｍの快適な病室空間を実現した。病院全体のエネルギーセンター棟は、入院・診療棟と同一構造でのツインタワーとし、設備機器の大きさに合わせた階高とすることで建物ボリュームを合理化し、限られた高さと広さに必要な機能を詰め込んだ。
病室は南側に個室的４床室、千種公園がある北側に１床室を配置し、全ての入院患者のベッドからの眺望を確保した。アルコーブを中心に４室を重ねたアルコーブ付個室ユニットにより、狭小な建設敷地において必要な個室率を確保した。コンパクトな空間でありながら、広い病室扉とアルコーブにより容易にベット移動できる計画としている。外観デザインでは、個室トイレシャワーの有無をそのまま表出させている。
個室ユニット中央のアルコーブは、看護拠点として機能することを想定した。実際にプライバシーを確保したい患者は扉を閉めているが、扉を開放しキュービクルカーテンだけ閉めている病室も多い。アルコーブにカートや車いすを置いて、頻繁にスタッフが出入りする姿も見られる。
１階２階は、放射線部門や検査部門を配置し、救急・外来棟と一体的に活用できるように２層のメディカルコリドールを設けた。ガラス張りの階段を中心に、救急・外来棟のエントランス空間につながる動線とした。北側の千種公園に連続するロータリーを中心としたアプローチ空間を想定して計画した。
無機質になりがちな病院において、「心を癒すやさしい環境」とする為に、メディカルコリドールを中心にヘルスケアアートを実施した。職員ワークショップによりテーマやストーリーを決め、竣工後に多くの職員が製作に参加し、東部医療センターならではのアートが実現している。

（篠原佳則、三宅伸幸／安井建築設計事務所）

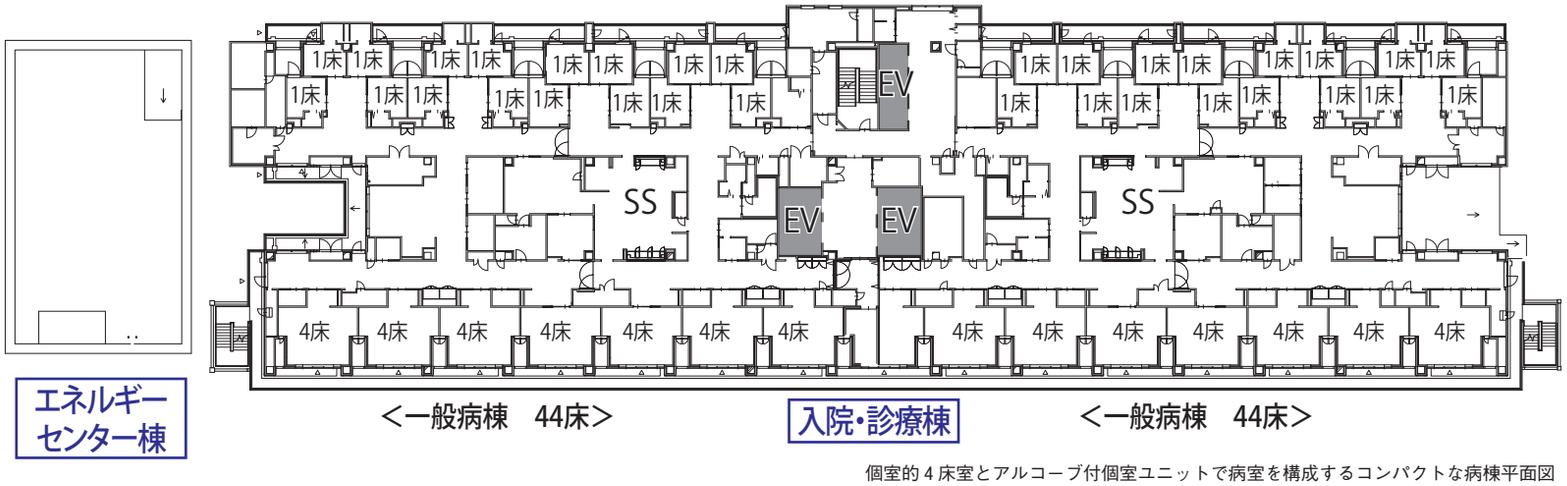


アルコーブ付個室ユニット平面イメージ図



個室ユニットの機能が表出した入院・診療棟北側立面、手前はエネルギーセンター棟

所 在 地　名古屋市千種区若水一丁目２番23号
敷地面積　27,494.09㎡
建築面積　 4,844.39㎡
延床面積　28,455.21㎡
構造規模　S造（基礎免震）　地上８階、塔屋１階
工　　期　2016年11月～2019年８月
最 寄 駅　JR中央線　千種駅
撮　　影　センターフォト、アーキフォトKATO*



個室的４床室とアルコーブ付個室ユニットで病室を構成するコンパクトな病棟平面図



看護拠点としても機能する個室ユニットのアルコーブ*



ベッドからの眺望を確保したシャワートイレ付１床室



４床室前のアルコーブとスタッフステーション*



千種公園の銀杏がテーマのヘルスケアアートと視認性の高い階段で繋がる
２層のメディカルコリドール



株式会社デンソー新厚生センター「ミライマ・テラス」

建　築　主　株式会社デンソー
設計・監理　日建設計
施　　工　奥村組、関電工、ダイダン

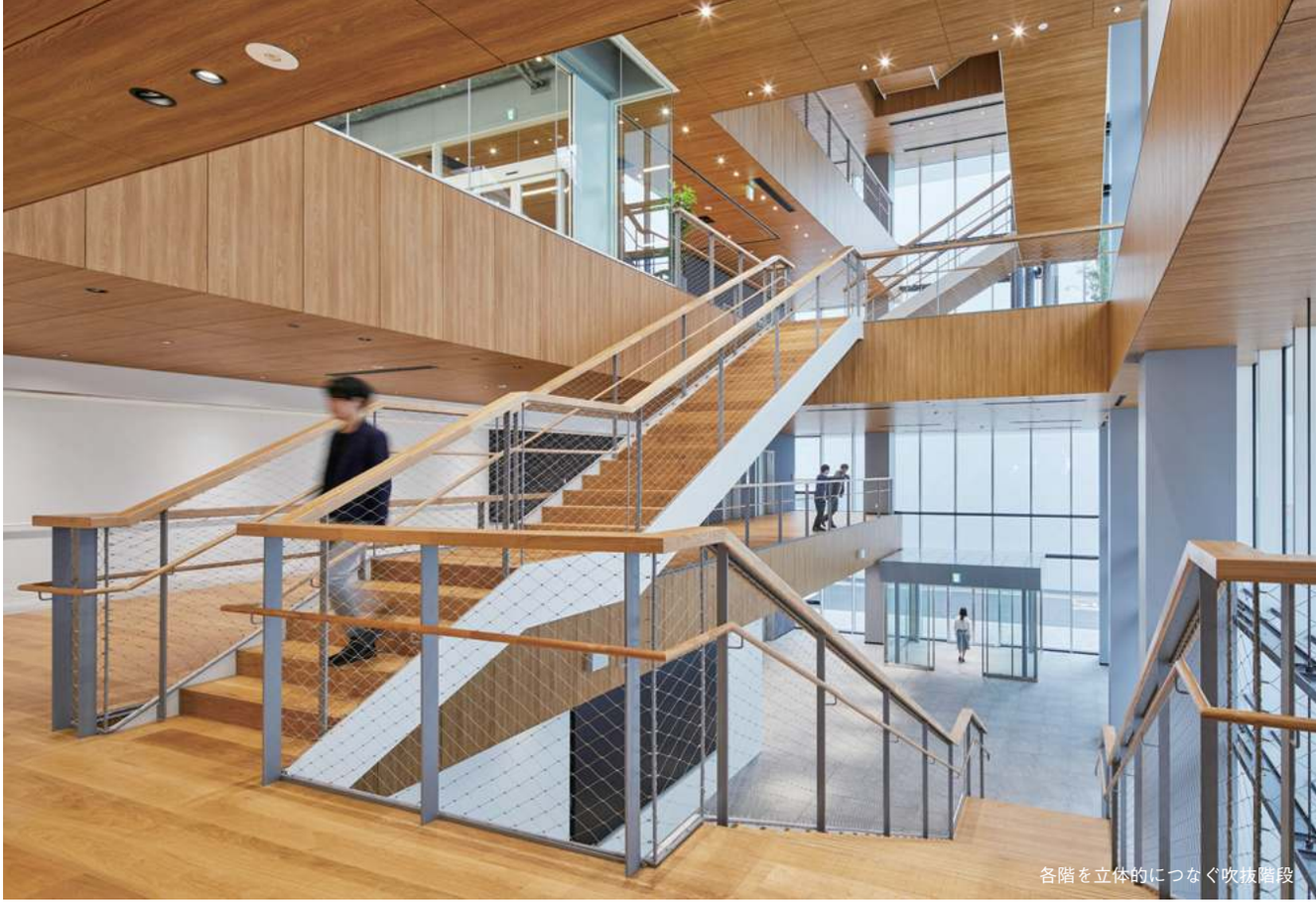
所 在 地　愛知県刈谷市昭和町
敷地面積　236,859.48㎡
建築面積　2,455.17㎡
延床面積　9,898.88㎡

構造規模　S造、地上６階
工　　期　2019年４月～2020年８月
最 寄 駅　JR東海道本線　刈谷駅
撮　　影　株式会社鈴木文人写真事務所

デンソー本社内厚生棟の建替え計画です。プロジェクトコンセプトと施設名は「ミライマ・テラス」デンソーの未来と今を照らす場所を目指して計画しました。分散していた５つの用途を集約一体化させるため、アクティビティに相応しい階に積層しました。そして、動線の結節点となる南東角に設けた居間のような居心地の良い木空間は、吹抜けと階段で立体的につなぐことで、アクティビティ毎に異なるユーザーの偶発的な出会いと交流を促します。
建築計画の特徴としては、柱スパン7.2mグリッドを基本モジュールとして、内部は木空間と対照的なフレキシビリティの高い天井表し空間としました。また、大スパンであるアリーナ・フィットネスルーム・トレーニングジムを配置する上階は、振動と音を考慮しています。
外観デザインの特徴であるPC版のテラスは、本社全体の建物と調和させつつ、内部の活動を外に引き出す役割があります。建物のピロティ下には毎日5,000人が出入りするセキュリティゲートがあり、ふらっと入りやすい透明感のあるガラスファサードは、仕事帰りには内部の活き活きとした雰囲気が光と共に外に溢れ、人々を誘引します。
「ミライマ・テラス」が、社内のサードプレイスとしての日常的な業務、心と身体の健康促進、社内外イベント等の企画運営によりデンソー社員の今を充実させ、さらに仲間との交流により、新しいことにチャレンジすることで未来を切り開くきっかけになることを願っています。

（村井達也、鈴木豊一郎、樅山由佳、山口薫平／日建設計）

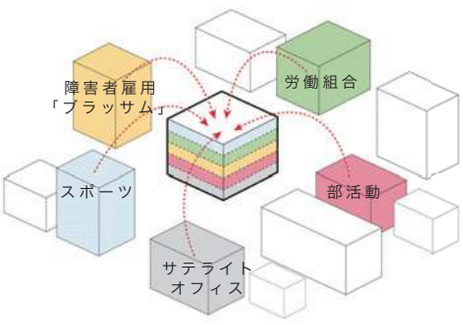




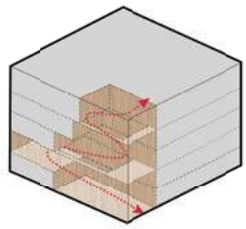
各階を立体的につなぐ吹抜階段



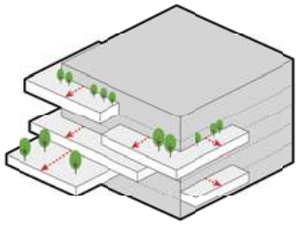
フレキシブルな利用とコミュニケーションを誘発する「つながる場」



多様なアクティビティ、ユーザーを集約



各階を立体的につなぐ「居間」



「テラス」を引き出し、魅力的な活動を「照らす」



ガラス張りの労働組合執務室とコミュニケーションスペース



トレーニングジム



西側鳥瞰／列柱に囲まれた芝生広場を前景に大階段とカーテンウォールで正面性を表現



南西側外観／丹頂鶴をイメージしたなめらかな大屋根

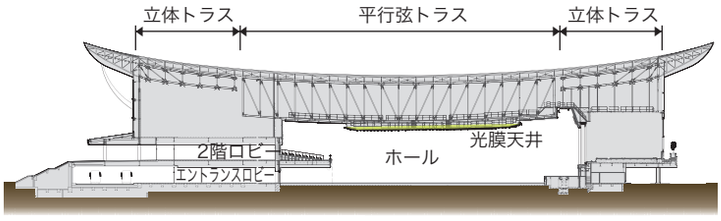
愛和館　－多目的施設－

設計・監理　大林組一級建築士事務所
施　　工　大林組

飛騨高山に舞い降りた丹頂鶴
祭事や文化行事等を行うことができる多目的施設を中心として、バスターミナル機能を持つ待機所、エネルギーセンター、バイオマス発電と水素製造等を行うクリーンエネルギー棟で構成された全体整備計画である。
外観は「丹頂鶴が羽を広げて飛翔する姿」をイメージした緩やかな曲面のステンレス鋼鈑による大屋根と、楕円形状の外壁、列柱によるピロティ形式の基壇部というシンプルな構成とし、大階段・大庇・ガラスとパネルを交互に配したカーテンウォールにより建物の正面性を強調したデザインとした。
約8000人収容のホールの大空間（幅63m×奥行80m、天井高13.5m～17m）を実現する為にハイブリッドトラス構造による大スパン架構とした。ホール部分は天井形状に合わせることで仕上材を鉄骨に直貼りできる平行弦トラス、端部は舞台機構等天井裏の設備を収納しやすい立体トラスとすることで内部形態に応じた構造とした。
内装は木仕上げを積極的に用いた柔らかなデザインとした。床はナラのフローリング仕上げ、壁は音響に配慮し吸音材を仕込んだ杉の不燃木によるルーバーや凹凸リブパネルによるデザインとした。ベンチは飛騨の匠の技を生かしたオリジナルで折畳み式とし移動・収納を可能にした。天井は大屋根に呼応した長手方向に緩やかな曲面天井とし、幅10m×長さ45mのカラーLED照明を仕込んだ巨大な楕円形の光膜天井を中央に設置した。行事に応じて光と映像の演出が可能な仕掛けとした。
敷地内は遊歩道や憩いの広場を整備して積極的に地域に開放、四季折々に楽しめる彩のある植栽計画とした。本施設は高山市との災害応援協定により災害時の避難所として利用できるようにしている。

（石樽　宣之、松本　憲、篠本　快／大林組）

所 在 地　岐阜県高山市山田町
敷地面積　55,927.62㎡
建築面積　18,143.22㎡
延床面積　23,807.90㎡
構造規模　S造 一部SRC造、RC造、地上２階
工　　期　2016年10月～2020年９月
最 寄 駅　JR高山本線　高山駅
撮　　影　センターフォト



断面構成


西側外観夕景／市松模様のカーテンウォールが夕空を映し込む


エントランスロビー／ホールへのスムーズな移動を促す。木仕上を用いたゆとりある導入空間


ホール内観／ユニット化したルーバーパネルで緩やかな曲面天井を表現


ホール内観／巨大な光膜天井による光と映像の演出

和歌山都市計画北汀丁地区第一種市街地再開発事業

建　築　主　代表施行者　株式会社 和通
　　共同施行者　学校法人 山本学園IBW美容専門学校
設計・監理　東畑建築事務所
施　　工　淺川組

和歌山城下に「みぎわテラス」が誕生した。この施設は、有料老人ホーム、専修学校、分譲住宅、店舗、駐車場の複合施設である。ポイントとなる街角には店舗と公開空地とした庭を確保した。高層棟の２階～３階には高齢者に配慮した「有料老人ホーム」を計画し、中層棟には、美容と健康を追求する「美容専門学校」を計画した。大通りである市駅通りとケヤキ通りの交差点に位置することから、ツインタワーによるフォルムの構成、印象的な和格子によるデザインや壁面緑化と色調は景観上において最も配慮した部分である。
老人ホームの室内は、全体的に落ち着きのある色調とし、個室は個性を作り出せる内装を設え、美容専門学校は、スタイリッシュな白とガラスを多様化し、道行く人に美容を学ぶ憧れや思いを近づけるデザインとした。和歌山城を臨む低層の屋上テラスは、両棟をつなぎ「高齢者と学生が世代を超えて交流する場」と賑わいの創出と周辺との緑による潤いを醸し出し市民の憩いの場として利用されている。「みぎわテラス」は城のあるまちとして後世へつなげ、街が発展することを目指している。

（長谷恭典、野西禎宣／東畑建築事務所）

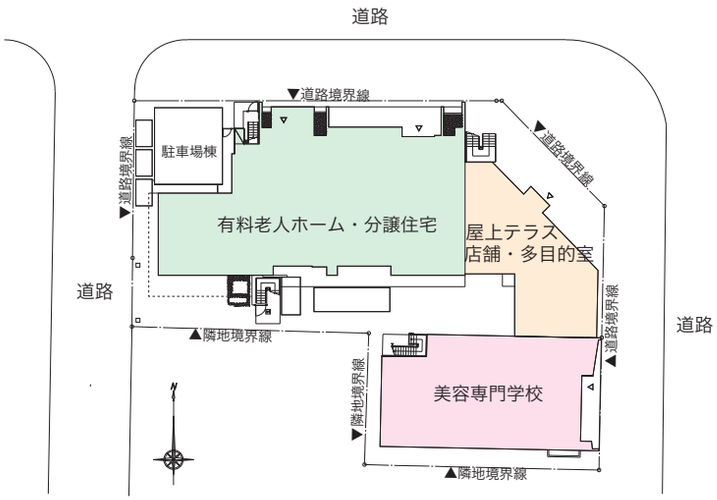
所 在 地　和歌山県和歌山市北汀丁8.13番、南汀丁29番
敷地面積　1,298㎡
建築面積　995㎡
延床面積　7,052㎡
構造規模　RC造、地上13階　S造、地上６階　S造、地上３階
工　　期　2018年３月～2020年６月
最 寄 駅　JR・南海　和歌山市駅
撮　　影　長岡写真事務所



外観　東面



全景





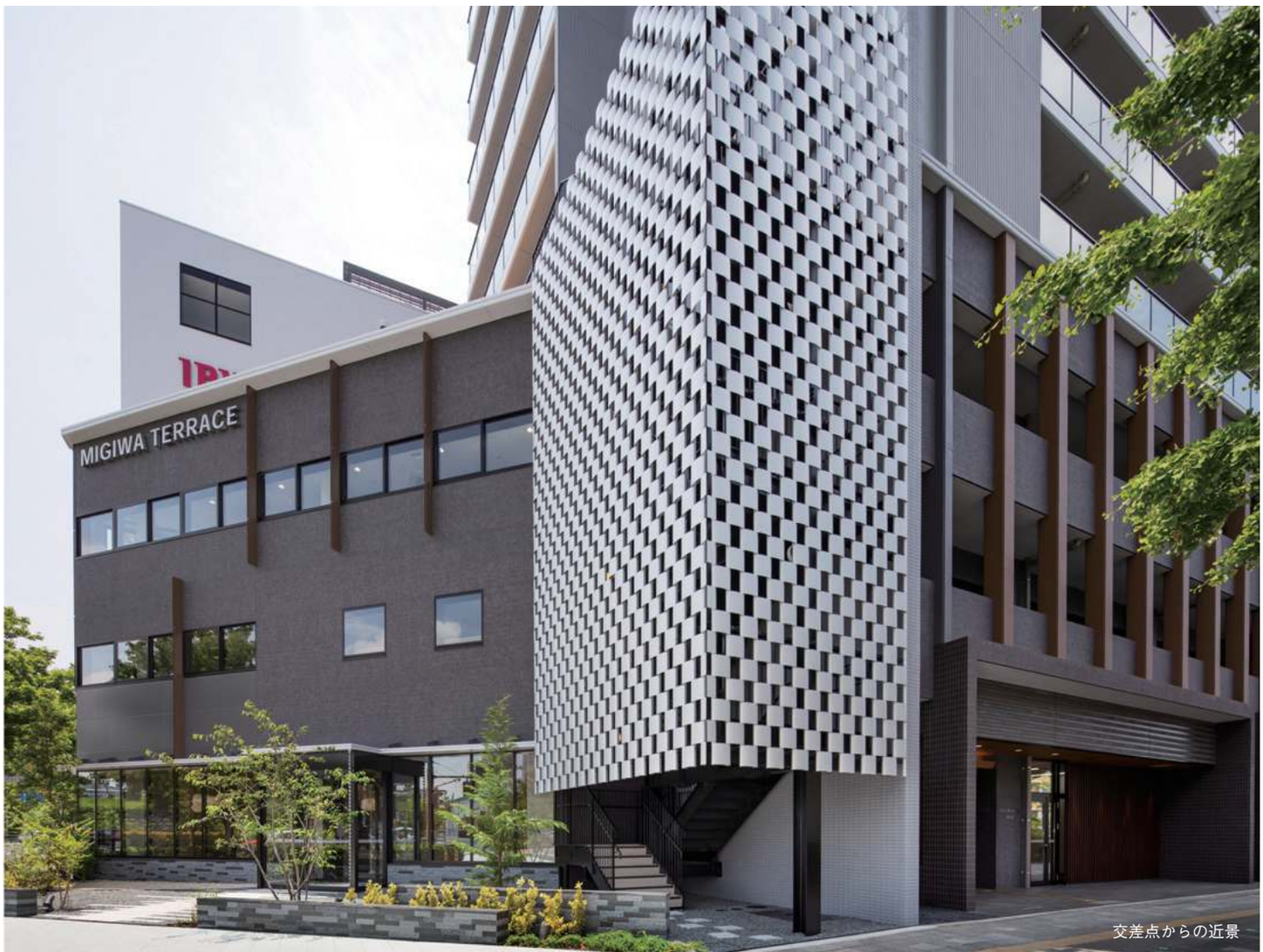
和歌山城を望む 4 階屋上テラス



外部から見える 1 階実習室



有料老人ホーム 2 階多目的室



交差点からの近景



AUTO TOWN LAB

建　築　主　愛知トヨタ自動車株式会社
設計・監理　安井建築設計事務所
施　　工　竹中工務店

車の購入プロセスや利用形態は情報化社会の発展と共に大きく変化し、多様化が加速している。本施設は、それら時代の変化に応対するチャレンジの場として、愛知トヨタを中核とするATグループ本社エリア「オートタウン高辻」の一角に計画された。
建物は店舗棟と駐車場棟で構成され、主機能を担う店舗棟は1F「カフェ併設型キッズパーク」、2F「予約制中古車店舗」という、顧客満足度向上に特化した新スタイル店舗となっている。前面道路に面する吹抜空間はフレームレスな大開口ガラススクリーンとし、その支持金物を構造柱と一体化させたビルドボックスによって透明感を高め、積層する特徴的な空間性をファサードへと投影させた。また、高層の駐車場棟はモノトーン色をランダムに織り交ぜた大型アルミルーバーで覆い、水面の揺らぎのように見る角度や時間帯によって移ろう表情を新堀川の水辺景観と調和するアイキャッチとした。
内部空間は柱・壁・開口部などの固定的な建築要素を最小限に留め、今後この場で行われる様々な取り組みに柔軟に対応できる大らかさを備えた。情報化社会の発展に伴い、人と人・人と物が直接つながるリアル店舗の有り様が問われ、その重要性は今後一層増していくことが予想される。この建物の存在が、企業と顧客の末永い関係の構築、そして未来の顧客創出に貢献することを願う。
（清水　満、小田祐司／安井建築設計事務所）

所 在 地　愛知県名古屋市昭和区福江三丁目7-48
敷地面積　2,527.67㎡
建築面積　1,760.53㎡
延床面積　5,005.33㎡
構造規模　S造一部SRC造、地上４階、塔屋１階
工　　期　2018年12月～2020年４月
最 寄 駅　JR東海道本線　金山駅
撮　　影　株式会社グラスアイ



店舗棟外観


車両展示スペース（2F）


キッズパーク（1F）



駐車場棟外観

TOKAI Sketch Book



日本ガイシ熱田厚生棟

設計　㈱日建設計
施工　鹿島建設㈱

所在地　愛知県名古屋市熱田区六野一丁目307番地
敷地面積　71,537.11㎡
建築面積　2,286.11㎡
延床面積　1,667.98㎡（増築部）
構造規模　S造、地上2階
工　　期　2018年12月～2019年9月
最寄駅　JR東海道本線　熱田駅



浜松磐田信用金庫 上島支店

設計　㈱飯尾建築設計事務所
施工　㈱中村組

所在地　静岡県浜松市中区上島
敷地面積　1,389㎡
建築面積　464㎡
延べ面積　613㎡
構造規模　S造、地上2階
工　　期　2019年6月～2020年1月
最寄駅　遠州鉄道鉄道線　上島駅



中京銀行 新瑞橋支店

設計　㈱伊藤建築設計事務所
施工　㈱杉本組

所在地　愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂通7丁目23番
敷地面積　710.57㎡
建築面積　323.12㎡
延べ面積　393.54㎡
構造規模　S造、地上2階
工　　期　2019年10月～2020年6月
最寄駅　名古屋市営地下鉄名城線・桜通線　新瑞橋駅



土岐市立西部こども園

設計　㈱安井建築設計事務所
施工　徳倉建設㈱（建築）
　　㈱小栗電気工事（電気）
　　丸水設備㈱（空調・衛生）

所在地　岐阜県土岐市下石町1015-1
敷地面積　7,352.43㎡
建築面積　2,634.33㎡
延床面積　2,390.30㎡
構造規模　S造、地上1階
工　　期　2018年3月～2019年3月
最寄駅　JR中央本線　土岐市駅から東鉄バス「下石貢」



多治見市立精華小学校附属愛児幼稚園

設計　㈱安井建築設計事務所
施工　㈱飯田建設（建築）
　　㈱林電機商会（電気）
　　㈱丸三ポンプ工業所（空調・衛生）

所在地　岐阜県多治見市白山町3丁目1番地
敷地面積　2,122.07㎡
建築面積　1,192.07㎡
延床面積　1,280.37㎡
構造規模　S造、地上2階
工　　期　2017年12月～2019年3月
最寄駅　JR中央本線　多治見駅

TOKAI Sketch Book



土岐市役所

設計　㈱東畑建築事務所名古屋オフィス
施工　岐建・舘林 特定建設工事共同企業体（建築）
　　大島・奥村 特定建設工事共同企業体（電気）
　　シブヤ・美濃冷暖 特定建設工事共同企業体（機械）

所在地　岐阜県土岐市土岐津町土岐口
敷地面積　23,913.91㎡
建築面積　5,466.31㎡
延べ面積　10,485.73㎡
構造規模　RC造、S造、地上3階
工期　2017年9月～2020年2月
最寄駅　JR中央本線　土岐市駅



チューゲン北名古屋物流センター・北名古屋支店

設計　㈱東畑建築事務所名古屋オフィス
施工　戸田建設㈱名古屋支店

所在地　愛知県北名古屋市沖村佐渡88
敷地面積　10,680.07㎡
建築面積　4,906.75㎡
延床面積　5,922.11㎡
構造規模　S造、地上2階
工期　2019年8月～2020年8月
最寄駅　名鉄犬山線　西春駅



三井ショッピングパーク ららぽーと愛知東郷

設計　㈱竹中工務店
施工　㈱竹中工務店

所在地　愛知県愛知郡東郷町
　　東郷中央土地区画整理事業62街区1・3
敷地面積　約89,000㎡
延床面積　約104,900㎡
構造規模　S造、地上4階
工期　2019年3月～2020年7月
最寄駅　名鉄豊田線　日進駅



名古屋三交ビル

設計　㈱竹中工務店
施工　㈱竹中工務店

所在地　愛知県名古屋市中村区名駅3丁目21番7号
敷地面積　1,229.03㎡
建築面積　976.75㎡
延床面積　10,475.71㎡
構造規模　S造、地下1階、地上16階、塔屋1階
工期　2018年6月～2020年1月
最寄駅　名古屋市営地下鉄桜通線　国際センター駅

日本建築協会の遺伝子を探して
～東海支部復活60周年特集～

東海支部は2020年10月15日に支部復活60周年でした。60年前の名古屋のまちは、戦争の痛手から立ち直るべく、そのパワーを蓄えつつあったかと思う。戦後の焼け野原にコンクリートの建物が建ち始め、高度成長が始まろうとしていた時代だったと言える。これから、どんな街や建築をつくりあげていくのか。その使命をになった先人たちが集まったのではないだろうか。

60年後の今、我々は60年前と同じように新しい時代の幕開けに立ち会っている。5Gに代表される様々な技術革新の芽がうごめいていたところに、このコロナ禍である。新しいコミュニケーション、新しい仕事の仕方。そういったものが一気に猛スピードに変革し時代を変えていく。建築や街にも当然影響を与えていく。我々は、そんな時代に生きている。

復活60周年として開催するつもりであった記念講演会や記念式典。全てがコロナで中止となった。昔ながらの集まりは、開催できない１年であった。この状況の中で、60周年記念誌を刊行することした。「60年を振り返って思うこと」と題して、この５年間の催しに参加された方に寄稿文をおねがいし、１冊にまとめた。執筆者それぞれが建築や協会の活動への想いを書き連ねた一冊である。日本建築協会東海支部の遺伝子を探す復活60周年の企画となった。ぜひとも手にしていただきたい。

今回の「建築と社会東海支部特集」は、東海支部復活60周年記念である。記念誌とは全く違う切り口ではあるが、東海支部の遺伝子を探す特集と考えた。特集Ⅰ「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶」では、復活初代支部長一圓俊郎設計による東山植物園のガラス温室を取り上げた。1960年の東海支部復活、1947年の東海支部設立。ガラス温室の竣工は、さらに古く1937年である。電気溶接による鉄骨の温室は重要文化財であり、その保存修理工事がまもなく完成し、この春にはお披露目される見事なタイミングでの特集となった。特集Ⅱは納マリ倶楽部の活動報告。東海の建築はランドスケープをテーマにした４件。今後の受け継がれていく遺伝子を感じ取ってもらえるのではないでしょうか。

（東海支部特別編集委員会委員長　篠原佳則）

■特集Ⅰ　建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶　第４回「名古屋市東山植物園温室前館」

１：名古屋市・「名古屋市東山植物園温室前館」／中井孝幸

２：一圓俊郎と東山植物園温室／瀬口哲夫

３：東山植物園温室前館その歴史的価値と保存活用～重要文化財の指定と保存修理工事／野場裕子

４：東山植物園の成り立ちと特長～自然と歴史文化を生かした日本有数の植物園／安藤有雄

５：ガラス温室と東海支部復活60周年～初代支部長一圓俊郎がつなぐ縁／篠原佳則

■特集Ⅱ　納マリ倶楽部　～東海支部青年委員会における30代前後の若手設計者の2020年度活動報告

／塩田哲也、中井孝幸、久保久志、松下拓真、鈴木豊一郎、三宅伸幸、佐藤　剛、鵜飼浩平

■東海の建築：ランドスケープ

地域に開放された築山遊歩道と交流テラス　愛知製鋼厚生会館 Ai-terrace／竹中工務店

既存のエレメントを取り込む大屋根空間　中京大学豊田キャンパス６号館／伊藤建築設計事務所

日常から非日常への結界となる象徴的なウェーブ　ラグーナベイコート倶楽部 ホテル＆スパリゾート／安井建築設計事務所

名古屋テレビ塔をフィーチャーするランドスケープ　Hisaya-odori Parkの再整備と名古屋テレビ塔の免震リニューアル／日建設計

特集Ⅰ
建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第４回）

1

名古屋市・「名古屋市東山植物園温室前館」

愛知工業大学工学部建築学科
教授

中井孝幸

1967年　大阪府生まれ
1991年　三重大学工学部建築学科卒業
1993年　三重大学大学院工学研究科修士課程修了
1993年　三重大学工学部建築学科助手
2001年　安井建築設計事務所名古屋事務所
2005年　INA新建築研究所名古屋支社
2006年　愛知工業大学工学部都市環境学科講師
2008年　愛知工業大学工学部都市環境学科准教授
2009年　愛知工業大学工学部建築学科准教授
2016年　愛知工業大学工学部建築学科教授
現在に至る

■東海特集号テーマ：建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶

平成29年度（2017）から、東海特集号では「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶」と定め、第１回は名古屋市・稲葉地配水塔・演劇練習場「アクテノン」、第２回は三重県大台町の「大杉谷自然学校」、第３回目は岐阜市の「じゅうろくてつめいギャラリー」を取り上げた。

転用を繰り返しながらも使い続けられているアクテノン、廃校になった小学校を地域総合センターとして活用している大杉谷自然学校、銀行支店を地域にギャラリーとして開放したてつめいギャラリーについて、文化財としての活動やまちづくりや景観の視点からレポートしてもらい、見学記も含めて様々な視点から論考を行った。

■東海支部復活60周年の節目に

さて今回の第４回目は、日本建築協会東海支部が復活してから60周年の節目を迎える年でもある。例年、どの施設を対象とするのか頭を悩ませるところだが、今回はすんなりと「名古屋市東山植物園温室前館」に決まった。

東海支部の篠原支部長からは、60周年記念事業を検討する際、復活した当時に東海支部長を歴任された一圓俊郎先生、その一圓先生が設計に携わられた東山植物園温室前館について、昭和35年（1960）以降に「後館」が順次オープンしてからちょうど60年経つことも役員会で話題にのぼった。

60周年記念誌は、記念事業の報告ではなく、建築協会会員や東海支部の活動にゆかりのある方々からの寄稿文で構成することが決まった。また、「建築と社会」３月号の東海支部特集の「まちの記憶シリーズ」で東山植物園温室前館を取り扱い、一圓先生のご活躍についても触れてはどうかという流れになった。

今回も私自身が残念ながら名古屋市の歴史にも、重要文化財にも疎いため、それならばまた詳しい人に教えを乞おうと思い、篠原支部長と一緒に、名古屋市立大学名誉教授の瀬口哲夫先生にご相談させて頂いた。

瀬口先生は、歴史的遺産を活かしたまちづくりなど、都市計画や建築歴史意匠の分野がご専門で、現在行われている東山植物園温室前館の保存修理工事にも関わっておられる。

その瀬口先生からは、一圓先生と東山植物園温室前館について原稿執筆のご快諾が得えられ、また名古屋市の東山総合公園再生整備課の担当職員の方もご紹介して頂きました。さらに、60周年記念誌の原稿もお引き受けて頂くなど、瀬口先生には本当に多大なるご尽力を賜りました。ここに深謝いたします。

■「名古屋市東山植物園温室前館」

「名古屋市東山植物園温室前館」（以下、温室前館）は、平成30年（2018）４月のPRパンフレットによると、平成18年（2006）12月19日に国の重要文化財に指定された。温室前館は、昭和12年（1937）開園当初より公開され、中央ヤシ室など５つの展示室を持ち、建物の大きさは幅が約66m、高さは約12mあり、当時は「東洋一の水晶宮」と称されたとのこと。戦争や伊勢湾台風などの試練を乗り越え、開園から約80年以上経った今でも東山植物園のシンボルとなっている。

保存修理工事として、平成26年（2014）8月から平成28年（2016）３月まで第１期工事として解体・調査工事、引き続き第２期工事の復原工事が行われ、今年再オープンの予定である。

■様々な立場からの論考

特集号としては、様々な視点から一つの建物を取り上げたいと考え、東山植物園の成り立ちと特長について名古屋市東山総合公園再生整備課主幹の安藤有雄氏、温室前館の歴史的価値と保存活用について東山総合公園再生整備課主査の野場裕子氏、一圓先生と温室前館については瀬口先生にご執筆して頂いた。

今回はまちなかの建物ではないが、重要文化財の保存と活用から、地域やまちの記憶について論考していきたい。

（なかい　たかゆき）



図１　東山植物園温室前館の外観（2020年11月）

特集Ⅰ
建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第４回）

2

一圓俊郎と東山植物園温室

名古屋市立大学
名誉教授

瀬口哲夫

1945年　大分県生まれ
1969年　名古屋大学工学部建築学科卒業
1971年　東京大学工学系大学院修士課程（建築学）修了
1975年　東京大学工学系大学院博士課程（建築学）単位取得満期退学
1975年　名古屋大学工学部建築学科助手
1976年　工学博士（東京大学）授与
1978年　豊橋技術科学大学建設工学系助教授
1986年　ロンドン大学建築都市計画学部客員研究員
1996年　名古屋市立大学芸術工学部教授
2002年　名古屋市立大学大学院・芸術工学研究科教授
2004年　名古屋市立大学芸術工学部部長、同大学院・芸術工学研究科長
2011年　名古屋市立大学名誉教授、現在に至る
2011年　愛知淑徳大学建築インテリア専攻ゼミ担当教員、現在に至る
現在、重要文化財名古屋市東山植物園温室前館の保存及び活用に関する検討委員会委員長

専門：都市計画、近代建築史

表彰：
2004年　日本建築学会賞（業績）
2010年　日本建築学会賞（論文）
2012年　日本都市計画学会功績賞

■東洋一の大動植物園構想／昭和７年末

名古屋の植物園の計画は、昭和７年10月、東邦瓦斯㈱より植物園新設費として25万円の寄付が申し込まれたことに始まる。名古屋都市計画第16号公園（当時、東区田代町）の三分の一に相当する土地に森林公園を建設し、園内に植物園を設置する計画である。昭和７年12月には、植物園だけでなく、植物園と動物園の併置とし、昭和８年度予算に計上すると報道されている（文1）。昭和８年２月10日の名古屋新聞では、「東洋一の大森林公園、愈々つくる？動植物園設計に一歩進め、土木部で立案中」とある。この時点で、土木部の中で、動植物園の建築施設を担当できるのは建築課ということになろう。昭和８年９月、土木部内に公園課が設置されたことから、植物園の計画と植栽計画は公園課、温室設計は建築課の分担に変更されたと考えられる。

■60名前後を抱える大設計組織／名古屋市建築課

東山動植物園の計画が始められた、昭和７年から昭和10年頃の土木部建築課の体制（文2）を見ると、昭和７年度は、疋田武二課長以下、桑原英治、柴田善信（注1）ら６人の技師、48人の技手、雇１名、８名の工手、２名の嘱託（大西勉、藤生満）、合計66名であった。昭和８年度は63名、昭和９年度は56名、昭和10年度は66名なので、56名から66名の規模で推移しており、東海地方では、愛知県営繕課と双璧をなす建築設計組織であった。

建築課長の疋田武二（技師）は、大正８年、東京帝国大学建築学科を卒業し、大正12年から名古屋市に奉職。疋田以外の６人の技師は係長クラス、技手は一般技術職員に該当する。技師の下に係員として、平均５名～10名の技手や工手が配置され、設計業務などを分担していた（文3）。

当時の建築課は、名古屋市公会堂（昭和５年）、市立病院（昭和６年）を完成させる一方で、昭和５年から平林金吾（東京高等工業学校建築科）の設計図案公募入選案を基に、名古屋市庁舎の実施設計に取り掛かっていた。桑原英治（東京帝国大学建築学科）、藤生満（東京帝国大学建築学科）、大西勉（名古屋高等工業学校建築科、以下名高工）らを中心に、昭和８年９月に竣工させた。

動植物園の建築施設は柴田善信技師以下、10名以上の職員が担当することになる。他の建築課技術職員は、小学校などのRC造化に取り組んでいる。榎尋常小学校（昭和９年）、白鳥尋常小学校（昭和11年）、筒井尋常小学校（昭和11年）などであり、その他の建築としては、市立八事火葬場（昭和10年）、中公設市場（昭和11年）、稲葉地配水塔（昭和12年）などがある（文4）。

■京城植物園に劣らぬ大温室構想／昭和９年から昭和10年

昭和９年７月13日の名古屋新聞には、「百万市民のオアシス　風薫る行楽の園、急ぐ森林公園の成案」とあり、植物園については、温室（鑑賞室）と植物保育室（栽培室）が設けられることが報じられている。昭和９年11月16日には、「熱帯植物の生ひ茂る　林には禽獣の聲・・動・植物園の大計画」と報じられた。それによると、「植物園は園内の東部で一般花卉、樹木の外、京城植物園に劣らぬ大温室を設け、熱帯、亜熱帯の植物を収容する。・・・・温室約500坪とする」としている。ここで参考に挙げられている京城植物園の温室（明治40年）は、ガラス葺きの寄棟屋根と下屋庇のある形式で、福羽逸人の設計。昭和９年11月の時点で、東山温室は、京城植物園の大温室を参考に検討していること、温室の規模として、約500坪と考えられていることがわかる。

昭和10年５月12日の名古屋新聞では、「今月末に開催予定の市会に、植物園造営の実施案を提出予定である。温室については、「熱帯植物繁く　玻璃（ガラス）の大殿堂」とあり、「東山公園広場付近を中心として各種の樹木、草花を植栽し、熱帯、亜熱帯のめずらしい植物を収容する温室は面積約350余坪、高さ約50尺、鉄骨の総ガラス張の見事なもの」としている。これによると、ガラス張り鉄骨構造で、面積や大体の高さが決まったことがわかる。

さらに、昭和10年５月29日の名古屋新聞では、「大温室を囲繞する廿四の植物分科園、完成すれば日本一」と、植物分科園を紹介する中で、「面積375坪の総ガラス張大温室を設け、

ここにめずらしい熱帯、亜熱帯地方の各種植物を移植収容する計画」と述べている。５月30日の市会で、植物園造成費24万２千円が可決され、植物園造成工事が始められた。

昭和９年11月時点での温室面積は500坪、昭和10年５月段階では、350余坪、５月29日段階では、約375坪と変化しており、種々検討されていることがわかる。

■植物園の分科園と温室の植物担当

昭和10年５月の市会可決後、植物園の造成工事が始まるが、公園課の人員が増強され、課長は野間守人、技師に横井時綱、技師補に山本義兵（兼任）、技手に大久保一男（兼任）、藤島智、藤田栄一、工手に杉浦文夫、水野耕一、山田兵一の合計９名となった。

公園の計画は野間守人が中心で、植物分科園の植物担当としての岡田善敏[注2]が東山森林公園の「設計準備」の実際に当たることとなり、教材園の修景工事については、山田兵一などが関係しているとされる。温室内の植物については、「水野耕一が手配し、ランは加賀正太郎から、ゴムの木やガジュマルは神戸の貿易商から、アレカヤシの大木は三井の池田成彬から入手した[文5]。」水野は、京都府大山崎の加賀正太郎の温室で働いていたこともあり、昭和10年２月に名古屋市に採用された人物。横井時綱技師のもとで、嘱託の岡田善敏と工手の水野耕一が植物担当であった。植物園の「設計書」の設計者欄に水野（耕一）の印が押されている。内容は、「温室用葭簀始メ貳簾購入」で、物品の購入者を「設計者」としている[注3]。

水野耕一が作成した[文6]とされる温室の平面図（作成年月日の記載はない。）を見ると、中央植桝、鉢植陳列棚、地植桝、岩組地植、水槽などについて、面積や奥行きなどが示されている。これは植物をどれくらいの範囲で植えられるかを示すものである。建築設計図であれば、柱位置をはじめ、建物の大きさや部屋の大きさなど建築に必要な寸法の記入が優先されるが、それらの記載はない。むしろ、建築の図を参考に、作成した植桝などの植桝等配置図（**図１**）と考えられる[注4]。

昭和11年11月に作成された一般参考図（一圓作図）を見ると、地植床、地植帯、鉢棚などが書き込まれているが、建築図面なので、それぞれの面積や奥行きなどの寸法はない。先の植桝等配置図を参考に、建築設計図に書き込んだものと考えられる。

■一圓俊郎の名古屋市入庁／昭和10年６月

一圓俊郎（**写１**）は、東京帝国大学建築学科を卒業して、昭和10年６月11日、名古屋市に奉職し、土木部建築課の技手となる。この時、一圓は27歳であった。一圓俊郎による[文7]と、「官庁向きの方を希望して、逓信省を受けたが、採用する人数が少なかったため、だめだった[注5]。だめだったことを大学の方に言ったら、ちょうど名古屋市役所から推薦してくれというのが来ていて、もう頭から『名古屋市役所に行け』ということになったわけです。だから言われたとおりに『参ります』という返事をした（筆者一部修正）」という。名古屋市役所から大学に対し推薦依頼したのは、東山植物園温室の設計を進めるためだったのであろうか。

一圓が入庁した当時の名古屋市建築課では、課長が仕事を技師へ配分し、その技師の下でそれぞれの担当者が設計するという形だったようで、技師の柴田善信から「明日から植物園の温室の設計をやれ」と言われ[文8]」、一圓は、これまでの植物園温室（主に前館）の設計を引き継ぐことになった。



写１　一圓俊郎（1908～2001）

温室担当になった一圓は、どのような構造教育を受けていたか。東京帝国大学での鉄骨構造の講義は、明治36年、横河民輔によって始められ、佐野利器[注6]や武藤清に引き継がれた。在学時の一圓は、佐野利器と武藤清から鉄骨構造について学んだと思われる。一圓の卒業論文は「各国アパートメントの平面研究」で、卒業設計は「共同住宅」であった。

■一圓俊郎による全溶接温室の設計方針

一圓に与えられた温室前館の課題は、総ガラス張りの鉄骨構造であった。彼は、名古屋市役所入庁後に見学した、宝塚植物園の温室（昭和３年築）を参考にしたようだ。それまでの温室は、切妻屋根などの直線的な温室が多かったが、宝塚の温室は曲線的な外観をして

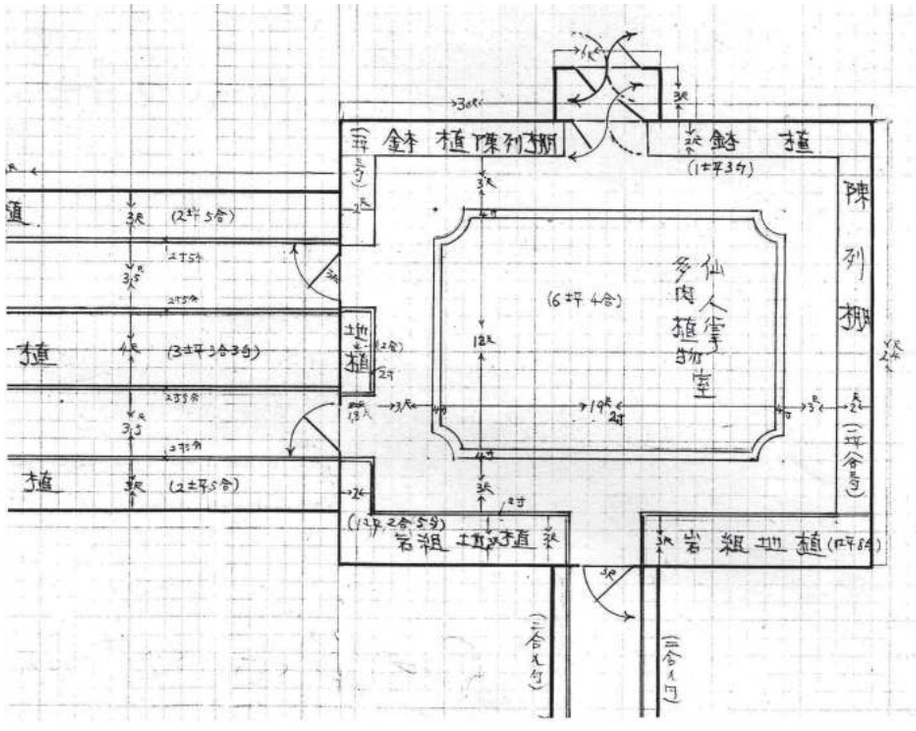


図１　水野耕一による植栽桝などを示す植桝等配置図の一部

いる。一圓は、「できるだけ影にならないようにドームの形にした。」といっている[文9]。また、「ガセットプレート接合では、影が多くなることから、溶接接合とし、初めての全溶接の建物をひとつやってみようと思った」と語っている[文10]。曲線を使ったドーム形のシンプルな外観と全溶接の鉄骨造が一圓の目標となった。

当時の鉄骨建築の状況を見ると、明治期から橋梁や工場建築などは、鉄骨造でつくられていた[注7]ものの、鋼材の接合はガセットプレートを使用した。昭和初期になると、内藤多仲らにより、溶接技術や施工技術に関する研究が発表され、昭和６年には、池田宮彦により、「鉄骨電弧溶接工事実施上の注意・検査方法」が発表された。昭和７年には、リベットに限定されていた鋼材の接合が緩和され、溶接接合に道が開かれた。さらに、昭和10年、溶接研究会から溶接構造物標準仕方書が発表された。こうした動きの後、昭和11年に松尾鉄骨橋梁㈱大阪第２工場が最初の全溶接建築物として建築された。こうしたことからも、東山温室を全溶接で建築するというのは、かなり思い切った決定だった。

■一圓による温室の基本設計案／昭和10年７月から10月

一圓俊郎が担当するようになってから植物園温室の設計が具体的に進展している。東山植物園が所有する図面の内、昭和10年７月から10月の間に作成された図面（６枚）の製図者欄には一圓のみの印影がある。他はなし。

まず、昭和10年７月26日の日付がある「計画平面図」（縮尺1/100）には、温室の各室の外形寸法と隣棟間隔、各室面積（坪数）が明示されている。同じ７月作成の「計画立面図」（縮尺1/100、製図者一圓）には、樹木や建物の陰影が描かれた立面図で、温室が立体的な空間として表現された最初のものと考えられ、一圓の設計製図の力量を示すものである。さらに、８月には、断面・屋根伏図（縮尺とスケール）、一部（暖房汽罐室・作業室部分）平面・断面・屋根伏図が作成されている。断面図や屋根伏図、地下室など、７月作成の図面と比較して、より詳細になっていることから、２カ月間に設計が進んだことがわかる。前館の規模は179坪（約591㎡）で、大ドームは44尺（約13.2m）、小ドームは22尺５寸（約6.76m）、花卉室は14尺（約4.2m）の高さとなっている。

10月作成の（前館）立面・断面図、平面を見ると、大ドームは12.6m、小ドームは6.8m、花卉室は4.26mの高さとなっている。８月の図面と比較して、ドームの高さを60㎝程低くして、大ドームの形をより丸味を帯びたものにしている。正面から見ると、中央の大ドームの高さと幅を一番大きくして、両端に小ドームを抑えとし、中間に花卉室を配すという、平等院風の配置としている。しかし、中央のドームから建物の幅を徐々に小さくしており、安定感のあるものにしている。

建築図として、柱間寸法が表現されている。しかし、書き込みがある地植床や鉢植棚などは手書きの上、寸法は示されていない。これらの基本設計図には、すべて一圓の名前があり、彼が中心になってまとめたことがわかる。

６枚の図面で、寸法表記が変化している。７月と８月作成の４枚の図面は、尺寸表記となっているが、10月以降作成の２枚の図面は、寸法がメートル表記となっている。メートル法に変えたのは一圓の意思と考えられるが、これまでの尺寸表示をメートル表記に置き換えただけのようで、数字に端数が出ている。７月と８月の図面が尺寸表記になっているのは、前の担当者の設計を一圓が引き継いだことを示唆している。

こうした経緯があり、昭和10年10月９日の名古屋新聞では、「東山公園の水晶宮　日本一の大温室　植物園の呼び物　近く着工」という見出し付きで、「植物大温室の設計はほとんど出来上がり近く着工になった。鉄骨造りの大温室は総ガラス張りで中央は設計図の如く高さ40尺（約12m）、外観の壮麗とともに内部も日本一を誇らんとするもので、鑑賞室（前館：190坪）と栽培室（後館：210坪）の二つに分け、栽培室だけは木造ガラス張り５棟・・・」などとある。名古屋新聞に掲載された立面図（**図２**）は、昭和10年10月に一圓が作成したものと同一である。昭和10年10月初期までに、一圓によって、温室の基本設計が完了したと考えられる。

■大温室の実施図面／昭和10年10月から11月

昭和10年10月以降作成の図面で、番号付きの図面が29枚ある。これが温室の実施図面にあたる。印影[注8]が確認できた25枚の内、16枚に一圓の印が押されている。前館に限ると13枚の図面の内、10枚が一圓の作図である。残りの３枚は、基礎詳細図、溶接工事図、判読難の図なので、前館の設計は、一圓であることが裏付けられる。

製図者の欄に、製図者（以下同様）のところに、一圓の押印のみの図面は、前館の平面、立面、断面、小屋伏図、詳細図の５枚である。前館の平面図では、建物の規模（幅66m46㎝）、中央椰子室（18m27㎝×12m60㎝）など各室の大きさ、鉄骨柱位置（間隔は、252㎝を基本）などが表示されている。立面図、断面図、天井伏図では、温室の高さ関係（大ドームは12m42㎝、小ドームは６m67㎝）、鉄骨の構成、筋交いとターンバックルの位置、天窓や側窓の位置がわかる。

前館中央部詳細図には、トラスの半径、棟高さ、軒高さ、腰壁高さ、鋼材のメンバー、溶接とボルト締めの位置、窓（嵌殺窓、廻転窓）の姿図や矩計図、柱脚の詳細、クリンカータイル、暖房用ダクトなどが示されている。その中で、トラス部分に注目すると、トラス内側の下弦材は曲線状で、図面に複数の半径[注9]が書き込まれている。ここは一圓がこだわったところであろう。結果として、こうした工夫が、美しいドームの内部空間を作り出すことに成功している。ドーム空間の美しさが、英国のキューガーデンのパームハウスになぞらえて、「リトルキュー」と呼ばれる所以

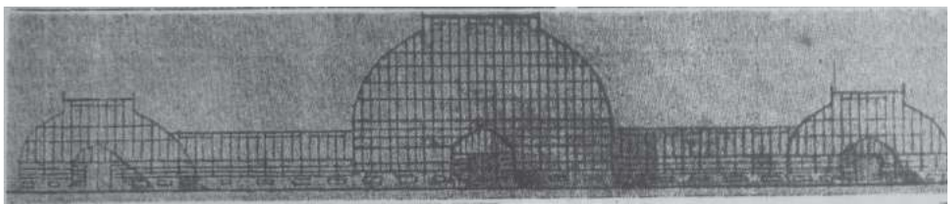


図２　昭和10年10月９日名古屋新聞掲載の立面図

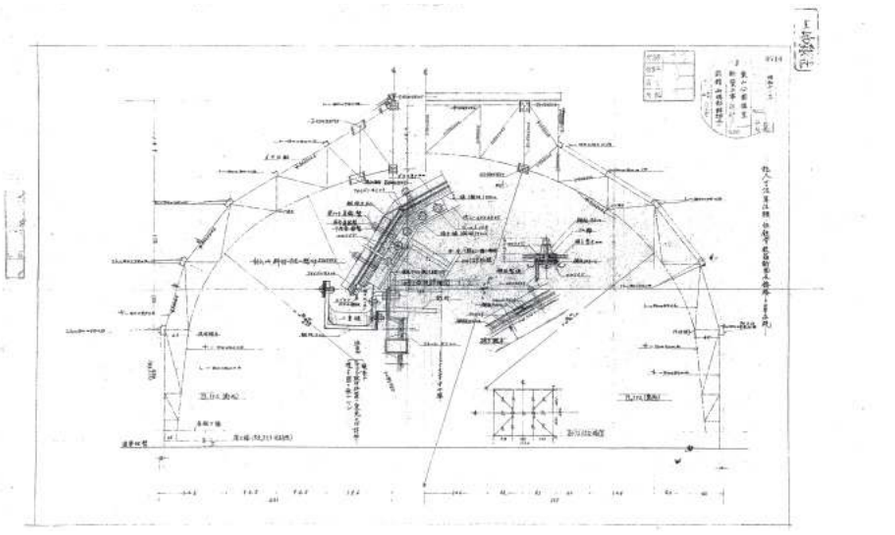


図３　前館両端部詳細図

となったと考えられる。

一圓と他の人の押印があるものは、両端部詳細図（**図３**）、花卉室詳細図、玄関詳細図、花卉室鉄骨詳細図の４枚である。花卉鑑賞室の鉄骨詳細図は、一圓と公文の共同となっている。それらを基にした、水性植物室や花卉室の詳細図は、一圓のもとで鴎田が協力していることがわかる。

前館の特殊な部分、例えば基礎詳細部は西村（清士）、溶接工事は公文（勝年）となっている。作業室・地下室の図面は３枚で、鬼頭（丈太郎）の名前がある。後館の平面図、断面図、屋根伏図、詳細図、渡廊下の図面には、長谷川と西村清士の押印がある。

西村の印は８枚（後館平面、同立面、植込み廊下、基礎詳細など）、長谷川は６枚（後館平面、同立面、植込み廊下など）、公文は３枚（鉄骨詳細、溶接）、鴎田は３枚（前館詳細図）となっている。

以上から、東山植物園温室の設計は、名古屋市建築課（柴田善信技師）のもとで、温室前館の設計は一圓俊郎、構造は公文勝年、詳細図作成は鴎田清六、暖房関係は山川清（水道部技師）と津田宗記、温室の現場担当は黒宮定吉、作業室は鬼頭丈太郎、後館と植込廊下は長谷川と西村清士などで、合計10数名の技手や工手が植物園温室の設計監理に関わっていることがわかる[注10]。

■繰り返された工事入札/昭和11年1月

温室の実施設計を終えた後、全溶接の温室工事は入札にかけられた。すぐには決まらなかったようだ。一圓によると、「入札やったら、相当開きがあった。それでは、建築の方の柴田さんなどが、（前館花卉室）の長さを短くしようとしたが、（大岩）市長が『いかぬ』と言った。」前館の面積を縮小しようとしたがだめだったということだが、どのように解決したのか。

前館の平面図（昭和10年10月）を見ると、鉛筆のスケッチ書きで、後館（栽培室）面積の縮小を検討していることがわかる。事実、完成した温室後館４棟は書き込みのように縮小されている。さらに、東西の玄関前室をなくし、作業室の面積を半分にしていることがわかる。こうして見ると、前館（鑑賞室）の大きさは変更せず、他の部分の面積を削減したことがわかる（**図４**）。そして、「何遍か入札した結果、北川組が落札した。」[文11]

名古屋市は、昭和11年１月、㈱北川組と工事契約する。北川組の現場主任は竹内勝治、現場係は岩田行男、大工棟梁は河合太三郎など、鉄骨鉄筋工事は㈱奥田商会と高木鉄工所、電弧溶接は上田工業所などとなっている。これに対して、名古屋市側の工事監督は、黒岩常吉と一圓俊郎[文12]となっている。

温室工事の着工は、昭和11年２月のこととされ、一圓は、「地鎮祭は２月の初めで、その日は大雪が降って地鎮祭ができなかったかな。[文13]」と語っている。鉄骨工事の課題として、溶接資格者の資格試験になかなかパスしなかった[文14]ことがあげられている。

■温室完成と植物園開園式/昭和12年3月

温室は、昭和11年10月末までには完了したとされる[文15]が、正確な日時がはっきりしていない[注11]。一圓俊郎は、「理屈をつけて、工期を３回ぐらい延長した。それでもまだ遅れた。」[文16]と言っている。竣工年月日がはっきりしていないのは、こうしたことが関連しているかもしれない。遅れの理由は、溶接工事に関しての熟練の溶接工の不足と名古屋市側の工期設定に甘さがあったとしている[文17]。

そこで、当時の新聞を調べた。昭和11年５月17日の名古屋新聞には、「基礎工事を殆ど終

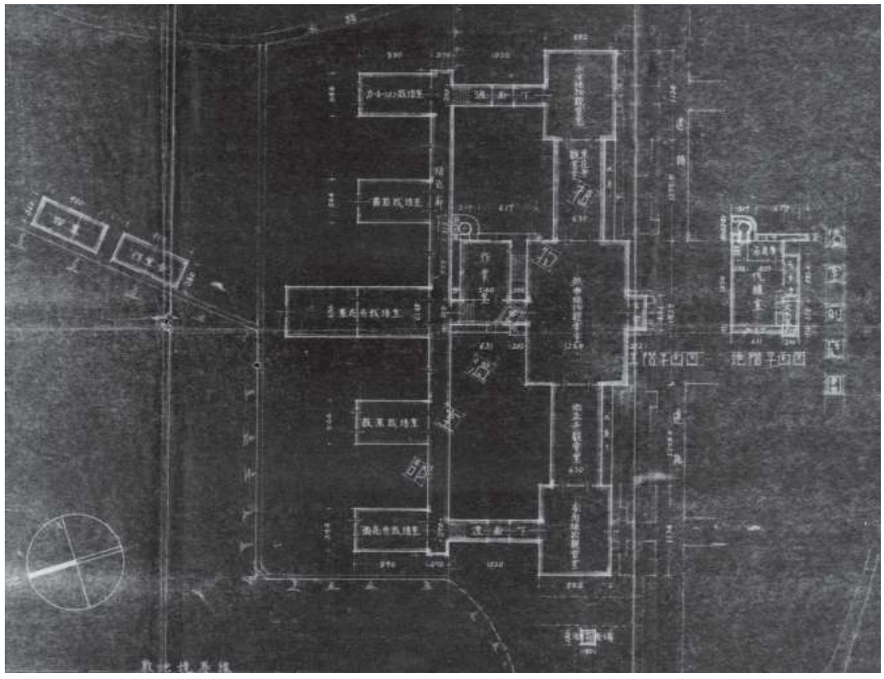


図４　温室完成図

り、いよいよ本屋工事にとりかかり今秋９月頃までに竣工するはず。」とある。昭和11年７月18日の大阪毎日新聞名古屋版を見ると、「８月中旬愈々竣工」と報じられている。この段階で、大小ドームの鉄骨組み立てが終わり、鉄骨だけの温室写真が掲載されている。昭和11年８月５日の名古屋新聞では、「４日大温室の鉄骨および木造組立がやっと出来上がり」とある。一方、図面の方を見ると、昭和11年９月24日作成の鉄骨保護工事各部図があることから、鉄骨骨組の組立は終わったが、鉄骨の足回りの保護コンクリートがまだ未施工であったと考えられる。昭和11年10月14日の名古屋新聞では、「着々竣工を急ぐ」とあり、竣工が近いことを予想させている。現在、「10月末までに温室が完成」といわれるのは、こうしたことが根拠であろうか。

さらに、温室の設計図を見ると、昭和11年10月の汽罐室周囲エリヤ及ダクト排水土管其の他図面と、昭和11年11月の植込廊下基礎一部変更図（トンネルダクトの変更）がある。ダクト内などの細部の変更であるが、11月段階でも、まだ、温室工事が継続されていたと考えられる。

昭和11年12月作成の温室の一般平面参考図と完成図があることから12月までには完成したと考えられる。これを裏付けるように、昭和12年１月の「実際園芸」では、「此の程、新温室の工事を完成し、植物の搬入や岩組に大童となっている。」「今年一杯には植物の植付を終る予定」とある。また、一圓の押印が主任欄にあることから、一圓のポジションが上がったことを示している。

「昭和12年１月16日の夜半、闇を裂く大水晶宮」と報じられ(文18)、点灯テストが行われた。

いずれにしろ、昭和12年３月３日に東山植物園の開園式を迎えた。

■まとめ

（１）昭和８年２月に、温室など建築施設は土木部建築課が担当したと考えられる。その際、温室については、京城植物園に劣らぬ大温室（約500坪）として、参考にされている。

（２）昭和10年５月12日、温室実施案の内容として、約350坪、高さ50尺、鉄骨の総ガラス張と報じられ、５月29日の報道では、面積375坪の総ガラス張大温室となり、面積の増減があるが計画が進んできたことがわかる。

（３）植物園所蔵図面として、作成者と年月日が不明の図（２枚）には、各室名、展示方法、植桝や地植の面積や長さなどが記入されている。建築としての基本的な寸法がないことから、植桝や棚を示すための図で、本論では植桝等配置図とした。この図は、建築図を参考にして作成されたものと考えられる。

（４）東山植物園温室の設計監理は、名古屋市建築課（柴田善信技師）になるが、温室前館については、設計の中心は一圓俊郎、構造は公文勝年、一部の詳細図作成は隅田清六、現場担当は黒宮定吉などと10数名がかかわっている。

（５）一圓俊郎の参加後は、まだまとまっていなかった温室前館の計画を引き継ぎ、設計案を確定させ、平面図、立面図、断面図、小屋伏図、詳細図などの主要な実施設計図を自ら作成している。さらに、鉄骨工場や現場にも足を運び、前館全体を統括する立場にあり、中心的役割を果たしたことがわかる。

（６）前館について、大小３つのドームとそれをつなぐ２つの部屋の左右対称の構成としている。平等院形式ともされるが、中央から左右に２つずつ建物を配置したバランスは絶妙である。

（７）前館鉄骨の接合には、骨組を太くし、温室内に影を落とすガセットプレートを使用せず、L形アングルを２枚組み合わせた鋼材を電弧（アーク）溶接で接合する方法を採用し、スレンダーで柔らか味のある鉄骨造温室を実現させている。当時の技術としては、最新の技術を採用している。

（８）大小のドームの内部は、トラスの下弦材を円弧の合成からなるアーチ型とし、温室空間の美しさを確保している。ドーム外面は、ガラス板のため直線を確保しているが、全体として丸みを持たせており、英国のキューガーデンにあるパームハウス（1878年）になぞらえて、「リトルキュー」と呼ばれる温室を内外共に実現させている。

（９）温室の竣工は、昭和11年10月末までには完了したとされているが、昭和11年11月作成の植込廊下基礎一部変更図があること、昭和11年12月作成の温室完成図（一般平面参考図）があること、昭和12年１月16日真夜中に温室照明の点灯が行われたことなどから、工事完了は12月ではないかと思われる。

（せぐち　てつお）

謝辞　温室関連資料の提供など東山公園の安藤有雄さん、野場裕子さんに感謝します。

注１　柴田善信は、大正５年名高工建築科を卒業し、大正９年から名古屋市入庁。柴田は東山動植物園の建築施設の責任者。

注２　岡田善敏は、昭和10年11月８日に嘱託として採用された。

注３　東山植物園の資料では、中央椰子室の岩組工事は、調査員山田（兵一）、設計者水野（耕一）となっており、この部分が、公園課の担当であることがわかる。

注４　植桝等配置図は、温室の計画案を参考にして、植栽のために作成されたと考えられる。建築図面としての寸法が表示されていない。植桝等配置図は2枚あるが、１枚は初期のもので、他の一枚は実現案に近いものとなっている。富屋均「東山植物園の成立過程と温室の構想・設計について」『日本植物園協会誌』第48号、2003年11月、では、水野による温室計画案（第一案、第二案）としている。

注５　一圓俊郎の同級生の小坂秀雄が逓信省に入省している。逓信省の営繕課には、吉田鉄郎や山田守などが在籍し、活躍していた。

注６　佐野利器は、名古屋市庁舎の設計図案公募審査員、名古屋市公会堂の建築顧問を務めている。

注７　名古屋市内での鉄骨造建築としては、熱田兵器製造所工場（明治38年）や名古屋国技館（大正３年、設計は辰野金吾）などがある。

注８　温室図面の技師欄のほとんどには、柴田の押印がある。

注９　大ドームでは680㎝、780㎝、960㎝、小ドームでは3.25m、4.1m、6.25ｍ、7.80mなどとなっている。また、平面図と異なり、比較的丸い数字が使われているが、これは一圓がメートル法で新たに決めたことを示している。

注10　植物園温室の関係した職員（判明分のみ）の在籍状況を見ると、昭和９年度の在籍者は、技手の西村清士、公文勝年、長谷川某、津田宗記、衣笠孝一、工手の黒宮定吉である。昭和10年度からは、一圓俊郎、鬼頭丈太郎、長谷川某、横山良一など、昭和11年度からは、隅田清六、鬼頭丈太郎などとなっている。

注11　名古屋市東山植物園温室担当者に問い合わせたが、詳細は不明ということだった。

文１　名古屋新聞　昭和７年12月24日
文２　各年度の名古屋市職員録
文3、文7、文8、文9、文10、文11、文13、文14、文16、文17「一圓俊郎氏ヒアリング」1993年２月、名古屋市市政資料館所蔵
文４　瀬口哲夫「官庁建築家　名古屋市建築課の人々とその設計」C&D出版、2005年
文５　桜田通雄「東山植物園の歴史」（未定稿）東山植物園所蔵、2011年、の抜粋による。
文６　富屋均「東山植物園の成立過程と温室の構想・設計について」『日本植物園協会誌』第48号、85頁、2013年
文12　竹内勝治「㈱北川組参拾余年の回顧」120頁、自家本、2003年
文15　「国指定重要文化財　名古屋東山植物園温室前館保存活用計画」名古屋市東山植物園、２頁、2011年
文18　名古屋新聞　1937年１月17日

参考文献：
1．「国指定重要文化財　名古屋市東山植物園温室前館保存活用計画」名古屋市東山植物園、2011年３月
2．桜田通雄「名古屋市東山植物園の創設（未定稿）」2011年、東山植物園蔵
3．富屋均「補伊賀市山植物園の成立過程と温室の構想・設計について」『日本植物園協会誌』第48号、2013年など。

特集Ⅰ
建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第４回）

3

東山植物園温室前館その歴史的価値と保存活用

重要文化財の指定と保存修理工事

名古屋市緑政土木局
東山総合公園再生整備課
主査（施設整備）

野場裕子

1970年　愛知県生まれ
1993年　名古屋工業大学工学部社会開発工学科卒業
同　年　名古屋市役所入庁
現在に至る

■はじめに

名古屋市東山動植物園は、動物園と植物園が一体となった有料公園である。約60haの広大な園内では、コアラやキリンなどの動物を見たり、桜や紅葉といった四季折々の植物を楽しんだりでき、１日では遊び尽くせない魅力あふれる施設である。

「重要文化財名古屋市東山植物園温室前館（以下、「温室前館」という。）」は、昭和12年（1937）の開園に合わせ、熱帯植物等を展示する温室として建てられた。開園当初は「東洋一の水晶宮」と称され、現在に至るまで植物園の中心施設として市民に親しまれている。

■建築概要

温室前館は、中央ヤシ室を中心に左右シンメトリーのフォルムになっており、東翼の香りの有用植物室（重要文化財指定時は「シダ室」）、西翼の多肉植物室を、東西の花卉室で繋いでいる（**図1**）。

鉄骨造・ガラス葺きで、建築面積は598.98㎡、最高高さは12.42ｍである。

設計は、名古屋市土木部建築課（当時）が担当した。現存する当時の設計図の押印から、温室前館の設計には、柴田善信技師や一圓俊郎技手らが携わったことがわかる。

施工は株式会社北川組が担当し、工事は昭和11年（1936）10月までには完了した。

なお地下には、温室の暖房設備のためつくられたボイラー室（汽罐室）が現存している。また建設当初背面にあった木造の後館は、その後建替えられ、当時のものは現存していない。

■重要文化財の指定

我が国最初期の本格的な鉄骨造温室建築

温室前館は、公共の温室建築としては大正13年（1924）開園の京都府立植物園（当初は大典記念京都植物園）の温室に次ぐものであった。しかし当時の温室の多くが消失し、あるいは建替えられたなか、当温室は、第二次世界大戦や昭和34年（1959）の伊勢湾台風により大きな被害を受けながらも、修復し大切に受け継がれてきた。その結果、現存する我が国最古の公共温室としてその歴史的価値を有するに至った。

我が国最初期の全溶接建築物

その工法に着目すると、主要構造物である鉄骨架構の接合を、当時主流であったリベット組ではなく、最新技術である電気溶接で行っている。このため接合部が小さくなり、植物への日照を確保するとともに、アングル材を組み立てたトラスアーチによる繊細な造形美を形成している。

重要文化財指定へ

戦後、建築技術の進歩に伴い、各地でより規模が大きく、最新の設備を取り入れた温室が建てられるようになった。温室前館についても建替えの議論が幾度もなされたようだ。しかし東山植物園としてはその歴史的価値を重視し、保存修復の方針を貫いてきたことが、かつての植物園長たちの言により伝わっている。

このような中、日本の近代化に貢献した文化遺産が「近代化遺産」として評価されるようになり、温室前館も「愛知県近代化遺産総合調査報告（平成17年3月、愛知県教育委員会）」に掲載され、広くその価値が知られることとなった。

平成18年（2006）８月、名古屋市は重要文化財への指定について文化庁長官に上申し、同年12月19日、文部科学大臣より重要文化財に指定を受けた。

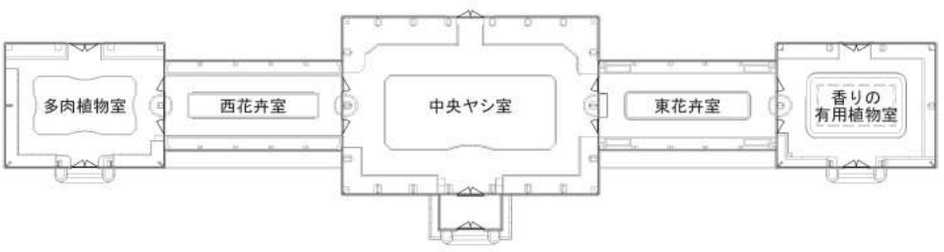


図１　温室前館平面図

指定の際は、「わが国最初期の本格的な鉄造温室」「鉄とガラスによる建築物の造形的特質」「わが国最初期の全熔接建築物」という点が評価されている。

■保存及び活用の方針

建設当初の姿に復原

重要文化財の指定を受け、名古屋市は貴重な国民的財産である温室前館の文化的活用に努めるため、保存活用に関する検討を始めた。平成21年度（2009）には、有識者から成る「重要文化財　東山植物園温室前館の保存及び活用に関する検討委員会（以下、「検討委員会」という。）を設置し、検討を進めた。

温室前館は、開園以降来園者の利便性や管理上の必要に応じて改修を重ねていた。このため文化財の指定当時、鉄骨トラスアーチや軒桁等の主要な架構部は当初の形式をとどめているものの、当初部材の多くは失われていた。

屋根のガラス押え金物は、銅からアルミに変わり、暖房システムを蒸気式から温水式に変更する際には煙突の撤去や床仕上げの変更などが行われていた。

これらの改変部に対して、検討委員会では「重要文化財指定時の形状ではなく、建設当初の形状・仕様を目指し、当初にさかのぼる復原を目指す」という方向性を定め、具体の復原計画について議論を重ねた。

当初図面、古写真等を参考に

主要な架構部以外はほとんど失われていた建物を、当初の姿に復原する際に重要な基礎資料となったのが、当時の図面である。名古屋市住宅都市局には当初工事を発注した際の原図の一部が、植物園には青焼図が残っており、これらにより当初の仕様を詳細に知ることができた（**図４**）。

また温室の内外を写した古写真も、復原のための貴重な史料となった。植物園に保管されていた写真はもとより、関係者へのヒアリング、さらには広く市民に募集して集めた数多の古写真は、図面では足りない部分を解明する手掛かりとなった。

こうした検討を受け、平成23年（2011）年３月、名古屋市は温室前館の「保存活用計画」を定め、ここで定めた方針に沿って保存修理工事を進めることとなった。

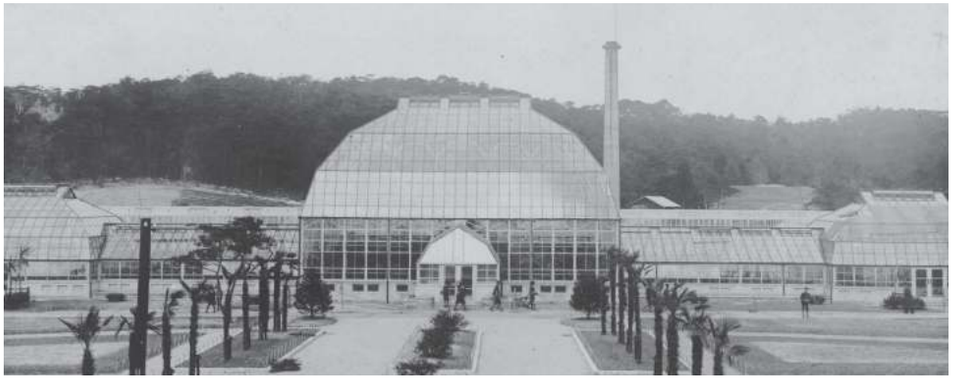


図２　開園直前

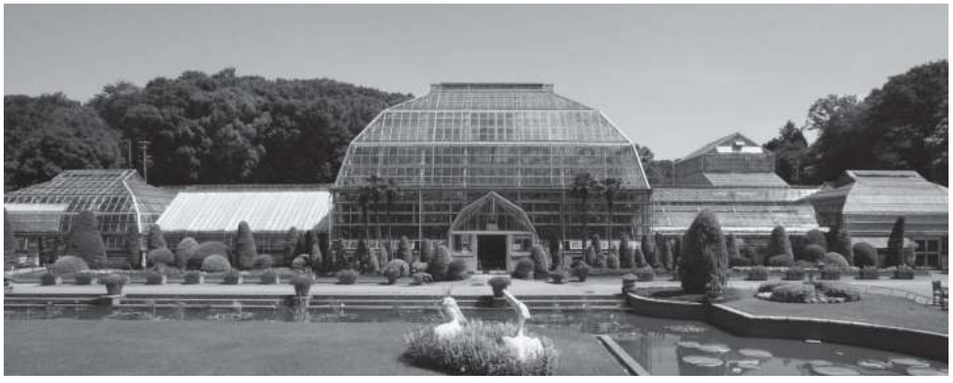


図３　保存修理工事着手前

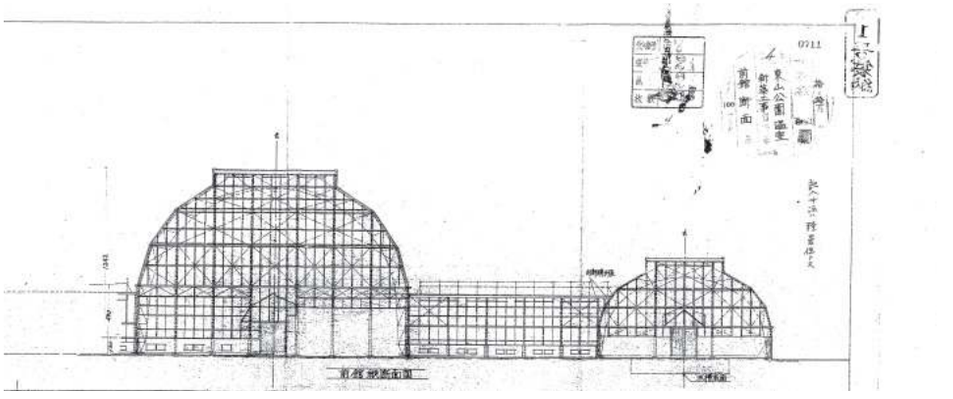


図４　当初図「東山公園温室設計図　第４號　前館断面図」部分

■保存修理工事

事前の調査工事や復原設計を行った後、平成26年（2014）から保存修理工事に着手した。工事は、構造体を残して建物を解体した第一期工事（平成26～27年（2014～2015））、耐震改修・保存修理を行った第二期工事（平成28～令和２年（2016～2020））の２段階に分けて行った。

工事の設計監理は、名古屋市住宅都市局及び公益財団法人文化財建造物保存技術協会が担い、工事は、株式会社魚津社寺工務店（建築工事）、三機工業株式会社（暖房工事）、株式会社ＳＫ電設（電気設備工事）が行った。

鉄骨の補修・構造補強

温室を後世に残すため喫緊の課題は、耐震性の不足と構造部材の劣化であった。

高温多湿という環境化に長年あって、鉄骨の構造体には著しい腐食が進行していた（**図５**）。



図５　鉄骨の腐食状況（桁）

このためすべての部材の肉厚を測定し、基準に満たない部分は切断し、新材を溶接して補修した（**図６、７**）。丁寧な作業の結果、今回の保存修理工事において取り換えた鉄骨量は、従来の鉄骨のうち７％に抑えられている。

なお、補足材にはその旨が分かるよう修理年の刻印を付しており（**図８**）、また補足材と当初材の溶接部分は、盛り上がったビードをあえてそのままにして、新古の区別を可視化している（**図９**）。現地にお越しの際は、各所に残る鉄骨の補修箇所を探してみてほしい。

また、鉄骨の補修工事と並行して、耐震補強のための部材を取り付けた。補強部材は後世のものであることが分かるようにするため、丸鋼管を採用した。



図６　鉄骨補修前



図７　鉄骨補修後



図８　補足材の刻印

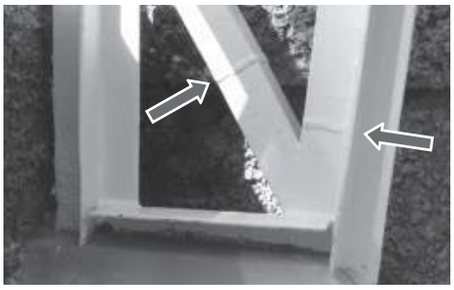


図９　鉄骨補修後の溶接跡

垂木・ガラス押え金物の復原

垂木やガラス押え金物による格子状の屋根の意匠は、温室の外観の重要な構成要素のひとつである。しかしながら前述のとおり、これらの部材は後年の改修工事により材質が銅からアルミに変更され、その割付もより細かくなっていた。

保存修理工事の過程で、当初垂木を取り付けていた孔が発見され、垂木のピッチを特定することができた。

ガラス押えの金物は、当初はスチール製の垂木の上に銅板を載せていたが、同じように復原すると、鉄と銅とが接触する箇所ではその電位差から腐食が進行することが想定された。そこで、単なる銅板ではなく、銅とステンレスを圧着させたクラッド鋼を特注し、目に触れる表面は銅、鉄と接触する裏面はステンレスとすることで、当初の外観に復原しながらも腐食の防止を図った。

このように、建設当時の姿への復原を第一としながらも、公共温室として将来にわたって利用するため、あえて現代の技術を用いた部材もある。温室を覆うガラスも、当初は５mmの板ガラスであったが、安全性を重視してフィルム入りのペアガラスを採用した。

発掘された切石層

温室の内部には植栽桝があり、開園当初からの植物を含めてさまざまな樹木が植わっていたが、工事中は別の温室に移し、大切に保管することとなった。

植物の移植後、植栽桝の排水方法を調査するため内部の土壌を取り除いたところ、桝の底全体を覆う切石層が発掘され（**図10**）、さらに切石層の下からは排水用の陶管が発見された。切石層は植木鉢でいう鉢底石の役割を果たすものであり、湧水の多い立地において排水方法が工夫されていたことが分かった。

桝は再度埋め戻したが、切石層は貴重な遺産として土の下にそのまま残されている。

温室を支える設備機器

当温室はパイプの中を通る温水の熱により温められている。温水の熱を放出する暖房装置が「ギルド放熱器」である。ギルドとは魚のエラを意味する英語で、エラのようなひだ状の部分から熱を放出する。建設当初のものが多く残っており、今後の使用にも耐え得る状態であったため、補修したうえで再度取り付けた。また不足分は鋳物で新調した（**図11**）。

文化財指定時には存在しなかった設備機器も、可能な限り復原した。

室内の温度調整のために窓を開閉する装置は、当初はハンドルを回して手動で操作するものであったが、その後自動開閉装置に取り替えられていた。当初装置の一部が発見され、また古写真によりその形が判明したことから、当時の手動開閉装置を復原している（**図12、13**）。一方で今後温室として管理していくために、温度センサーで作動する自動開閉装置もあわせて設置し、通常はこちらのシステムによって管理していく。

照明機器は、古写真をもとにデザインや取付位置を推定して復原した。写真ではわからない色目や素材感は、同時期に建造された「重要文化財日本郵船氷川丸（横浜市）」の照明を参考にしている（**図14、15**）。

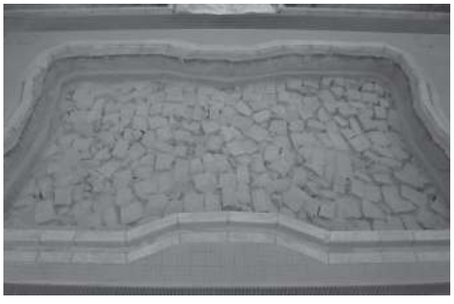


図10　発見された切石層（多肉植物室）

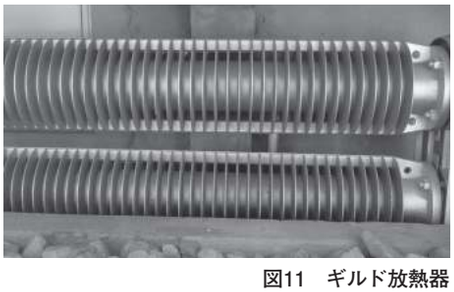


図11　ギルド放熱器

■おわりに

多くの関係者の方々のご尽力により、着工からおよそ６年の期間を経て、令和２年（2020）９月に温室前館の保存修理工事は完了した。



図12　古写真に写る手動開閉装置



図13　復原した手動開閉装置

その後は温室内部での植栽工事、周辺での洋風庭園の整備工事などを進めており、令和3年（2021）春に再オープンとなる。

中央ヤシ室には、開園当初から植えられていたヤシ類などを再移植しており（狭い温室の出入口から大きなヤシを搬入するのは、大変な作業であった）（**図16**）、建設当時の人々が遠い熱帯地方に思いを馳せたであろう非日常の空間を楽しむことができる（**図17**）。

洋風庭園は、温室前館を中心とした南北の軸線と、それに直行する東西の軸線を設定し、左右対称の幾何学的な景観を創出する。温室の正面に配置する鏡池の反対側から眺めれば、水面に逆さまに建物が映る計画である（**図18**）。

現在の建物は、鉄骨や腰壁の白色と銅板のこげ茶色の対比が美しい。さらに時が経てば、銅が緑青に変化し、また違った姿を見せてくれるのではないかと楽しみにしている。

多くのみなさまに東山動植物園にお越しいただき、建築と植物が織りなす美しい空間に触れていただければ幸いである。

（のば　ゆうこ）



図14　古写真に写る照明



図15　復原した照明



図16　植栽移植の様子（令和２年10月）



図17　植栽移植後の中央ヤシ室



図18　温室の前では洋風庭園の工事が進む（令和３年１月）

特集Ⅰ
建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第４回）

4

東山植物園の成り立ちと特長

自然と歴史文化を生かした日本有数の植物園

名古屋市緑政土木局東山総合公園
再生整備課主幹（施設整備）兼
植物園主幹（植物園施設整備）

安藤有雄



1968年　愛知県生まれ
1990年　東京農業大学農学部造園学科卒業
同　年　名古屋市役所入庁（行政職造園）
現在に至る

■はじめに

東山植物園温室前館は、開園当初から今日に至るまで、東山植物園の中心的施設でありシンボルとして歩んできた。丘陵の森を背景にした優美な造形は時代を越えても美しく、永く市民に親しまれ大切に受け継がれてきた。この稿では、温室前館が立地する東山植物園の成り立ちと特長について紹介する。

■「東山公園」の概要

植物園が立地する「東山公園」は、名古屋市の東部丘陵に位置する総合公園である。地下鉄東山線で名古屋駅から18分という交通至便でありながら、隣接する平和公園と合わせた「なごや東山の森」は、都市部に立地する公園緑地として日本最大級の規模（都市計画公園面積約400ha）を有している。

東山公園内には動植物園（動物園約32.2ha、植物園約27.4ha）を中心に、東山スカイタワーや東山公園テニスセンター等の施設が点在するほか、東山一万歩コースなどの自然散策路が整備されている。名古屋東部丘陵の起伏に富んだ地形と自然を生かした公園づくりを進めてきた。

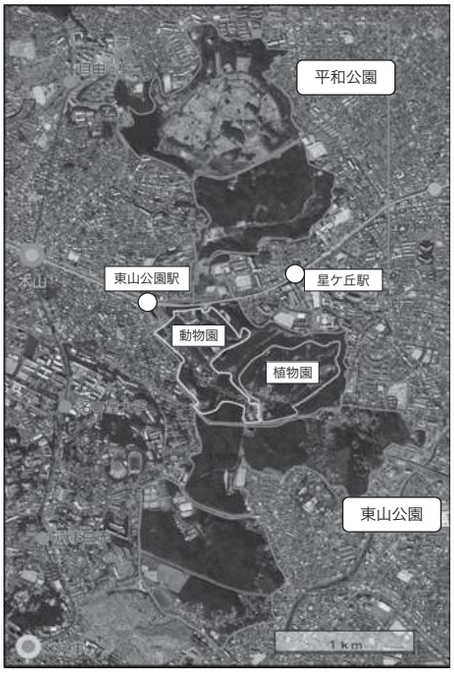


図　なごや東山の森（平和公園、東山公園）

■「東山公園」の設置・建設計画

「東山公園」設置のきっかけは、大正15年（1926）に都市計画決定された名古屋市の公園計画に位置付けられたことによる。「都市計画区域全体にわたる公園網」は全国に先駆けたもので、既設の中村公園、鶴舞公園の拡張と共に、市内一円に新たに22公園を設置する計画が決定された。東山公園はこのうちの１つで、市域の東部丘陵、自然公園となり得る東山の地約81万坪が選ばれた。

その後しばらく東山公園建設の動きはなかったが、昭和7年（1932）の東邦瓦斯株式会社からの寄附申出（植物園建設費）の頃より具体的なものとなった。名古屋市は、当時先駆的だった区画整理手法（３割減歩の方策）を活用し、地元からの土地や建設費の寄附等の協力を得て財源を確保した。事業推進にあたり大岩勇夫市長は「日本一、東洋一の動植物園を含む森林公園をつくる」という構想を掲げ、卓越した技量や見識を持った人材を集め「森林公園建設計画（約25万坪）」が動き出した。

■「東山植物園」の整備

当時、動物園には前身（市立鶴舞公園附属動物園、大正７年（1918）開園）があり、手狭な鶴舞からの移転が課題となっていた。

一方、植物園の前身に相当するものは見当たらない。かつて名古屋では江戸時代の薬園から始まる植物園の歴史があり、江戸末期には本草学者の水谷豊文や伊藤圭介の私園、明治初期には愛知県立の植物園、明治後期から大正中期までは尾張徳川家大曽根邸の明倫博物館附属植物園などがあった。しかしその後しばらく植物園の無い時代が続いていた。

東山植物園整備の原動力は、前述の東邦瓦斯株式会社からの寄附であり、寄附に際して同社岡本櫻社長は「他の大都市に有つて名古屋市に無いもの、而も金持ちも貧乏人も均一に裨益する植物園を設けるといふ条件を附けたらどうか」と秘書に語ったと伝えられている。また昭和７年９月には、梅村甚太郎率いる名古屋博物学会から植物園及び標本庫の設置要望が市議会に陳情されている。

昭和９年（1934）秋、大森林公園の設計案が整い、植物園は予定面積約24haの敷地に、大温室を中心にして薬草園や教材園、水生植物園など20を超す各種区分園を設けるほか、自然の山林渓谷などを利用した特有樹林地や一般の散策遊覧に資する逍遥道路、児童園等が計画された。昭和10年１月、市議会の議決を経て直ちに着工、寄附金を基礎に一部予算

を追加して291,000円の工事費で２カ年計画により整備工事を進めた。なお、大温室については同年秋まで設計作業が行われ、昭和11年２月に着工、急ぎ工事が進められた。

温室植物の見せ方については、開園当時の植栽計画や新聞記事等から「日本から遠く離れた熱帯地方・乾燥地方の自然の美を取り入れ、人々に非日常的な空間を体験、満喫してもらう」という展示方針が類推されている。植物を単に並べるだけでなく修景等も工夫してその特徴を魅力的に見せる展示は、今日の東山にも受け継がれている。

昭和12年（1937）３月３日東山植物園は開園式を迎え、その３週間後に開園した東山動物園と共に戦争を乗り越え、名古屋のまちの発展、時代のニーズに合わせて成長してきた。

■「東山植物園」の特長

①東海の地形・自然を生かした植物園

東山植物園は、陶土層を含む東海層群に属する標高55m～105mの丘陵地形と、二次林の広がる自然を生かした約6,800種の植物を保有する日本有数の植物園である。種の保存を進める日本植物園協会の「植物多様性保全拠点園」の役割も担い、シラタマホシクサやマメナシなど東海固有植物や絶滅危惧植物の保存にも取り組んでいる。

②日本最古の重文温室と多彩な温室植物

地方公共団体が設立した植物園として京都府立植物園（大正13年（1924）開園）に次ぐ歴史があり、温室前館は現存する日本最古の公共温室である。温室を彩る植物は、開園当初からの植物（インドボダイジュなど13種）を始め、フタゴヤシ、ウツボカズラのコレクションなど80年余の歩みの中で培ってきた約4,000種もの多彩な植物を有している。観賞温室は環境の異なる10の部屋で構成され、熱帯・亜熱帯の観葉植物や花木類など世界の植物を楽しめる。

③代々築かれてきた美しい景観

名古屋の都心近くにありながら、園内随所で美しい景観に癒される。技術スタッフにより丁寧に育成された「桜の回廊」「バラ園」「しゃくなげの森」「お花畑」などの花々、「奥池」や「日本庭園」を始め谷あいの園地を染める秋の紅葉など、四季折々の景色が美しい。また、白川郷から移築された「合掌造りの家」の一帯では、ふるさとを感じさせる景観で懐かしい雰囲気が味わえる。

今回の温室前館の保存修理に合わせて、前庭の「洋風庭園」を一体的に整備し直した。新たな洋風庭園は、２つの軸線を基調に左右対称の庭園構成で、東西軸には露段式の水景・ステージ・花壇を、南北軸には温室前館の姿を映す鏡池を配し、水と緑と建築が調和した上質な景観を創出した。

④植物の魅力を伝える歴史と文化

東山植物園では、人と植物との関わりを実感できる歴史文化の展示も工夫されている。「也有園」には江戸時代の俳人「横井也有」が読んだ俳句50句が、「万葉の散歩道」には選考された100首が対象植物と一緒に鑑賞できるようになっている。植物の薬効を紹介した「薬草の道」や毎年正月に「葦の門松」を立てる「旧兼松家の武家屋敷門」、東海地方の代表的な植物を集めた「東海モデル林」、古くから焼き物が盛んだったことを物語る鎌倉時代の「古窯」などもある。また植物会館内に、名古屋出身の本草学者で日本初の理学博士伊藤圭介の資料を保存・展示した「伊藤圭介記念室」を設けている。

⑤動物園や周辺施設も楽しめる立地

隣接する動物園は日本一の動物展示種数を誇り、東山公園内では遊園地やスカイタワー、ボート池なども楽しめる。星が丘周辺には洗練された街並みの商業施設もあり、植物の世界に浸るだけでなく、その日の気分やニーズに応じて色々な楽しみを味わえるのも本園の魅力である。

■おわりに

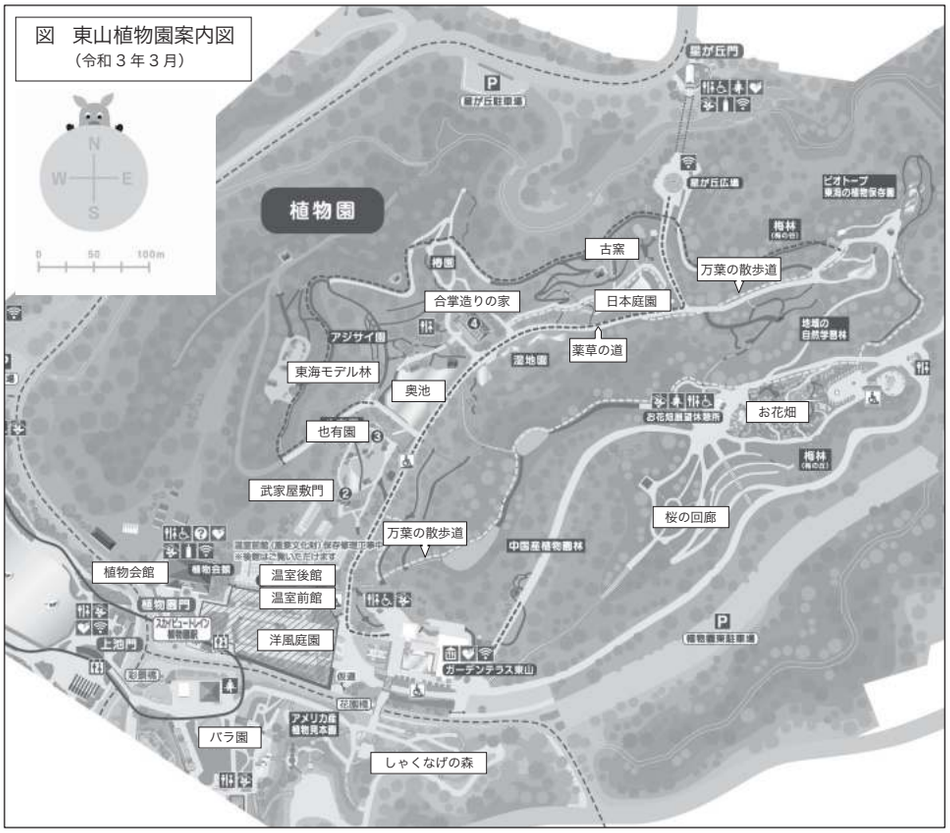
名古屋市では、社会情勢の変化への対応と動植物園の役割や使命の変化を背景に、平成18（2006）年「人と自然をつなぐ懸け橋へ」を目標とする東山動植物園再生プランを策定し、開園100周年にあたる令和18（2036）年度の完了を目指して、東山動植物園の再生を進めている。

植物園においてはこれまでに整備した「桜の回廊」に加え、今回「温室前館」「洋風庭園」などの再生整備が完了する。今後は、整備した施設を活用し環境教育や楽しくわかりやすい植物情報の発信等のソフト施策の充実を図るとともに、「お花畑」「温室後館」等の再生整備を進める予定である。

自然と歴史文化を生かした日本有数の植物園「東山植物園」を訪ねて、お気に入りの魅力を是非見つけてみて欲しい。

（あんどう　すみお）

図　東山植物園案内図
（令和３年３月）



特集Ⅰ
建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第４回）

5

ガラス温室と東海支部復活60周年

初代支部長一圓俊郎がつなぐ縁

日本建築協会東海支部支部長

篠原佳則

1964年　愛知県生まれ
1986年　名古屋大学工学部建築学科卒業
1988年　名古屋大学大学院工学研究科
　　前期課程修了
1986年　株式会社安井建築設計事務所入社
2016年　日本建築協会東海支部支部長
2020年　株式会社安井建築設計事務所理事
現在に至る

繊細なガラス温室の佇まい

2020年11月26日。保存修理工事中のガラス温室を訪れた。修理工事中ではあるが、鉄骨、銅サッシ、ガラス、建物内の石積みなどは完成し、展示のための整備と外構整備をしている。名古屋市緑政土木局の安藤さん、野場さんから重要文化財の保存修理の苦労やポイントをお伺いしながら電気溶接のアングル材による明るい空間を歩いた。何を選択して大事にして整備していくのか。何を後世に残していくのか。オリジナルの鉄骨を最大限残しながらの修理や、電飾に配慮した銅サッシの復原、ガラス開閉機構の復原など、見どころ満載です。


展示植栽がはいったガラス温室


銅サッシとガラス開閉機構

復活初代支部長一圓俊郎

東山動植物園の目玉施設でもある「東山植物園温室前館」の設計者一圓俊郎氏は日本建築協会東海支部復活初代支部長。東京大学を卒業し名古屋市に入庁した一圓氏はわずか1年半でこのガラス温室を設計し完成させた。現在の年度ごとに業務や工事を発注している公共事業に比べると、スピード感が違う。東海支部の誰に聞いてもはっきりと判らなかった当時の様子が、本特集の瀬口先生による論考により、はっきりとよみがえったことは、大変喜ばしいことであり、この東海支部の貴重な財産になりました。

保存修理工事の完成と披露

1936年に完成し、現存する最古のガラス温室として2006年に重要文化財に指定され、2014年から保存修理工事を実施し、今春にはお披露目される予定とのこと。重要文化財としての価値と復原修理の目的とその技術的な説明を名古屋市の野場さんにまとめていただき、歴史的建造物の遺伝子をどう残していくのか、具体的な記載をいただいた。日本建築協会東海支部復活60周年のタイミングでの工事完了には大きな縁を感じないわけにはいきません。

東山動植物園の成立ちと今後

東山動植物園は民間出資者の想いに、行政が応えて出来上がった。現在のPFIの原点に近いプロセスのように感じます。広い丘陵地に生物多様性に対応した日本有数の植物園であることを名古屋市の安藤さんにまとめていただいた。まさしく、多面的な視点で、初代支部長一圓俊郎氏設計の植物園温室を論ずることができたのではないでしょうか。

東海支部復活60周年

1945年に終戦を迎え、焼け野原になった国土から戦後復興をとげて1950年代後半には高度成長期を迎え「もはや戦後ではない」と言われた。現在、木造復元を目指している現名古屋城天守閣が、鉄骨鉄筋コンクリート造とニューマチックケーソンという基礎構造によって1959年に再建されています。1956年に名城再建準備委員会が設立されてから設計・建設の名古屋市建築局のリーダーが一圓氏です。

日本建築協会東海支部は1947年に設立されましたが、活動がままならず1960年に改めて一圓支部長のもとに復活しました。戦後の鉄筋コンクリートを使った住宅づくりがひと段落し、名古屋城天守閣を再建させ、より豊かな街を目指していく時代であったのではないでしょうか。

日本建築協会東海支部は復活60周年を迎えました。ガラス温室の修復が完成する年に復活60周年を迎える偶然に、長い歴史を歩んできた建築と組織に対する当事者の熱い想いに、思いを馳せさたくなります。社会の動きが速まるばかりの今、建築に携わる者として、しっかりとした視点での取り組みが求められるのではないでしょうか。復活60周年はその視点の確認を行う良い機会かと思います。

（しのはら　よしのり）

特集Ⅱ
納マリ倶楽部

納マリ倶楽部

東海支部青年委員会における30代前後の若手設計者の2020年度活動報告

開催日：2020年10月28日（水）
場　所：日建設計名古屋オフィス
9F「Sakae-BA400」

執筆者：

塩田哲也（委員長）
日建設計　設計部門　設計部

中井孝幸（副委員長）
愛知工業大学工学部建築学科　教授

久保久志
東畑建築事務所名古屋オフィス　設計室

松下拓真
東畑建築事務所名古屋オフィス　設計室

鈴木豊一郎
日建設計　設計部門　設計部

三宅伸幸
安井建築設計事務所名古屋事務所　設計部

佐藤　剛
大林組名古屋支店　建築設計部

鵜飼浩平
withU architects

■納マリ倶楽部の活動報告

本年度は発足して３年目を迎えるということで、これまでの活動からより発展する内容を目指していたが、コロナ禍の中、思うような活動ができなかった。そんな中、感染防止対策を図りながら、第67回日本建築協会青年技術者顕彰を受賞した２名のメンバー交えて、各々の直近の活動事例を持ちより、一年の振り返りを行うことができた。以下、各々の活動報告の概要などを記す。

１．「建築のなか→」での試み

東畑建築事務所：久保久志

設計事務所での設計活動の傍ら、アトリエ系建築家・大学研究室・学生と協働して、建築について様々な視点から語る集まり『建築のなか→』を運営している。「継続的な批評性のある場所をつくること」「建築の輪のつながりをつくること」「建築の見方の枠を広げること」を目的としており、テーマに沿ったゲストスピーカーによるレクチャーだけではなく、参加者を巻き込んだワークショップを行うことで、より親密により深い議論に繋げることを大切にしている。

年４回程度の開催を目標にしているが、毎年４月には『NAKA→賞選定会議』を開催し、東海圏に実在する建築やプロジェクトに対する批評を通して、「今、建築に対して気になっていること」という視点から、建築のさらなる可能性や見方の枠を広げる場をつくっている。世代の異なる３人のプレゼンターが今まさに気になっている建築をテーマで一括りにした３作品を持ち寄り、互いがプレゼンし合い、議論し、最も気になる建築に勝手に賞を与えてしまおうという試みになっている。今年度は初のオンライン開催となり、30代代表として私がプレゼンターを務めたこともあったので、納マリ倶楽部でそのプレゼンテーション内容について話す機会を得た。



写真　オンラインでのNAKA→賞選定会議の様子

テーマは「作用しあい掛け合うこと」。設計者が目指したい空間・体験があった場合に、それらをより豊かにするために設計段階の各フェーズで工夫を重ねること。そういったことが巧みにみられる建築作品として、①藤森照信氏設計「浜松市秋野不矩美術館」、②香山壽夫氏設計「長久手市文化の家」、③岐阜県立森林文化アカデミー及び木造建築スタジオ他設計「morinos」の３作品を挙げた。①では、展示空間と共用部の素材の使い分け等の「対比の多用」で生み出す豊かさ、②では、軸性の強い空間にひょいっと顔を出す滞在空間を配置するプランニング等の「重ね合わせ・ズレ・反復の多用」で生み出す豊かさ、③では、多様な活動の背景となるよう力強くもすっきりとした空間に見せる数々のディテール等の「シンプルに見せる・手仕事の多用」で生み出す豊かさ、といったように分析してみると、改めて自分自身の設計者としてのこだわりに気づくことができた。

コロナ禍で中々建築を見て歩けないこんな時だからこそ、過去に撮影した建築写真や文献を見返し、テーマを変えながら幾つかの建築作品を横串で見てみるような経験にも時間をかけることができる。来年度はぜひこのような試みを同世代の納マリメンバーで行ってみたい。

（くぼ　ひさし）

２．近作の報告

東畑建築事務所：松下拓真

金属表面加工技術で世界トップシェアを誇る企業の名古屋支店の現地建替計画です。敷地は1960年の名古屋支店創業時から増改築を繰り返し現在に至る。敷地周辺は低層住宅密集地で、プライバシーや光害への配慮が必要な敷地状況でした。本計画では下記が求められた設計条件です。

【１．現地居ながら建て替え】【２．搬送トラックが寄付きやすい広いトラックヤードの確保】【３．社内コミュニケーションの活性化】

これらの設計条件と共に、名古屋支店が創業時からこの地で地域と共に歩んできたことを踏まえ、「周辺環境との調和と快適なオフィ

ス環境の両立」を目指し、３本の柱をコンセプトに計画を行った。

【機能性】コンパクトオフィス

【快適性】アメニティオフィス

【周辺・環境】グリーンオフィス

プランは振動が少ない１階に実験検査室ゾーン、２階に事務室ゾーン、３階に厚生ゾーンを配置しフロア毎に各ゾーンが完結する明快な構成とした。

住宅密集地における快適なオフィス環境の創出

敷地は周囲を住宅に囲まれており、事務棟共用部は北側のみに開口部を設け、隣接する西側住宅側には窓の無い構成で住宅への光害防止やプライバシー確保を図った。

事務棟階段室からは北側のピクチャウィンド越しに、隣接する自動ラック倉庫の壁面を利用した壁面緑化が見える構成で、安らぎや憩いのある内部空間とした。ピクチャウィンドはサッシュ枠が見えないディテールにより窓の存在を消し去り、緑をインテリアに取り込んでいる。また、トップライトは直達光の入らないディテールにより採光を確保している。時間により刻一刻と変わるトップライト採光は、外部を感じる装置の一つとしても機能している。

周辺環境への配慮が作り出す外観構成

周辺環境への配慮が外観を構成している。周辺住宅への影響を最小限にするため、１階はアイレベルに窓を設けず、２階執務室は収納ボックスを浮かして「地窓」「高窓」で近隣への視線を制御している。３階はセットバックし視線をカットし、眺望を確保した。

セットバックした３階に屋上庭園を設け、緑豊かな安らぎのあるオフィス環境を実現している。

社員を大切にし、地域と良好な関係を築いていたクライアントだからこそ生まれた建築のように思う。



（まつした　たくま）

３．近況報告

日建設計：鈴木豊一郎

久し振りの納マリ倶楽部でしたが、すぐに和気あいあいの雰囲気に。相変わらず、ざっくばらんに話せるメンバーで気軽に意見を交わし、つい（予想通り？）想定時間を軽くオーバーした近況報告会でした。いつもであれば、そのまま懇親会という流れですが、、、名残惜しんで帰宅となりました。

私は、８月に竣工した某企業のプロジェクトを紹介しました。同じ設計者の集まりですので、特に設計で意識したこと、完成時のゴールの設定について話しました。今回２度目のクライアントで主管部署と担当役員も同じでしたので、クライアントの満足するゴールを実感として分かっていました。そのゴールを実現するため、まずは与件とコンセプトの再構築から始めました。ユーザーの生の声を聞くために各ユーザーの担当者を含めたプロジェクトチームを作り、建物のハード的な話の前に、何故この施設が必要か？ この施設で何を実現するか？ そのために、どんな人がどのような時間帯でどのような活動をするか？ など運用に踏み込んだ会話が必須となります。皆さんから意見を引き出すために、この時点の設計者は、クライアントが意識していない飛び抜けた発想とアイデアの提案が必要で、手を伸ばしてギリギリつかめるかどうかの境界点、つまり建物完成後のゴール地点をイメージしながら探ります。また、「未来」「革新」「変化」というチャレンジすることと、「調和」「華美でない」「効率重視」というキープすることを見定めました。その優先順位と導き出したコンセプトをクライアントと共有しておくことで、その後の設計がすごくやりやすかったと感じています。また、プロジェクトチームが一丸となることで、困難な状況を突破していくことも出来ました。完成した建物を、プロジェクトチームメンバー各人が自分で考えて実現したと感じて自分の言葉で語れることが理想で、見学会の案内時に建物を説明されている姿を見て嬉しくなりました。これから長く運営されていくことを願います。

（すずき　とよいちろう）

４．にぎわいの「場」としての図書館

珠洲市民図書館・すずキッズランド

愛知工業大学：中井孝幸

今回は設計プロポーザルの応募時より、図書施設学識アドバイザーとして関わった珠洲市民図書館（設計：双星設計北陸事務所）の図書館家具デザインについて報告する。石川県の能登半島の最北端に位置する珠洲市は、人口約1.4万人の過疎地域である。珠洲市総合病院の元駐車場に、図書館と子育て支援センターが複合した施設が2019年３月に新築移転した。不整形な敷地形状に合わせて２つの三角形の屋根をかけ、共用部のすずなりラウンジは通り土間として、図書館と子育て支援センターをつないでいる。



写真１　珠洲市民図書館・すずキッズランド

静と動の「音」のゾーニング

近年の図書館には、にぎわいの場としての役割が期待されている。本を貸し借りするだけではなく、本を読んだり、作業をしたり、多様な学習活動を行うため、これからの図書館には「音」のゾーニングが求められている。

珠洲市では、児童開架エリアを「動」として、雑誌のブラウジングコーナー、ヤングアダルトコーナーの順に配し、一般開架エリアの端部を「静」のゾーンとして閲覧席を計画している。児童開架は子どもの成長に合わせた椅子を配し、一般開架も畳コーナーやカウンター席など、多様な閲覧席を用意した。



写真２　児童開架（『新しい図書館30』日本ファイリング*）



写真３　一般開架のブックウォールとカウンター席（同上*）

（なかい　たかゆき）

5．近作を通した納マリ倶楽部での議論

安井建築設計事務所：三宅伸幸

コロナ禍の影響により、毎年数回開催してきた納マリ倶楽部は、今年度は１回の限られた開催となった。参加者各自による、各々のプロジェクト紹介を経て、その後の意見交換的なディスカッションをすることが通例であるが、この意見交換にこそ、この活動の醍醐味があるように、参加する度に都度思う。

久方ぶりの開催であったことで、ちょうどこの夏に竣工したプロジェクトを紹介することができた。

物流のソリューションを総合的に提案する企業の営業所兼本社機能を併せ持つ建物で、多様な用途を敷地内に平面的・立体的に最大限に組み合わせた複合的な建築物である。様々な要素をつなぎ合わせる為に、中庭を中心に構成した分かりやすい平面計画。ソリューションの多様性をアピールするよう、建物内のあらゆる箇所からそれらを体感できる「建物全体のショウルーム化」を実現した計画。企業カラーの白とグレーを基調に、PC板、ECP、ALC、RC、金属サイディング等、多様な素材を組み合わせ、多様性を表現した外観計画等に特徴がある。

一通りの説明を終えると、意見交換は始まる。質疑回答による対話は、極めて創造的な議論になるから、有意義なやりとりになる。この対話の本質は、建築形態や建築計画、構法やディテールにおいて、他の手法や対案の可能性を相互にその場で議論していることである。だから、質問はある種の意図や暗示が内在されるし、回答は設計与条件の提示とその価値判断に至った経緯の回答になる。こうしたやり取りにおいて、その場の参加者全員が設計者の立場としての情報共有を行う、建設的な議論の場となり、自身の設計知見に還元できる、有用な機会で、大変有難いと感じている。

こうした建設的・創造的な議論に触れる度、ちょうど昨年参加した、名古屋市主催による「ナゴヤをつなげる30人」への参加を思い起こす。「ナゴヤをつなげる30人」は、企業・行政・NPO・市民など、組織の垣根を越えた関係者で、地域コミュニティを考える場であった。意思決定や合意形成ではなく、問いをたて共有することで、参加者自身が目的を創り出し、主体的に実行することを促す創意形成の手法で、地域コミュニティの活性を考えるものであった。

納マリ倶楽部の面々でも、議論を一歩超えて、創造的な何かしらの形に残すものが出来れば、より一層の有意義な活動になるのではないかと感じるこの頃です。

（みやけ　のぶゆき）

6．「近況報告会　2020納マリ倶楽部」

報告会で紹介した近作の中から春華堂の本社

日建設計：塩田哲也

複合施設「スイーツバンク」をとりあげたい。本建物はうなぎパイで親しまれる春華堂の新しい拠点であり、鉄骨造２階建て、本社オフィスに加え、一般向けの販売店とカフェ（レストラン）、浜松いわた信用金庫森田支店を含む複合施設となっており、2021年４月にオープンを予定している。菓子から連想される「家族団らんの時間」を表現すべく、外観はダイニングテーブルとチェアをモチーフにしたという他に例を見ないプロジェクトである。

「訪れた人が、まるで小人の世界に紛れ込んだような、非日常の世界観を楽しんでもらいたい」との春華堂の説明の通りの空間となっている。

この建物を設計の依頼を受けたのは2015年であった。来訪者を喜ばせたい、という春華堂の考えは当初より一貫していたが、何をもってそれを実現するか、については多くの議論とデザインスタディが必要であった。ダイニングテーブルとチェアという方針が出た時には着手から実に１年以上経過していた。

その後設計段階に入ってからは具象的なデザインを徹底すればよいから、ディテールの検討方針で迷うことは無かったが、中途半端な結果だけは避けたいと考え、「いかにソレらしく見えるか」については妥協を許さなかったので、そこでもやはり時間を要することとなった。

ディテールのデザイン上特徴的だった点は大別して２つある。一つ目はテーブルとチェアのリアリティを追求すること。家具の実物や設計図を取り寄せて、実物に施されている微妙な傾斜や細かな面取りなどまで読み取り、建築化するのだが、スケールの違いや素材の違いがあるなかで、構造を成立させることや、本物らしい質感を得るために数々の工夫を見出す必要があった。二つ目はテーブルとチェアを際立たせるために、それ以外の部分の存在感を消すことである。

外壁や窓など（建築に必要で、家具には無い物）のディテールは極力目障りにならないように心掛け、また吸排気などは外壁に設けないなど、抽象的な表現を徹底した。

これらの努力が功を奏し、実物比13倍の大きさのテーブルとチェアは、街の中で他とは格別の存在感を醸し出している。また建屋以外にも屋外設備機器の目隠しをプレゼントボックスやショッピングバックに見立てたり、カフェのポット、ショップの浜松まつりの提灯など、施設のアイコンとなるアイテムをちりばめ、それぞれ同じ倍率でスケールアップさせて全体の世界観を統一している。

この建物を設計した私たちや、施工者、店舗デザイナーら関係者は皆この非日常の世界観の具現化を目指し、通常とは異なる価値観、センスで数多くの課題と向き合ってきたわけだが、それぞれが持ち合わせたスキルが同じ方向を向いて発揮されたおかげで実現に漕ぎ着けられたのだと改めて思う。

多くの仲間とこれらの体験を共有できたこと、訪れる人、見る人を元気づける、そのようなプロジェクトに関与できたことをうれしく思う。

（しおた　てつや）

7．新幹線の車窓から

大林組：佐藤　剛

2020年６月、私は自分の住まいを名古屋市から自身が生まれ育った静岡県へと移すことにした。納マリ倶楽部の中では古民家を改修した自邸の設計思想を簡単に説明させていただいたが、コロナ禍によって一般的となった在宅勤務の可能性、長距離通勤を選択した私が感じている「時間」に対する意味の変化など、自邸とともに議論をしたかったニューノーマルな働き方について思うことをこの場を借りて書き記したい。

静岡を自身の居住地として選択したことによる一番の不安は、通勤時間の長さだった。会社は新幹線通勤を認めてくれたが、それで

も片道で約３倍の時間が必要となる。しかし、長くなった通勤時間は移動する時間帯と手段の変化に伴ってその意味が変わる。自宅から最寄り駅までの手段は自転車が主となるが１日における数少ない体を動かす時間へと置き換わる。新幹線による移動時間は、アイデアを着想するためのイメージ収集や思考を整理する時間に置き換えることが可能となり、疲れているときには休んだり、本を読んだりといった休息・娯楽の時間に割り当てることも可能である。何より行き帰りにおいて、時間の制約が生まれたことにより１日の勤務可能時間が明確になり、生産性・効率性を求める意識が強くなったことを実感している。意識の変化に合わせて環境を構築するよりも、環境に合わせて意識を変化させる方がより早く変われるのだろう。即ちそれはオフィス環境にも同じことが言えるはずだ。ニューノーマルという概念において、労働者が“集まって”働く意味の再定義は、オフィスという建築の存在意義となり、新しい建築が生まれるきっかけとなるはずである。オフィスに勤める労働者の1人であると同時に労働環境を提供する建設業の設計者として、その定義を自分なりに解釈しておきたい。今回の納マリ倶楽部の議論が活発であったのもリモートではなく、集まったことによるところが大きいと思うがその理由について、いつか議論が出来ればと思う。

元々の敷地の特性を読み解いて設計を進めるのと同様に、業務の形態や実態に合わせた柔軟な提案が求められるようになるかもしれないし、その土地にあった働き方、東海地方ならではの働き方というのも生まれてくるのかもしれない。車窓から見える景色を眺めながら、そんなことを考えている。

（さとう　たけし）

８．雑多な納マリ

withU architects：鵜飼浩平

「設計コンセプトは？」設計を行う際に必ずと言って良いほど飛び交う「コンセプト」という言葉。私たち設計者は、設計を行う際に、建築全体の在り方を「コンセプト」という形で提示する。いわば、計画する建築の背骨のようなものである。しかし近年、青木淳氏の「フラジャイル・コンセプト」や乾久美子氏「小さな風景」、吉村靖孝氏ら「アドホシズム宣言」等、従来の建築全体を規定する「コンセプト」とは異なる、個々の場や部分を尊重し、全体を構成するという建築の在り方が提示されている。言わば、背骨なき建築である。納マリ倶楽部には、大規模な建築の設計に携わる建築士が所属しているため、不特定多数の利用が想定される建築の設計手法としての可能性について意見交換を行った。

住宅のような小規模な建築、特に住宅改修において実践されている、これらのアドホック（訳：場当たり的）な建築は、既設部分と新設部分の間に「偶然性」を見出し、さらに雑多な納まりとすることで、部分から全体の構成を行うという設計手法である。2016・2018・2020年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展での日本館展示のテーマが、建築の「部分」や「もの」に着眼し、都市を観察し、建築をつくることに主題をおいていたように、微視的な視点で今あるものの豊かさを見出すこと、「もの」「こと」の連鎖がつくる建築の可能性を見出すことは、近年の建築の主要な設計手法のひとつになりつつある。

しかし、不特定多数の利用が想定される公共建築において、これらの「もの」「こと」連鎖からつくる設計手法は課題も少なくない。「こと」連鎖による建築は、乾久美子氏ら「延岡駅周辺整備」が、場の連続体をニュートラルなフレーム体の中に入れるという手法でひとつの回答を示し、評価を得ている。しかし一方で、改修において実践されている「もの」連鎖を主題とするアドホックな建築は、不特定多数が利用する大規模な建築においては浸透していないのが現状である。納マリ倶楽部の意見交換の中で、「雑多であることを受け入れる利用者側の感覚的な問題」や「不特定多数が故の、利用者の使い方を想定しなければいけないという問題」、さらには「設計者の恣意性の問題」等、設計者と利用者の連携や、意識の共有の難しさ等が挙げられた。解決策の一つとして挙げられたのが、利用者参加型の設計手法による綿密な利用者との設計意図の共有である。雑多な納まりは、空間にノイズを生じさせ、ノイズを活かして多様な使い方を創出するというのが本質である。よって、不特定多数の利用者が使う大規模な建築においては、設計者と利用者がノイズを受け入れる意識の共有が求められるからである。また「もの」「こと」連鎖から建築をつくる設計手法では、建築の「完成」が意味をなさないという意見も印象的であった。

「もの」「こと」連鎖から建築をつくる設計手法は、利用者の偶発的な出会いや発見等のセレンディピティを生み出す、新たな可能性をもった設計手法である。しかし、そのためには、設計者と利用者が共通意識をもって、設計に向き合うことが大切であり、建築が未完であり、利用者がつくり込み・使い続けることの重要性を理解することが、大切になるのである。利用者参加型の設計が浸透しつつある今、新しい視点として、「もの」「こと」連鎖で建築をつくることの可能性を探る良い契機なのかもしれない。

（うかい　こうへい）



写真　納マリ倶楽部での活動報告の様子

地域に開放された築山遊歩道と交流テラス

愛知製鋼厚生会館　Ai-terrace

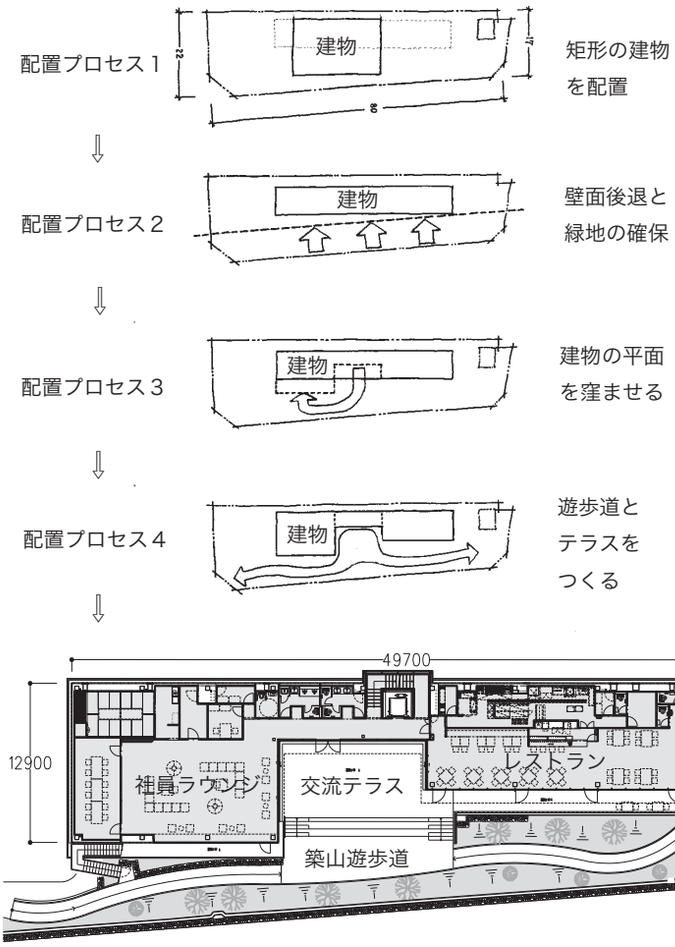
愛知県東海市

竹中工務店
因　純一・永岡　久

国道と鉄道に挟まれた駅前の細長い敷地。企業の厚生施設であるが塀を設けず、地域に開放された建築をつくっている。細長い敷地はさらに細長く、緑地と建物に区切り、緑地には住民が自由に通り抜けできる小高い丘状の遊歩道を設けている。建物も細長く、中央部分を平面的に窄ませ、遊歩道とつながるテラスを２階に設けた。テラスは施設のサブ玄関であり、社員ラウンジや一般客利用のレストラン兼社員食堂に向き合い、内外出入りできる交流の場となっている。建物の屋外空間は、景観的にも使われ方においても地域と有機的な繋がり持ち、住民，従業員，企業を結び、地域に馴染む建築の創出を目指いしている。



東の国道に面して設けられた築山遊歩道と２階交流テラス



２階平面図



緑地の中を通り抜けできる築山遊歩道

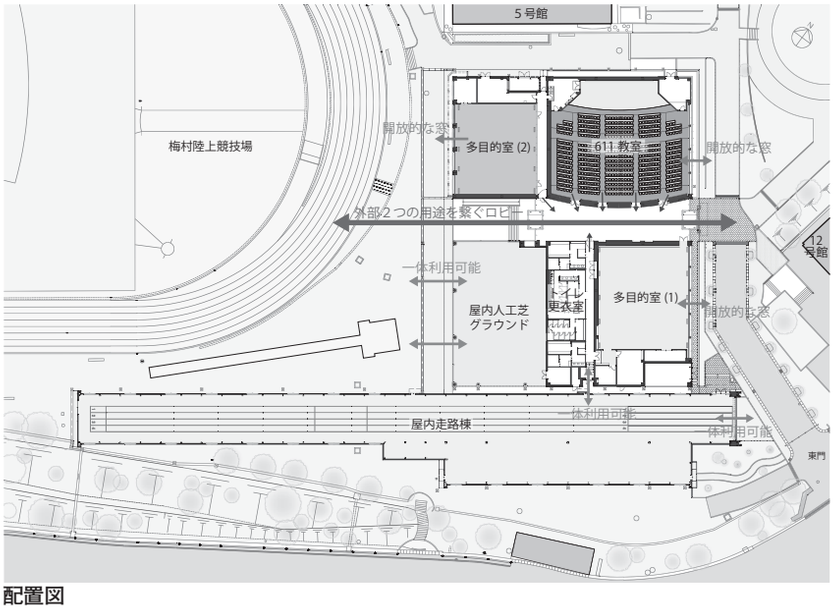
既存のエレメントを取り込む大屋根空間

中京大学豊田キャンパス６号館

愛知県豊田市

伊藤建築設計事務所
神保朋之・稲垣志聞

中京大学豊田キャンパスの周囲は緑に囲まれ、キャンパス内は広場と各棟のアーチ形状で彩られたファサードによって豊かな連続性をもたらしている。この６号館は他棟との連続性を意識しつつ、平屋とすることで陸上競技場への圧迫感を減らし、開放性を生み出している。アール形状の伸びやかなスカイラインをもった大屋根の中に、文教要素と屋内外のスポーツ要素を融合させ、キャンパス内の特性を継承した施設として計画した。南北の陸上競技場と屋外動線を繋ぐロビーは、それらの要素を結ぶ象徴的な空間として機能している。
ガラスを用いたファサードは、既存の緑や開放性を施設内に風景として取り込み、屋内人工芝グラウンドは陸上競技場の機能を拡張、連続させる空間とし、建屋周囲の要素を一体的に利用できる計画としている。



配置図



アール形状の伸びやかなスカイラインをもった大屋根



陸上競技場の機能を拡張させる屋内人工芝グラウンド



教室から見える植栽と外部動線



陸上競技場へ繋がるエントランス



豊かな緑とアーチ形状で彩られた豊田キャンパスと６号館

日常から非日常への結界となる象徴的なウェーブ

ラグーナベイコート倶楽部 ホテル&スパリゾート

愛知県蒲郡市

安井建築設計事務所
井上孝成・清水　満・藤村　篤

三河湾の海を一望する絶好のロケーションに建つ完全会員制リゾートホテルである。施設全体は“Futuristic Luxury”をコンセプトとし、今まで見たことがない新しい空間の創出、先進性のあるラグジュアリーを目指した。外構は「森」を創出しアプローチを包み込むことで非日常感を演出しつつ、光と揺らめく波に包まれるような幻想的なシーンを散りばめた。そのシーンの一つが、日常から非日常への結界となるアプローチゲートの象徴的なウェーブである。ゲートと呼応するように外構も波をイメージしたウェーブ状の石と緩やかにマウンドさせた植栽で構成した。この外構ウェーブは目線に入る場所にあるため、メンテナンスを考慮しつつ照明器具を隠した、きめ細やかなデザインとしたことで、より幻想的なウェーブを表現できた。この外構ウェーブは日本料理レストランの流麗なカーブを描く和庭園でも、枯山水の庭に入り込む波として表現している。

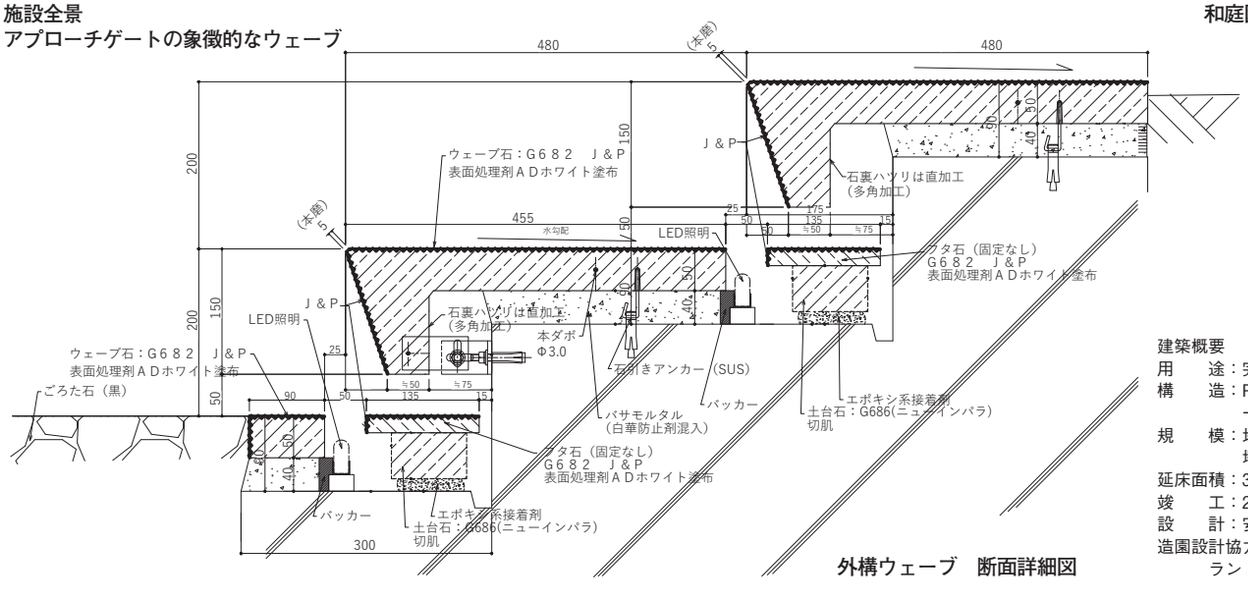




上）施設全景
下）アプローチゲートの象徴的なウェーブ



和庭園の外構ウェーブ



外構ウェーブ　断面詳細図

建築概要
用　　途：完全会員制ホテル
構　　造：RC造、一部S造、一部SRC造
規　　模：地上７階、地下１階、塔屋１階
延床面積：36,700.21㎡
竣　　工：2019年
設　　計：安井建築設計事務所
造園設計協力：ランドスケープデザイン

名古屋テレビ塔をフィーチャーするランドスケープ

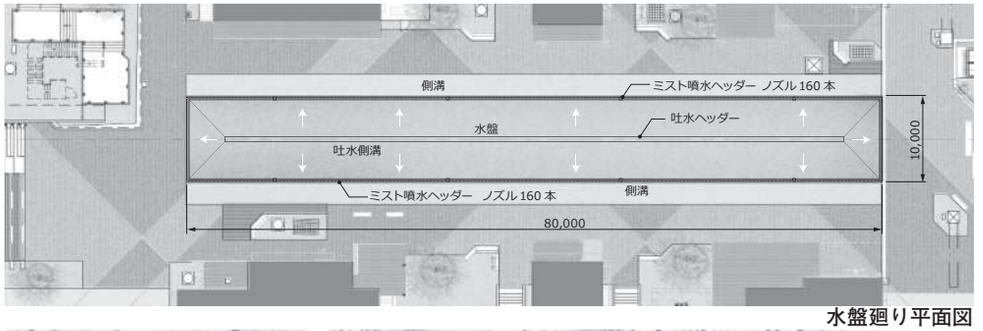
Hisaya-odori Parkの再整備と名古屋テレビ塔の免震リニューアル

愛知県名古屋市

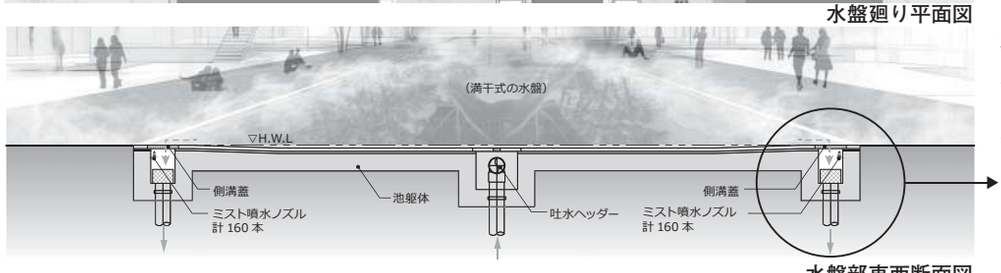
日建設計
若林亮・西大輔・石森秀一・小嶋咲紀



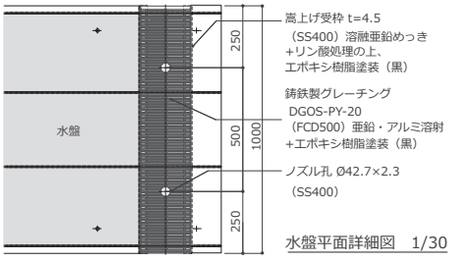
久屋大通公園南エリアでは、PARK-PFIによる「Hisaya-odori Park」の整備と名古屋テレビ塔のリニューアルが行われ、2020年９月に同時オープンした。
「Hisaya-odori Park」は、名古屋城から新堀川を経て名古屋港にいたる水と緑のネットワークの一部を形成することをコンセプトに、生態系などの都市環境や交流並びに防災減災へ寄与する新たな「都市のグリーンインフラ」として整備を行い、南北軸に明快なビスタラインを形成する空間構成により、どこにいてもテレビ塔を感じられる風景を創出し、中でも水盤に映し込んだ名古屋テレビ塔の姿を楽しむことができる広場は、観光ディスティネーションとしての引力を有すると共に、名古屋の新たなシンボルとなる空間を目指した。
一方の名古屋テレビ塔のリニューアルは、観光・商業による収益力の向上を目指す塔内部の魅力向上に加え、南海トラフ地震に備える耐震改修を行った。2005年に登録有形文化財に指定されていることから、塔のシルエットを守ること、建設時からの塔足元空間の広がりと南北に抜けるビスタを守ること、これを経済的に実現することをテーマに、レトロフィットによる免震化を行った。
異なる二つの再整備でありながら、いずれも名古屋テレビ塔を活かし、南北に抜けるビスタを大切にした計画により、市民は大通公園の北端まで足を延ばし、多くの市民が賑わう新たな街のシンボルとなる憩いの空間が生まれた。



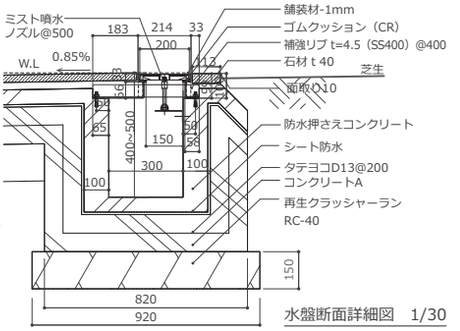
水盤廻り平面図



水盤部東西断面図



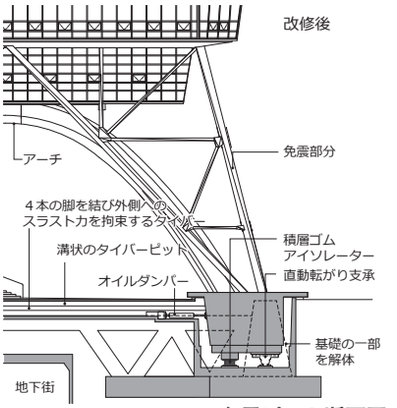
水盤平面詳細図　1/30



水盤断面詳細図　1/30



工事中のジャッキアップされた基礎



免震ピット断面図

「さかさテレビ塔」を映し出す水盤

名古屋テレビ塔を映す水盤は、公園内の広がりを持たせるように歩道面とフラットに構築した。水盤中央の吐水口から水を供給し、0.85％の緩やかな勾配を持つ底盤の上に水を張り、歩道際端部のグレーチングでオーバーフロー水を受け、この水を再び中央吐水口へと循環させている。また、グレーチング下にはミスト噴水を設け、幻想的な風景を創出している。

4,000tの塔体を支える免震レトロフィット

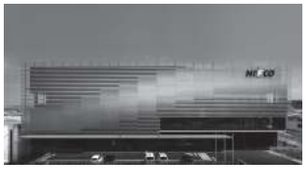
経済性から塔体を支える四隅の柱脚部のみに最小限の免震ピットを設け、4000tもある塔体をジャッキで支持した状態で基礎の中段を解体し、免震装置をセットした後に基礎を再構築した。また、既存基礎を結ぶ地中梁の切断により、柱脚が外側に広がろうとするスラスト力が発生するため、4本の柱脚をタイバーで拘束し、そのタイバーを地表面近くに設けた溝状のピット内に納めている。

第52回　令和２年度　中部建築賞　受賞作品発表

中部建築賞協議会（ホームページ　http://www.tkbe.jp/）が主催する第52回中部建築賞の審査会が、昨年10月13日に第１回、12月９日に第２回、リモートにより開かれ、受賞作品が決定されました。同賞は中部圏域の地域社会の発展に寄与し、地域と環境に根ざした優れた建築作品を表彰するもので、中部圏域内（愛知、三重、岐阜、静岡、福井、石川、富山、長野、滋賀の９県）で令和２年3月31日までに竣工した新築、改築、修復がなされた建築物を応募の対象とし、建築主・設計者・施工者の三者が表彰されるものです。

今回の応募総数は一般部門、住宅部門合わせて89点で、入賞、入選は以下の17点が選ばれました。なお、当協会東海支部は現在、中部建築賞協議会の監事を務め、文字通り、中部圏の「建築と社会」の発展に貢献しています。

【一般部門A】（入賞）



１．ニフコ名古屋技術開発棟



２．能作 新社屋・新工場

（入選）



３．豊田市役所藤岡支所・豊田市藤岡交流館



４．グローバルゲート

【一般部門B】（入賞）



５．垂井町役場



６．福井県年縞博物館

（入選）



７．浜松いわた信用金庫竜洋支店



８．コ・クリエイションセンター

【住宅部門】（入賞）



９．寺部の家



10．肥田の家



11．VILLA NAGANO

（入選）



12．有松再生プロジェクト



13．伊賀上野の家



14．露地を愉しむ家



15．下青島の家



16．金沢の家



17．八ヶ岳の山荘

審査員長　大野　秀敏　建築家
審 査 員　加茂紀和子　建築家
　　川﨑　寧史　金沢工業大学 建築学部 教授
　　佐藤　義信　建築家
　　関　　邦則　建築家
　　松本　正博　建築家
　　吉田　純一　福井工業大学 客員教授

603

法令コーナー

感染症時代に対応した容積率緩和制度の拡充

坂田　悠
福岡市住宅都市局都心創生課誘導支援係長

背景

福岡市は、国内主要都市と東アジア主要都市までがほぼ同じ距離にあり、国内だけでなく、アジアの大都市が日帰り圏内という好立地にあることから、これら都市との交流を深めながら発展を遂げてきた。また、第三次産業が９割以上を占めており、多くの人に来ていただき、集いにぎわうことが都市の活力創出の源と考えている。

なかでも都心部は、陸・海・空の広域交通拠点（博多駅、博多港、福岡空港など）が近接し、従業員や小売額の割合が都市圏全体の約３割を占めるなど、住む人、働く人、訪れる人にとって大事な場所となっている。

まちづくりの課題と取り組み

■課題

都心部では、人口や観光客の増加など都市の成長が進む一方で、更新期を迎えたビルの建替えが進まず、耐震性やセキュリティに課題を抱えたビルが多く、国内外の企業進出の妨げになるなど、福岡市の成長にキャップがかかっている状態にある。

更新期を迎えたビルの建替えが進まない要因として、①1973年以前に建てられた建物について、容積率の考え方が導入される前に建てられていることから、建替えを行うことで現状の床面積が減少してしまう場合があること②福岡市の都心部は空港に近いことから、航空法による建物の高さ制限がかかっており、容積率の緩和を行っても、高層ビルが建てにくい状況であること等が要因となっている。

■まちづくりの取り組み

都心部では、「第９次福岡市基本計画（2012年12月策定）」や「福岡市都市計画マスタープラン地域別構想“都心部編”（2014年５月策定）」などの上位計画に基づき、都心部の核となる天神・渡辺通、博多駅周辺、ウォーターフロントの３つの地区で、それぞれの都市機能を高めるとともに、回遊性の向上を図り、地区間相互の連携を高めて陸・海・空の広域交通拠点との近接性を生かしながら、３地区を一体として、機能強化を進めている（**図１**）。



図１　都心部の将来の都市構造（福岡市都市計画マスタープラン）

都心部のまちづくりにあたっては、従来型の行政の投資によるものといった発想からの転換を図り、様々な規制緩和によって、民間の投資意欲を引き出しながら取り組みを進めていくことが重要であり、福岡市では、地区計画（再開発等促進区）、総合設計制度等を活用し、市独自の容積率緩和基準を定めた「福岡市都心部機能更新誘導方策」の運用を2008年８月から開始している。国際競争力、環境（交通環境含む）、魅力、安全安心、共働の観点から、都心部の機能強化と魅力づくりに寄与するプロジェクトに対し、従来以上の容積率緩和を行うこととしている（※1）。

〔※1. 福岡市HP「都心部機能更新誘導方策」参照〕

また、天神地区や博多駅周辺地区において、耐震性の高いビルへの建替えをより一層促進し、高質なオフィス・商業空間と都市景観の創出を図るため、「天神ビッグバン」や「博多コネクティッド」といったプロジェクトにより、魅力あるデザイン性に優れたビルなどに対して、期間限定（※2）で更なる容積率緩和を行うこととしている。

〔※２．天神ビッグバンは2024年12月31日まで，博多コネクティッドは2028年12月31日までに竣工予定のビルが対象〕

さらに、航空法による建物の高さ制限について、2014年５月に「グローバル創業・雇用創出特区」として国家戦略特区の指定を受け、同年11月に天神明治通り地区において「航空法高さ制限のエリア単位での特例承認」が認められた。特例承認については2017年７月に旧大名小学校跡地が追加され、同年９月にはウォーターフロント地区の追加と天神明治通り地区において更なる特例承認が認められた。

このように、福岡市独自の容積率緩和をはじめとする規制緩和や国家戦略特区等により民間のメリットを生み出しながら、民間活力を最大限に活かしてまちづくりを進めている。

感染症時代に対応した容積率緩和制度の拡充

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行を契機に、福岡市では感染症時代のまちづくりについて、ビル計画の取り組みとして「換気」「非接触」「身体的距離の確保」「通信環境の充実」など、感染症等にも対応できる新しい価値を実装することが重要だと考えている。

そのため、2020年８月に福岡市都心部機能更新誘導方策の制度を改定し、まちづくりの取り組み評価項目のうち「国際競争力」の分野に、感染症対策を追加し、これまでは獲得しづらかった最大で50％の容積率緩和が活用できるように制度を拡充した（**図２**）。

また、感染症対策を実施するビル計画については、天神ビッグバンによる容積率緩和（天神ビッグバンボーナス）の適用期限を、「2024年12月31日」から「2026年12月31日」に特例的に延長することとしている。

おわりに

更新期を迎えたビルが多く集まる福岡市の都心部においては、天神ビッグバンや博多コネクティッドなどにより、ビルの建替えプロジェクトが今まさに進行している。

今後は、感染症時代に対応した安全安心なまちづくりが重要になってくることから、建替えによる耐震化やオープンスペースの創出・活用などに加え、ビルの「換気」「非接触」「身体的距離の確保」「通信環境の充実」などの取り組みを誘導していく。これらを推進することで、より国際競争力が高く、安全安心で魅力的なまちづくりにチャレンジしていく。（さかた　ゆう）

●坂田　悠
昭和55年生まれ。九州大学院卒業。平成16年入庁。



図２　感染症時代に対応した，容積率緩和制度の拡充（2020年８月リリース「世界に先がけた感染症対応シティへ!」）

建築土木一体の海上客船ターミナル

―東京国際クルーズターミナル―

安田拓矢・足立幸多朗
株式会社安井建築設計事務所　東京事務所構造部

はじめに

2020年９月10日、新たな首都の玄関口・東京国際クルーズターミナルがオープンした。本建物は昨今の客船の大型化に伴い、東京都内に大型クルーズ船が離発着可能なクルーズターミナルを整備する事業である。

建設地は東京臨海副都心の東京湾海上に位置する。水深10mほどの海底地盤からジャケット工法による土木構造物の人工地盤を構築し、その上に建物を建設する計画である。

外観は、波や船の帆をイメージした反り、大きくうねる屋根が特徴で、新たな東京港のランドマークとなっている（**写真１**）。建物内部の２、３階は間仕切のない大空間で構成することでクルーズターミナルとしての施設利用のほか各種イベントが開催可能な興行場の利用も想定している（**写真２**）。

構造計画

主体構造は鉄骨造で１階部分にオイルダンパーを集中的に配置した制振構造である。架構形式は、下部土木構造物と同じ12m×12mのスパンを持つ純ラーメン構造とし、建築と土木構造物は、今回新たに考案した接合方式（特許出願済み）により一体化を図っている。本建物は、海上に設置された土木構造物の上部に大規模な建築施設を構築する他に類のないものである。

建築土木の接合方式

建築と土木の接合方式は、剛な接合として確実に応力を伝達するだけでなく、海上に設置される土木構造の施工誤差を吸収することが求められる。そこで、土木の鋼管杭の中に、鉄骨柱を立て込み、周囲をコンクリートで固めるーのコンパクトな接合方式を考案した（**図２**）。

１階集中制振

大小様々なクルーズ船の出入国オペレーションに対応するため、２階以上は固定間仕切りや耐震要素のない空間の自由度が必要であった。またジャケット工法の土木構造物の剛性は高く、剛性が急変する建築－土木境界の１階では応答が増大する。１階部分に集中的にオイルダンパーを配置した集中制振構造とし、効率的に地震エネルギー吸収を行い、２階以上の空間自由度確保との両立を図った（**図１**）。

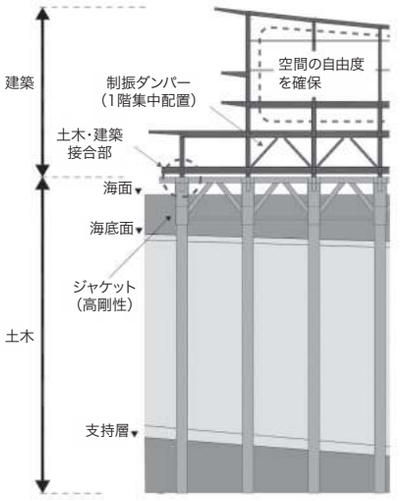


図１　断面構成

大きくうねる屋根

外観上の特徴である、３次元的に大きくうねる屋根については、一定角度で直線上に配された大梁を、各構面で角度を変化させていくことで構築した。また、各柱の長さが異なることによる剛性の不均一さに対しては、鋼管の方杖を基準レベルより高い大梁と柱部分に設けることで剛性を整えつつ、屋根架構全体の剛性も高めている。

できるだけシンプルな法則性により複雑な３次元曲面を構築することを意図したが、斜材が取り付く細部などではBIMを活用し、詳細な検討を行った。

（やすだ　たくや）（あだち　こうたろう）

●安田拓矢
1969年生まれ。神戸大学大学院工学研究科卒業。1995年株式会社安井建築設計事務所入所
●足立幸多朗
1984年生まれ。芝浦工業大学大学院工学研究科卒業。2009年株式会社安井建築設計事務所入所

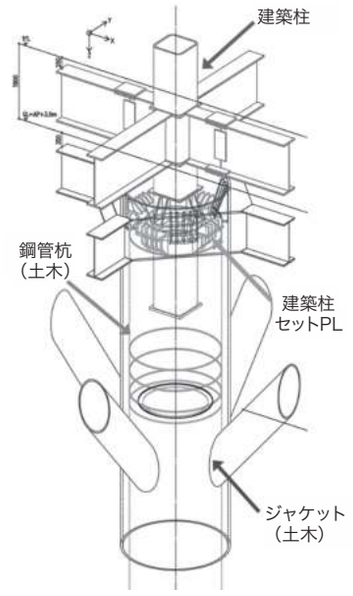


図２　建築土木接合部



写真１　外観写真



写真２　内観写真

「再読 関西の建築」

31

小林聖心女子学院

本館（中学校、管理棟）設計：
アントニン・レーモンド
高等学校・聖堂設計：竹腰健造
新小学校・第二体育館設計：
安井建築設計事務所
施工：竹中工務店

（1965年４月号）
（2007年２月号）
（2008年７月号）

玉田浩之

大手前大学メディア・芸術学部
准教授

所在地　兵庫県宝塚市塔の町3-113

■はじめに

「建築と社会」2008年７月号は小林聖心女子学院の創立85年を振り返る特集であった。それから10年余りが過ぎ、現在、創立100周年記念事業のひとつとして本館の改修計画が進められつつある。本稿では、小林聖心女子学院のキャンパス形成の歴史を振り返る。

■小林聖心の始まり

小林聖心女子学院は、聖心女子学院が開設した学校のひとつである。聖心女子学院は1800年にフランスで創立されたカトリック女子修道会「聖心会」を母体とし、1908年東京に聖心女子学院を創立した。続いて、1923年に神戸の住吉に住吉聖心女子学院を創立し、戦後になって札幌聖心女子学院、不二聖心女子学院（静岡）を開学している。

住吉聖心女子学院はドイツ人の別荘を借り受けて開学したが、生徒数が増えて手狭になってきたことからキャンパスの移転が計画された。学院は1925年に宝塚市小林に土地を取得し、校舎および修道院の建設を開始する。1926年４月に着工し、12月に建物が完成した。この時に校名を小林聖心女子学院と改称し、現在に至っている。

新しい学校の建設にあたって、小林聖心学院の創設に携わったドイツ人修道女のマザー・マイヤーは、大震災に耐える建物であることを第一に考えたという。1923年の関東大震災の教訓を生かそうと考えてのことだった[1]。設計を担当したチェコ出身のアメリカ人建築家アントニン・レーモンド（1888－1976）は、マザー・マイヤーの安全を最優先に考えたいという思いを受けて、鉄筋コンクリート造の校舎の設計に取りかかった。

■レーモンドのデザイン

よく知られているように、レーモンドは1919年の暮れに帝国ホテルの設計助手としてフランク・ロイド・ライトとともに来日し、1921年に独立して設計活動を展開していく。

レーモンドが関東大震災を経験したのは、帝国ホテルが完成する直前のことだった。帝国ホテルは鉄筋コンクリート造だったため、震災に耐えることができた。また、レーモンドの独立後初期の仕事である星商業学校（1922）や東京女子大学寄宿舎・厨房（1921－23）も構造は鉄筋コンクリート造を採用していたので、震災による被害はほとんど見られなかった。レーモンドにとって、震災という出来事は、鉄筋コンクリート造の技術の重要性を確認する機会となった。

一方、デザインの面ではライトの影響から逃れることができずにいた。レーモンドはライト調から脱するのに３年余を要したと回顧している。その頃に依頼を受けたのが東京の聖心女子学院であった。レーモンドは次にように当時を回想している。

「新しい施主は東京聖心学院（1924）である。その学校のデザインにはまだライトの影響が強く残っている。しかし適切な方位、騒音遮断、大型窓、その他現代の学校計画の特徴を持っていた。だが、神戸郊外の小林にある神戸聖心学院（1926）や岡山の清心女学校（1928）のデザインでは、ライトの影響は拭い去られ、東京聖心学院に比べれば、構造はさらに明確になり単純になった。」[2]

東京の聖心女子学院では、ライトのプレーリーハウスに見られる装飾や水平線を強調するスタイルが確認できるが、小林聖心の校舎では装飾が抑えられ、抽象的なボリュームの積み上げにより奥行き感が与えられている。正面は幾分単調さを感じさせるものの、隅部や庇に曲線を多用するなど、アール・デコやデ・ステイルを思わせるデザインがみられて興味深い。たとえば、窓庇はデ・ステイルの建築家J.J.P.アウトのフーク・ファン・ホラントの集合住宅（1924）の表現と類似している。レーモンドはライト調から逃れるために、当時の最新のデザインを参照していたようにもみえる。そのほか、玄関の庇の上に高窓を設けるなど、採光方法にも特色があり、本館の見どころのひとつになっている。



図１　小林聖心女子学院本館（2019年筆者撮影）



図２　竣工当時の様子（小林聖心女子学院所蔵）（『建築と社会』2008年７月号所収）

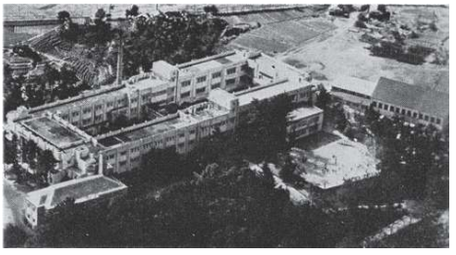


図３　上空より聖堂、本館、旧体育館を見る（小林聖心女子学院所蔵）



図４　本館のコーナー部分は円弧を描く。庇の上に採光用の窓が取り付く（小林聖心女子学院所蔵）



図５　曲線を描く窓庇（小林聖心女子学院所蔵）



図６　小林聖心女子学院聖堂（設計：株式会社双星社竹腰建築事務所、施工：竹中工務店）『建築と社会』1965年４月号所収



図７　小林聖心女子学院の新小学校と第二体育館（『建築と社会』2008年７月号所収）

平面は日の字型で、正面玄関の通路を中心軸とし、西側に教室、東側に宿舎や修道院が配される。学校と生活の空間を明確に区分していることがうかがえる。開口部は用途により大きさや分節の仕方が異なり、多様な表情を見せる。

■竹腰健造設計の経緯

戦後になって、現存しない旧体育館（1951）、小学校棟（1961）、高校棟（1961）、聖堂（1964）、第一体育館（1967）が建設された。これらを設計したのは竹腰健造（1888－1981）である。

竹腰は大学卒業後、英国留学を経て住友総本店の営繕課に勤務し、長谷部鋭吉とともに独立するも、その設計事務所が住友土地工務に吸収されて同社の専務となった人物である。終戦後は日本建設産業株式会社（現・住友商事、現・日建設計）の社長職にあったが、財閥解体を目的とする公職追放の命を受ける前に辞任し、1948年創設の双星社竹腰建築事務所に活動の場を移した。この頃に聖心会関係の仕事を受けることになった。

当時を知る所員によれば、聖心女子大学の設計打ち合わせは全て英語で行わなければならなかったため、設計者がなかなか決まらずにいたところ、その事情を聞きつけた連合国軍最高司令官のダグラス・マッカーサーが英国留学の経験をもつ竹腰を設計者に推薦したという[3]。また、聖心会のマザー・エリザベス・ブリットと出会って深い感銘を受けたことも、竹腰が聖心女子学院の建築に深く関わるきっかけになった[4]。竹腰は1949年に聖心女子大学の建築顧問となり、1950年代を通じて校舎群や聖堂の設計を次々と手がけていく。同じ頃、聖心女子学院中等科高等科（1956）の校舎も設計し、その後、小林聖心の高等学校校舎と聖堂を設計することになる。

1964年に完成した聖堂の鐘塔は学院のシンボルであると同時に、この地区のシンボルにもなっている。鐘塔が竣工した翌年には「塔の町」という地名に変更され、地域の人々に親しまれている。

■小学校・体育館の建設

2008年、新小学校棟と第二体育館が建設された。これらの建物は安井建築設計事務所が担当した。教室棟のファサードはレーモンド設計の本館のイメージを踏襲しており、本館との調和を強く意識したデザインになっている。建物の玄関と各階のホールの開口部は竹腰設計の聖堂の塔に向けられ、キャンパス内の建物の一体感を生み出している。

建設用地には、旧体育館、美術教室、調理教室、茶室もあったが、茶室を除いて全て取り壊された。茶室は武者小路千家の三代木津宗詮の設計であり、敷地内に作られた日本庭園のそばに移築保存されている。

調理室は1939年に本館の北側に増築されたもので、小学校の建設に伴い、解体された。その際、増築により覆われていた本館のスチールサッシが５箇所、健全な状態で残されていることが判明した。スチールサッシは竣工当初の意匠を伝えるものとして重要であることから、現況調査が行われ、大切に保存されることになった[5]。

現在、本館の窓のほとんどがアルミサッシに取り替えられている。レーモンドがデザインしたサッシは窓枠が繊細で美しいが、アルミの窓枠は太くなりがちで、当初の意匠とは異なる印象を与えている。窓枠製造の技術が進歩すれば、オリジナルの意匠に戻すことも容易になるかもしれない。その時を待ちたい。

■おわりに

阪急小林駅を降りて、緩やかな坂道を登っていくと現れる美しいキャンパス。静かな森の中の建物群はいまも凛とした佇まいをみせる。ここを訪れる人は、学院創立から建物群が大切に使用されてきたこと、そして、時を経て、素晴らしい環境が育まれてきたことを感じるだろう。これからも良い状態で継承が進み、地域のシンボルとして愛され続けることを願わずにはいられない。

現在、学院は創立100周年に向けて、さらにキャンパス内の環境の整備に取り組もうとしている。かつて修道院として利用されていた空間は現在使用されておらず、新たな利用方法が模索されている。修道院という生活の場を別の機能にどのようにして転換していくのだろうか。キャンパス内の歴史的・文化的な価値の継承を意識した改修計画がさらに推し進められることを期待したい。

註

［1］宇野三恵子「小林聖心女子学院～伝統と新しさが出合う教育の創造を～」『建築と社会』2007年２月号p.28

［2］『自伝アントニン・レーモンド』鹿島出版会1970年p.98

［3］志保井正夫・石田潤一郎「対談・竹腰健造　建築士という職業に高い誇りを持っていた人」『素顔の建築家たち２』建築資料研究社2001年p.106

［4］竹腰健造『幽泉自叙』創元社1980年pp.251-254

［5］2008年１月、兵庫県ヘリテージマネージャーの山崎誠、橋本健治、田中栄治によって調査された。大阪市中央公会堂の保存再生の手法を参考に保存方法が検討された。

謝辞：本稿執筆に際して、小林聖心女子学院職員の皆様より取材協力をいただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

連載

建築と社会を考える

NO.45

「使う」がつなぐ建築と社会

～解体と再編の時代に～

東京電機大学未来科学部建築学科
教授

山田あすか

東京都立大学工学研究科建築学専攻博士課程修了、学位取得。日本学術振興会特別研究員DC1/PD、立命館大学理工学部建築都市デザイン学科講師、東京電機大学未来科学部建築学科准教授を経て現職。日本建築学会賞受賞（2018年）。主な著書に『ひとは、なぜ、そこにいるのかー「固有の居場所」の環境行動学』、『テキスト建築計画』等。

■はじめに

建築とは、ときに社会システムそのものである。建築学がその研究や実践の対象としてきた「各種施設」は、具現化された社会制度として、全国の公共サービスの水準を担保する役割を長く担ってきた。今日、地方自治や住民主体が重視される流れの中で、また急速な少子高齢化と人口減少を含む社会の変化のスピードが増すに伴い、「施設」の枠組みそのものの再編や各地での独自化も起きている。

【建築と社会】を考える時、そこでいう社会とは地域社会から国土国家まで、複層のスケールをもつ。いま、公共のあり様がコミュニティやコモンに降り（公（パブリック）の共（コモン）化）、逆に閉じていた私（プライベート）が開かれて地域の共（コモン）の役割を担う例も増えている。コミュニティ、パブリック、地域（公共）施設のあり方の変容とこれからのあり様を、「施設から事業拠点へ」「つくるから使うへ」「血縁・地縁から利用縁へ」の3つの変化に着目して、整理する。

■1 施設から事業と事業拠点へ

1）“建物・機能パッケージ”の解体

この数十年の地域施設、特に福祉系生活施設の計画は、ノーマライゼーションや個の尊重の価値観からの脱一斉処遇／大舎制、脱コロニー（隔離）、「施設」の住まい化・地域化の流れにあったと説明できる。介護保険、全室個室・ユニット型の新型特養、民家等の既存建物を改修したグループホームや宅老所、小規模多機能居宅介護（**写真1**）、障害者自立支援法の制定も、これらと歩を一にしている。少子化や人口減少／人口偏在による学校や公共住宅等の空き家・空きビルはストックの利活用の機運の高まりも背景に、「建築と機能のパッケージ（≒施設）の解体」という概念も次第に共有されるようになった。

2）小規模化と地域資源の活用によるまちと福祉の融合

例えば小規模多機能は、“施設の居室の役割を住み慣れた家が、施設の廊下の役割を地域の道路が担う”と説明される。障碍者の生活環境や小規模保育拠点[A]なども、同様に生活が重視されると共に地域資源を利活用した小規模事業所が地域に増える向きは、地域の中での福祉拠点性の回復と捉えられる。旧来の、「施設」に囲い込む福祉事業から地域資源のネットワーク的利用の拠点型福祉への移行は、多様な人々が地域で暮らすという当たり前を、改めて可視化する契機となっている。

そして、これらの地域密着・小規模拠点型の保育、高齢者福祉、障がい者福祉事業の拠点の開設は、新設のみならず多くの場合既存建物の利活用による。地域に多様な規模や築年数、構造の建物があること（これらの要素は、家賃とも関わる）が、地域での福祉を含む各種事業の展開可能性に直結している。既存の建物を「使う」事業拠点展開は、地域的ニーズの量や分布の変動のなかで、土地取得から始まる新築よりも比較的早く・安価に対応できることに利点がある。各種施設は、社会基盤として不動に存在する前提が無言のうちに共有されていたのではないか。一方で、「社会」はそれら「施設」やその「建築」の想定を超えて流動性が高くまたその変化が速いことが認識されるに至り、小規模・地域密着の事業としての生々流転は必定となりつつある、と言える。

なお、既存建物の利活用や転用が当たり前であるヨーロッパ諸国での近年の例では、病院もその用途を終えた、または入院日数のさらなる削減などで必要な面積が縮小された時





写真1　小規模多機能居宅介護事業所ガーデンハウス西賀茂（現在は移転）。空き家となった日本家屋を活用して運営されていた。室内の品物は、暮らしの雰囲気を活かすためあえて残された。

の転用可能性が考慮されている（**写真２**に例示）[B]。転用前提の病院施設整備のため、病棟部門と中央診療部門を別の機能として独立的に捉え、病棟部門は順次縮小できるようにゾーニングし独立動線を付置、中央診療部門は当面縮小しないが機器類の更新が比較的短時間で起こる前提でつくられている。これもまたある種「機能の解体」によって説明できる[C]。そして、病院としての役割を終えた建物やその部分は、住宅や商業空間として、まちに還元されるように計画されている。

３）解体と再編の時代に

「施設」の解体[D]、事業主導化[E]に伴ってその実施の場としての地域の資源が見いだされ、高度経済成長期に「施設に隔離」されてきた支援／制度と日常の生活が再び近づいている。これは、「大きな物語[F]」から「小さな物語」へのコンテクストの変化（J.F.リオタール）とも関連して理解できる。基盤が整った結果、個々の「社会」は固有性と身体性を取り戻す。個の尊重や地域性の維持が重視されつつ、個別の散発的事業に普遍性が見いだされれば相互参照性によって新しい制度に結実し、その連環もまた社会の変化と共にある。

施設が事業と建築に別れ、しばしば、建物と複数事業によって成立していた「施設」の解体も進んだ[G]。これによって、事業や複数事業の組み合わせの展開速度も、事業と建築、複数事業の組み合わせや連携の可能性も増していく。解体された事業、あるいは事業の複合化連携によって、新たな価値や利便性、課題解決を得ている場合もある。例えば複合型高齢者施設、クリニックモール、小規模多機能[H]、認定こども園[I]、共生型サービス[J]、中高一貫校、認知症カフェをもつ特養、クリニック付き有料老人ホーム、小規模多機能をもつサービス付き高齢者向け住宅、保育機能をもつ病院やオフィス、学童保育と就学前保育、など、枚挙にいとまがない。また、もともとあった機能をネットワークに載せて、統合的機能を持つ事例もある。例えば、集落の空き家を宿泊室として地域資源と連携する分散型ホテル（**写真３**）、集合住宅の改修による分散型サービス付き高齢者向け住宅、郊外の戸建て住宅地の空き家を活用する見なしサービス付き高齢者向け住宅、などである。

施設の解体と事業／機能の再編（統合・複合）は各地域の実情や利用者のニーズ、事業者のビジネスプランに呼応して、同時に起こる。これらの変化は総じて、「機能＋そのための建築」パッケージである施設の【整備】から、事業とそれを行える場所の【利用】へ、そして建築と事業、複数事業の組み合わせによる再編、と理解できる。この先には、複数の事業で相乗りして利用する場所・設備、公共施設の時間／空間的部分利用による事業、などの拡大・展開が有り得る。

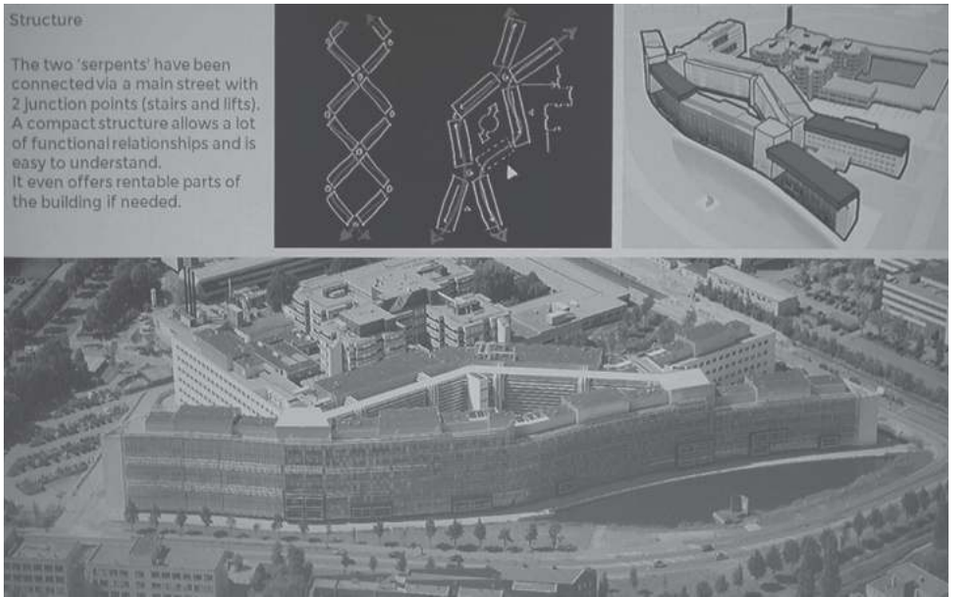


写真２　SEEDS ARCHITECT, Martini Hospital Groningen（オランダ）
Mr. Arnold Burger（SEED Architects）提供資料より。病棟端部から段階的に別用途に転用できる，必要に応じて増築できる，などの多様な変化への対応が企図された計画

■２つくるから使うへ

１）利用による事業、利用者の集まりが事業に

既に、NPO活動など「事業」に対して助成や委託があり、活動場所は団体がそれぞれに状況に応じて確保することは一般的となっている。今後、自前の設備を持たずとも地域資源の利用によるサービスの展開（例えば入浴・介助サービス）が可能となるだろうか。「訪問」と「通所」という区分も不要かもしれない。通所支援が担うある程度の介護の効率的提供や利用者相互の交流のためには、そこに「利用者＝ケアを必要とする人が集まり」「ケアを提供するための場所や設備があること」が重要なのであって、そこが「デイサービスセンター（通所施設）である」必要はない。そして、人が集まることそれ自体がポテンシャルであり、個人宅への訪問よりもケア提供側の効率性は高い。例えばご近所のAさんの家でも、自治会館でも、商店のイートインスペースにでも集まって、そこにケアスタッフがやって来る[K]。そのように、ケアの前提となる場所は施設から事業者提供型の（固定の）拠点や利用者宅へとの拡がりに加えて、人の集まる場所というよりテンポラリで利用者群主導型の拠点が加わっていくだろう。

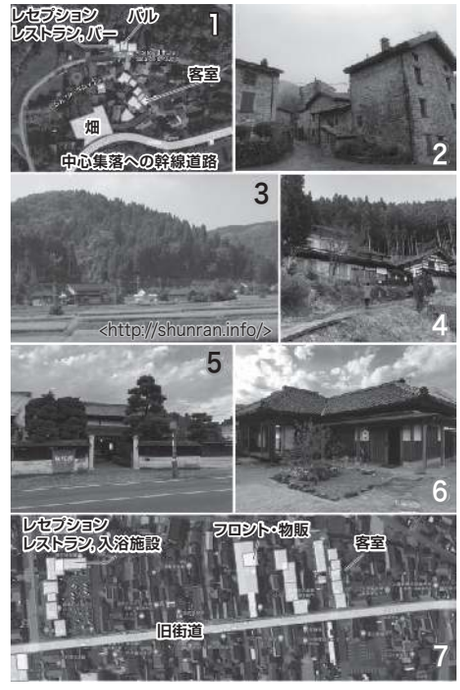


写真３　分散型宿泊の事例
1、2：北イタリアのアルベルゴ・ディフーゾ『Casa delle Favore』　3、4：空き家が増えた農村集落での宿泊事業『春蘭の里』　5、6：古い宿場町商店街の商家を改修したホテル『飯塚邸』
7：古い宿場町商店街の蔵や商家を改修した、日本初のアルベルゴ・ディフーゾ認定事例『矢掛屋』

2）「使う」の相乗り：基盤としてのシェア性

人、物、動線が集まることは大きなポテンシャルである。地方部での総合病院の交通ハブ化や門前町の形成、外来者の利用によって地域の拠点の維持を図る道の駅の「小さな拠点」化などをその実例に挙げられる。事業はお互いに利用を相乗り＝場所や機会や集客力をシェアして、リスクを分散し、ニーズを調整し、安定化を図る。または、同じ持ち出しでより質の高い設備や場所を使える。これはシェアハウス、コワーキングスペース、AirbnbやUberなどの各種シェアリングエコノミー全般に当てはまる。そして、地域施設がもつ公共性の基盤は、広く薄く、人々がその建物や機能を、時間や空間の軸でシェアすることそのものであると気付く。

3）シェアの可能性を増す：混在という価値

さまざまな「使う」が相乗りする環境には、多様な要素、例えば事業や利用者の属性が存在する。シェアする要素や属性が多様であるほど、新たな展開が期待できる。それは、ある部分で施設を施設たらしめてきた「立地≒利用者の居住地・勤務地（最近隣選択、地縁）」や「属性別整備」「明確な用途」からの脱却を意味する。例えば、著名な先進的事例である三草二木西圓寺やシェア金沢では、多様な人々による細かい編み目のような支え合いの仕組みをつくるためには“ごちゃまぜ”であることが必要だとしている（**写真４**）。

例えば、縮退の中での“こども施設”の再編と圏域を例とすると、従来の異種機能はまず利用者の属性の類似性によって融合し（保育所と幼稚園の統合）、さらに、利用者の属性を超え、例えば高齢者やこども、障碍者など支援が必要である（サポート資源を共有できる）ことによる機能統合が起こる。共生型ケアの拠点がこれにあたる。さらに、福祉の用途かどうかも問わない、そこが地域の拠点性＝人が集まるというポテンシャルをもった、地域の互助・共助の拠点としての「地域施設」に再統合されていく。統合的拠点には、当然の帰結として利用者や目的の混在が起こる。

十分に多様な人々、多様な価値観、多様なニーズによって構築される環境では、同じ場所に居る人々の目的や様態はそれぞれ異なる。これまでの変化を、寄宿舎食堂で同じ料理を一斉に食べていた状態からレストランで各自好きな料理を注文するようになった、と例える。すると、これからのさらなる変化は、フードコートで各自が食べたい物を好きな店で、予算や腹具合に応じて選んで調達し、あるいは運んでもらって、テーブルを共にする状況に例えられる。テーブルを共にする人々のうち、ある人には介助は不要で、ある人には食事介助が必要でその支援者が居る、またある人は移動にだけ補助が欲しいので同じ方向に移動する人に介助を依頼してここに集まった（シェアリング・ウェルフェア）、という状況であるかもしれない。

4）混在による「偶然の出会い性」：場の価値

生活や娯楽の多くがオンライン化した時代に、「あえて」物理的な場に出かける理由のひとつに、これまでの経験や価値観による検索・推薦の枠を超えた偶然の出会い性が挙げられる。思いがけない出会いや経験という、個々人の既存の枠組みを超越するものやことが価値をもつ。また、建築計画やサイン計画が従来重視してきた「わかりやすさ」の対岸にある「わかりにくさ、複雑さ、迷いがあること」もまた、既存の枠組の超越を生じうる。例えば書店と雑貨店がミックスされた商業様態などが典型的な例である。そこには混在と出会いによる新鮮さがあり、欲しいと思えるものが見つかる場が演出される。「機能別」につくられてきた施設にはない価値といえる。

■３「使う」がつくる「利用縁」

公助が縮小し、自助の限界が自明であるなかで、地縁や血縁を超えた人々の互助・共助の関係性の再構築や、その重要性の再認識が重要だという価値観が共有されつつある。これからの互助・共助の共同体＝コミュニティの姿として、筆者は場所や機能／サービスを媒介とし、それらの利用という共通項によって生み出される関係性を「利用縁」と呼ぶ。利用縁によって生じるネットワーク的関係性は「利用縁コミュニティ」と呼べる。

利用縁コミュニティは、参加と離脱、そのタイミングは自由で、参加の度合いも人それぞれ異なる。コミュニティのメンバーは興味関心や必要な支援、お気に入りの場所などの共通項によってゆるやかに関係する[L]。人々は多くの利用縁コミュニティに属し、それらを状況に応じて使い分け、生活の変化とともに移り変わっていく。自由で選択的で、個々人の自己決定の集積がゆるやかに形作る流動性の高いコミュニティである。「自己選択的であること」を前提に「互助」が期待される共生社会において、利用縁コミュニティの拠点は「互助」の歯車の軸となる。そのためにも、偶然の可能性に満ちた、多様な機能や利用者が混在し、多様な人々の偶然の出会いのなか



写真4　社会福祉法人佛子園　山草二木西圓寺

廃寺を転用・改修した地域の拠点。高齢者デイサービス，障がい者の生活介護，障がい者の就労支援事業所でもあるコミュニティレストラン，物販，入浴施設，フィットネスの機能をもつ。学童や子連れ家族，ビジネス，観光，自治など複合的使われ方をしている。

でお互いの繋がりが自然に形成されていく拠点の役割は大きい。

■４利用縁を拡げる

１）ただそこに「居る」ことから始まる

利用縁が形成され、また形成が促進される条件として、「利用」を生じさせる「シェア性」と、利用の拡がりに寄与する「混在性」に加えて、そこが選択的に使われるために最も大切なのはまずはただそこに「居」られること、である。

滞在型図書館の隆盛にみられるように、居心地よい居場所があることは、その空間を生活の一部に昇華させる。そこが多様な人々の多様な滞在の場所となることで、偶然の出会い性も増す。先ほどのフードコートの例えに重ねれば、ここで食べようと思える場所がサービス提供の土台である。まずはただ多様な滞在が可能で、そのきっかけがあり、利用するサービスによってカスタマイズ可能な場所、といったコンセプトは現代的なニーズに即した「物理的な場所」の一つの趨勢であろう。

２）オープンであること

事業や場所が利用者属性や機会等に対して開かれていることは、利用者の拡大や事業の安定性に繋がる。例えば先出の山草二木西圓寺にも影響を受けた、オフィスを地域に開いたJOCA（青年海外協力協会）大阪では、スタッフがノートパソコンで仕事をする同じ空間に（時にはスタッフが場所を譲って）お年寄りやこどもなどを含む多様な地域の人々が訪れ、めいめいがマイカップで飲み物を煎れてただ居ることや集まることを楽しむ。公共（パブリック）施設ではないが、開かれた私（プライベート）という共（コモン）の姿である。

３）異なること＝特徴があること

従来の地域公共施設では最近隣選択を前提に、同スペックで「平等に」整備されてきた。しかし、先述したような小さな物語の元での地域性、また選択的利用の呼び込みの観点からは、それぞれの場所がもつ「選ばれる要素」は利用者の共通項とも関連し、利用縁の形成においてはむしろ差異は有利にはたらく。

４）生活における蓋然性をもつこと

生活の外部化は人の生活は様々な場における時間や経験の総体として捉えられ、住まい（生活の中心的拠点）とそれ以外の場所（生活の部分／生活への支援の拠点）、住まうを支える事業の対象範囲、はすでに不可分である。

利用を拡げる、そして安定させるためには、そこが日常生活に埋め込まれていることが有効である。シェアハウスやコレクティブハウス、住み開き、一時的な「住」としての宿泊滞在施設、コミュニティレストラン、カフェ、こども食堂、ランドリーカフェ、これらは衣食住＝生活を共有する場、「ライフコモンズ」による利用縁コミュニティの起点となる。

■まとめ

今日、【建築と社会】の関係において社会基盤となる施設の解体（事業化）と再編（複合化や融合）を、「施設から事業拠点へ」「つくるから使うへ」「血縁・地縁から利用縁へ」の３つの“変化”の視点でまとめた。

社会はより身近に小さい物語として認識され（あるいはそのような認識を含む複層性を得て）、「地域」はより広域を意味し、公／民の別を問わず、人々が集まる場はある種の公共性を有し、事業拠点としてのポテンシャルをもつ。「施設」から自由になった事業は複数の事業での利用の相乗りなどの可能性を拡げる。ときに社会システムそのものである建築の有り様、また各種施設の有り様の変化に見る【建築と社会】の関係には、社会の基盤としての施設建築から、建築を「使う」ことによって社会がつながれていく様相への変化を見いだすことができる。

（やまだ　あすか）

参考文献

1．井上英晴、賀戸一郎：宅老所「よりあい」の挑戦－住みなれた街のもうひとつの家（OP叢書）、ミネルヴァ書房、1997.07
2．下村恵美子、谷川俊太郎：九八歳の妊娠－宅老所よりあい物語、雲母書房、2001.11
3．外山義：自宅でない在宅－高齢者の生活空間論、医学書院、2003.07
4．西野達也、石井敏、小菅瑠香：多摩ニュータウンの廃校となった小学校を活用した地域福祉施設の提案【最優秀賞】、日本医療福祉建築協会主催デザインシャレット、2001.11
5．日本医療福祉建築協会：小規模多機能サービス拠点の計画　－目指すべき方向性と考え方、2006.09
6．井上由起子：いえとまちのなかで老い衰える―これからの高齢者居住そのシステムと器のかたち、中央法規、2006.05
7．山田あすか：東京都内の種別が異なる小規模保育拠点における都市環境の利用・評価に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第81巻第723号、pp.1069-1078、2016.05
8．三輪律江、尾木まり、稲垣景子：まち保育のススメーおさんぽ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくり、萌文社、2017.05
9．森一彦、加藤悠介、松原茂樹、他：福祉転用による建築・地域のリノベーション－成功事例で読み解く企画・設計・運営、学芸出版社、2018.03
10. 日本医療福祉建築協会、海外医療福祉建築研修2017報告書、2010.03
11. 山田あすか：人口縮減社会における「こども施設」の機能と圏域の再編、日本建築学会 第34回地域施設計画研究シンポジウム　パネルディスカッション：人口縮減社会のおける地域公共施設の課題「地域公共施設の圏域をどう変えるか」、pp.17-20、2016.07.21

A　（旧）東京都認証保育所、横浜市保育ルーム、認可外保育所等。近年では地域資源を活用する学童保育の拠点や福祉のまちづくり学会での活動、「まち保育」の概念の提唱など、保育をきっかけとしたまちづくりについても関心が集まっている。

B　我が国における一般的な認識では、機能に特化した建築物のなかでも、病院は最もその特性を考慮されるべきだとの認識は共有されていると考えられ、その差は大きい。

C　日本では入院期間がOECD各国の数値に対して突出して高い。近年、各国の制度では慢性期医療と急性期医療を完全に分離し、慢性期医療の場を病院から外に出す（Special nursing home、Patient hotel、帰宅後の訪問看護・診療・通院など）ことが徹底されてきた。

D　「既存の大規模施設の（改築等を契機とした、小規模施設ないし事業拠点への）解体」という意味に限らず、そもそも新規開設しようとしたときに大規模にはつくれないように（社会的に）誘導されている状況を含む。例えば病院、特別養護老人ホーム、障碍者施設、保育所等の医療・福祉施設全般における傾向として理解される。

E　施設整備に拠らず、事業オリエンテッドで拠点が形成されるようになること。

F　ジャン＝フランソワ・リオタール（Jean-François Lyotard）が『ポストモダンの条件（1979）』において提唱した概念。近代の理念である進歩思想のもとに、社会に広く共有される物語（大きな物語、普遍的な思想）によって運営される社会で人間の幸福を実現する枠組みの限界、その根幹となる理念の自明性や信頼性の喪失を指摘し、そうした時代性を「ポストモダン」と表現した。

G　例えば多くの特別養護老人ホームは入所型サービス＋通所型サービス（デイサービス）＋ショートステイ＋介護相談、の要素を有する。これらの要素が一旦解体され、グループホームやサテライト・ユニット、ショートステイの専門施設、単独デイサービスや小規模多機能など、それぞれ異なる事業所が立ち現れている、と理解できる。あるいは、病院は入院人数の削減のために少数の病院と、多数のクリニックに解体される方向にある。

H　通所（デイサービス）、宿泊（ショートステイ）、訪問介護の機能を持つ。

I　保育所、幼稚園機能、子育て支援の機能を持つ。

J　特に過疎地域で、地域の拠点性の維持と福祉事業の継続可能性を高めるため、福祉ニーズの相乗りを可能とする。介護保険または障害者福祉のいずれかの指定を受けた事業所がもう一方の制度での指定を受けやすくなる 。

K　愛知県の南医療生活協同組合では、３人以上の組合員でつくる「班会」への支援として、例えば健康チェックなどの催しを申請すれば医療施設の職員を講師として派遣する、などの取り組みがある。

L　例えば、なんとなく顔見知りのカフェの常連、朝夕の送迎時にすれ違う程度の保育所の保護者同士、図書館の勉強スペースを利用する顔見知り、施設のボランティアメンバー、子育て支援の互助アプリの利用などの程度の関係から、サークルやサロンなど共通の趣味や目的で集まる人々も居る。

U-35

U -35委員会企画 7th action
「建築と水辺」活動報告
2020年11月3日(火) 9：00～
会場：中之島公園



今、街を楽しむということ

企画趣旨

COVID-19の感染拡大を発端とした先行きが不透明な全世界。
日本においても2020 TOKYOオリンピックの延期をはじめとしてインバウンド需要の激減などの混乱が続いており先行きが不透明な状況が続いています。
「外出自粛」・「３密を避ける」・「新しい生活様式」など、国から国民の生活に沢山の制約が課されたことで、改めて“同じ時を同じ場所で過ごすことの大切さ”が浮かび上がってきたのではないでしょうか。
そんななか、注目を浴びているのが「街＝外(そと)」の空間。
新鮮な外気が十分に得られることや、他者との物理的な距離を確保しやすい等、正しく活用された「外（そと)」の空間は非常に魅力的な場所だと認識されつつあります。
大阪の都市空間の魅力として、国内外の人々に絶大な人気を誇っている大阪の水辺空間で、「安全・安心」に「水都 大阪／魅力の再発見」と「With/After COVID-19時代／場の共有」ができる仕組みを、提案しました。

当日の流れ

9：00　集合・設営
10：00　イベント開始
13：00　イベントタイム①
　　剣先ランウェイ
14：00　イベントタイム②
　　波紋迷路
15：00　イベントタイム③
　　フラフープタイム
15：00　イベントタイム④
　　チェーン the バルーン
17：00　撤収・解散

●7th actionに至る経緯

前回の2018年度にU-35が企画したactionは「建築とOSAKA」～“愛される”OSAKAの未来というテーマで「6th action」を開催いたしました。

2025年の万博開催が決定し、期待感が膨らむ大阪で、未来の大阪を探るため、外国人観光客の方々に「OSAKAの印象に残った写真を見せてください」と街頭インタビューを行い、世界の目から見たOSAKAの魅力を探るという企画でした。フィールドワークで得た外国人観光客の視点をヒントに、新しい大阪の魅力を発見し、「“愛される”OSAKAの未来」について、多様な立場の人を参加者として迎え、様々なアイデアを生み出す“フューチャーセッション”を行い、大阪の未来について語り合いました。

そこで得られた知見では、大阪の中には、いわゆる観光地的スポット／生活と商業主義が混然一体となった猥雑な情景／整然とした景観／日本的な美しさなど様々な質が点在しており、外国人にも「写真を撮りたい」と思わせる魅力を沢山有している事が分かりました。特に興味深かったのは、ほぼ全ての写真に水景や自然が存在しており、その背景に特色ある都市が立ち並んでいるという点でした。必ずしも有名な観光スポットだけに目を向けているわけではなく、自然（緑や水景）と都市（建築）が融合しているシーンにレンズを向けており、これこそがOSAKAにしかない都市空間の質を支えているのではないかと、改めて気付かされたのです。

●水都大阪の魅力を再発見する

そういった外国人目線による気付きから、改めて日本人である我々も水都大阪の魅力を再発見することが大切ではないかとメンバーで話し合いました。よく水都大阪と謳われますが、街中に張り巡らされた水景は市域を繋ぐのみならず、誘目性という見えない効果によりOSAKAにしかない魅力を支えています。この、「水都OSAKA／魅力の再発見」を通して、水都大阪を未来に受け継いで行くきっかけになるようなイベントが「7th action」では実現できないかと考えはじめたのです。

●COVID-19による開催延期の決断

そんな話をしていたのが2019年の年末でした。例年であれば年度末にactionを行うので準備に取り掛かる時期だったのですが、いざ議論が深まりだした2020年の初め、突如としてCOVID-19の感染が広がり、世界全体の先行きが不透明になってきたのです。日本においても2020 TOKYOオリンピックの延期を

リーダー：髙畑貴良志　**副リーダー**：出来佑也

はじめとしてインバウンド需要の激減や、イベントの中止が相次ぎやむなく「7th action」も延期することになりました。

●延期→緊急事態宣言

延期を決定した直後に緊急事態宣言が発令され、メンバーの生活も大きく変化しました。それまでそれぞれの会社に出社することが当たり前だったメンバーも、それぞれの形でリモートワークに移行。月に１回程度行われていた我々の活動もそれまでは一カ所に集まり開催していた会議から、リモート会議での開催に移行していきました。

始めはぎこちないリモート会議もやってみれば意外とスムーズ。場所にとらわれないので出席率も高まるといったメリットもありました。（もちろん、いつも熱い議論を繰り広げていたメンバーからすると、リモート会議では相手の顔色・声色など、細かな変化に気が付きにくいリモート会議は少しやりにくいといったデメリットもありました。）

●制約をポジティブにとらえる

緊急事態宣言も終わり、感染拡大が一旦落ち着くとメンバー同士での議論が盛んになりました。「確かにCOVID-19は間違いなくネガティブな側面が多い」「しかし歴史を振り返ってみても建築や社会のあり方はこうした社会情勢と密接に関係し、絶えず柔軟に変容してきたのではないか？」「まさに今の状況は、建築と都市を大きく変えることの出来る、ポジティブなチャンスと捉えるべきではないか？」などとメンバーで議論していました。

また自粛中に、皆の生活に沢山の制約が課されたことで「これまで当たり前と思っていたことが当たり前でなくなり、同じ時を同じ場所で過ごすことの大切さが浮かび上がったのではないか？」などという意見も出てきたのです。

この新しい時代に「安心・安全」に場の共有ができる仕組み作りを行ってはどうかとメンバーで議論し始めたのです。

●注目を浴びる「街＝外（そと）」

そんななか、自然と注目を浴びているのが「街＝外（そと）」の空間でした。新鮮な外気が十分に得られることや、他者との物理的な距離を確保しやすい等、正しく活用された「外（そと）」の空間は非常に魅力的な場所だと考えたのです。

●真価を問われる大阪の水辺空間

先にも述べたように、大阪の都市空間の魅力として、国内外の人々に絶大な人気を誇っていたのが大阪の水辺空間でした。本年の我々の「action」はこれまでの活動で改めて魅力に気付かされた大阪の水辺空間で、「安全・安心」に人々が「水都OSAKA／魅力の再発見」と「With/After COVID-19時代／場の共有」できる仕組みを、提案することに意義があるのではないかと考えたのです。

●「With/After COVID-19時代／場の共有」を促す場

舞台は「水都大阪」の中心地の中之島公園。「With/After COVID-19時代／場の共有」を促す場として４つの場所を設定しました。これらの４つの場所を通して、新しい時代に即した街の楽しみ方を提案しました。

①剣先噴水「水辺カーペット」
②難波橋「波打つ広場」
③中央公会堂南東側川沿いデッキ「フープディスタンス」
④ばら園水際「バルーンディスタンス」

詳細は次頁以降で述べますが、当日は各班毎にイベントタイムを設け、通りかかった人々と共に街を楽しむイベントも行いました。

●「水都OSAKA／魅力の再発見」の視点場

また、当日は大阪の水辺空間を歩き回って魅力を発見してもらうための仕掛けも設置しました。視点場にはタグをつけてQRコードで我々U-35委員会の若手建築設計者の目線で見た水都のお薦め情報を発信。これらのビューポイントから街を眺めることで、利用者が新しい魅力を発見する仕掛けも準備しました。

●「今、街を楽しむということ」

当日の活動を通して誰もが積極的に「街を楽しむこと」に対する気付きが得られたのではないかと思います。本記事をご覧になった方にとっても「今、街を楽しむ」ためのきっかけとなれば嬉しく思います。（文責：髙畑）



「With/After COVID-19時代／場の共有」を促す４つの場


視点場に設置したQR コード

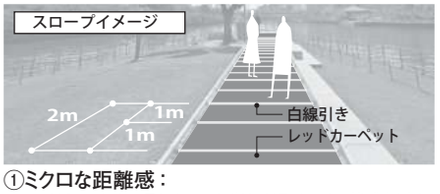
Member's Forum

会員投稿の頁

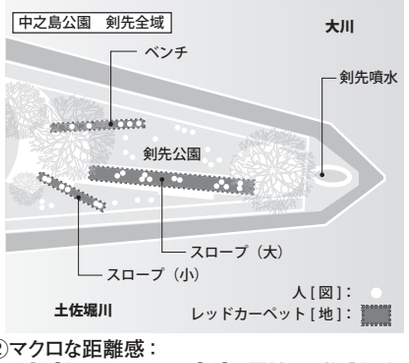
①剣先噴水［水辺カーペット］

●概要

開放的な都市空間である剣先に景観のアイキャッチとなるレッドカーペットを敷きました。剣先を特徴付ける３本の軸線（スロープ、ベンチ）は普段から多くの人々が訪れますが、そこに赤の絨毯を敷くことで普段とは異なる場を形成し剣先で感じる親水性や開放感といった都市の魅力を再発見出来るインスタレーションを考えました。また剣先のような開放性の高い都市空間では、対岸や橋等多様な視点で人々の距離感を認知することが可能です。レッドカーペットを活用し①②の仕掛をすることで、それを顕在化しました。そして多くの人々が各々に距離感を保ちながらレッドカーペットに滞在し、剣先でくつろげる居場所をつくるきっかけとなれば良いと考えました。



①ミクロな距離感：
レッドカーペットに示した１mのグリッドラインで距離感を測る。



②マクロな距離感：
人［図］とレッドカーペット［地］の関係で距離感を測る。

●当日の様子

「（橋下でレッドカーペットを目にして）えっ、何これ！」、「（物珍しそうに）レッドカーペットを歩くことはなかなかないからね」といったリアクションと共に、アイキャッチにつられて多くの人々が剣先を訪れました。ただレッドカーペットを歩くことに関しては遠慮する人が多く、戸惑いながら歩く様子が印象的でした。くつろぎの場所というよりレッドカーペット本来の非日常的な捉え方をする人が多く立ち入り難くなってしまったのは想定外でした。非日常性を求める好奇心のある人はスロープの先で記念撮影をしたり景色を満喫したりとその場を楽しむ様子が見受けられました。



レッドカーペットが敷かれたスロープ（大）を先端に向かって歩く様子



レッドカーペットが敷かれたベンチの木陰でくつろぐ人々の様子



イベントタイム「剣先ランウェイ」でスロープ（小）を駆け上がる様子

一方、日常的に剣先に訪れている“常連さん”も多く訪れました。それらの人はレッドカーペットの有無に関わらず、ベンチに腰掛け食事をする人やスロープの傍らに座って景色を眺める人、散歩をする人等、多様な目的があり他者との距離感を気にせず普段通り過ごしている様子が見受けられました。

イベントタイムはスロープをランウェイに見立て、モデルとなった参加者が景色を楽しみながらスロープを歩く企画を考えました。周囲の注目のためか参加者は多くありませんでしが、ご参加くださった方は胸を張って歩き先端でポーズを決め、剣先の開放的な景色を享受している姿が印象的でした。

●考察

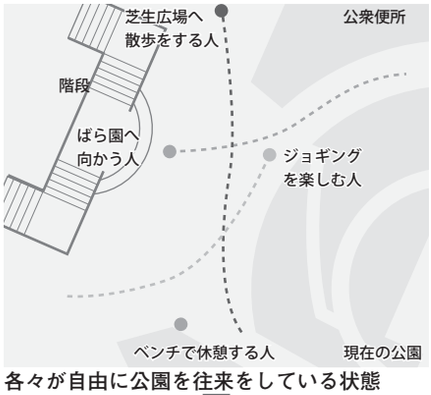
普段から多くの人々が集まり魅力的な空間である剣先では、インスタレーションを仕掛けることで非日常性を求める人と日常性を求める人が共存する結果となりました。前者は普段の情景との差異を楽しみ、公園の使い方に変化が現れました。後者は刻々と変化する公園風景を楽しみ、普段通りの公園の使い方をしていました。不特定多数の人が利用する公園は日々様相を変え人々を楽しませます。水辺カーペットは日常の空間に非日常性を加えることで多くの人々が場を共有し水辺の魅力を共感しました。それらの体験が履歴となり、今後剣先を訪れるきっかけになればよいと思います。

（文責：平岡）

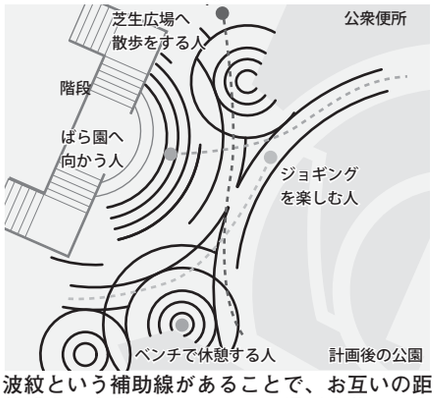
②難波橋［波打つ広場］

●概要

この場所は東の芝生広場へ向かって散歩をする人、ジョギングに勤しむ人などの様々な人の往来がある場所です。そうしたポテンシャルを持った、この広場に「波紋」模様を描き、人の流れや動き、各々の距離感（ソーシャルディスタンス）を実感し、考察するきっかけを作りました。波紋を跨いだり、波紋に沿って歩いたりすることで周りの人との距離感を感じ、例えば同じ波紋の中にいる人と偶発的な「場の共有」を感じることもできます。また、波紋大階段の円弧やカーブを描いたプランターなど公園の特徴を強調するように引くことで、中之島公園の魅力の再発見に繋がればと考えました。



各々が自由に公園を往来をしている状態



波紋という補助線があることで、お互いの距離感を顕在化しつつ、一つの場所を他の人と共有していることに気付くことができる。

●当日の様子

「広場の真ん中に線で波紋を描く」という単純な操作を、道行く人がどのように捉えてくれるか不安な部分も多くありました。当日は線を気にして踏むのを躊躇したり、線に沿ってランニングをしたり、何か波紋と連動した人々の活動を期待していました。しかし、結果的に目にしたのは波紋が驚くほど広場に溶け込んだ風景でした。あたかも元々広場にあった模様だったかのように、多くの人が波紋模様を気にせず通行し、目線の低い子どもたちはいつもと違う景色を気にしている様子でした。一方で、近くに設置していた看板には多くの方に集まってもらえ、中之島公園ができた当時の話や自身のおすすめポイントなど様々な話を伺うことができました。

イベントタイムには波紋の線を利用し、巨大迷路を行いました。この時間まで波紋を気にする人がなかなか現れない中、果たしてイベントとして認知してもらえるのか心配でしたが、目印として「START・GOAL」のパネルを掲げた瞬間、「迷路だ!」と反応する人が急に多くなり、イベントスタート時から長蛇の列ができるほどの人気になりました。迷路を楽しむ子どもたちと公園を通行する人々が入り混じった風景は印象的でした。



公園を通行する人と迷路を楽しむ子どもたちが入り交じった空間



多くの方が足を止めて看板の説明を読んでくださいました



イベントタイムでは多くの子どもたちが参加

●考察

結果的に４会場の中で一番日常に溶け込むことができたインスタレーションになったと思います。気付いた人にはちょっとした違和感として感じられ、気付かない人は気にせずに通り抜けができるという絶妙な存在感が、人通りの多い難波橋で受け入れられる一つの要因になったように思います。さらに、イベントタイムでは波紋が巨大迷路という非日常として顕在化し、日常と非日常が入り交じった空間となり、都市の中でのイベントの一つの新たな在り方が見えたようにも思いました。そうした普段は通り抜けるだけの広場も、少しでも立ち止まるきっかけが作れたことで、難波橋の魅力に気付ける機会になったのではないかと思います。

（文責：粉川）

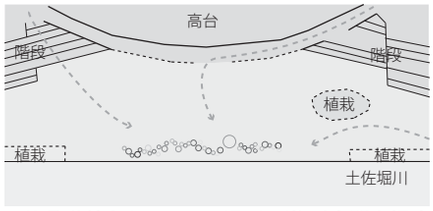
③中央公会堂南東側川沿いデッキ
［フープディスタンス］

●概要

敷地は大阪市中之島公園内の中央公会堂南東側水辺広場の川沿いデッキ広場です。普段は水辺の溜まり空間、人通りも少なくあまり活発に使用されていないこの場所に、フラフープによるソーシャルディスタンスの距離２mの可視化を行ったインスタレーション作品を展示しました。

カラフルなフラフープは中之島という都市公園に新たな色どりを与え、非日常の光景を生み出すと同時に、フラフープ・縄跳び・シャボン玉・コマ・けん玉など誰もが子供の時に遊んだことのある遊び道具（おもちゃ）を一緒に並べることで日常的な遊びの広場を提案しました。

それぞれの遊び道具が持っている距離感の体験、それらを使用することによって生まれるコミュニケーションを通して、この場を共有し、中之島公園の新たな魅力の発見のきっかけになればよいと考えました。



通過動線となっている場所に遊び空間を提案



フラフープの中に遊び道具を並べディスタンスを確保


イベントタイム「フラフープタイム」：一斉にフラフープを回し、各々が自然と距離を保っている様子


広場にて：老若男女問わず通りかかりの人々がフラフープを手に取り遊んでくれました


子供たちが思い思いおもちゃで遊ぶ

●当日の様子

午前中は人通りも少ないことや物珍しさからフラフープやおもちゃを手に取る通行者は少ないように感じましたが、午後になると、公園に散歩に来た子連れのファミリーや高校生、大学生などの若い人がフラフープやおもちゃを積極的に手に取り、遊び始めてくれました。最終的には、デッキからはみ出て子供たちが思い思いに自由に楽しく遊んでいました。

子供たちが遊んでくれることはなんとなく想定していましたが、子供の両親、通りかかりの人など、老若男女問わず、このイベントを楽しんでくれていたと感じました。フラフープやシャボン玉など、子供が「やりたい！」と言うのにつられて、お母さんやお父さんも見本を見せながら「昔は出来たのにー」などと会話している光景や近くの若い人たちが子供たちにフラフープを教えている光景など人々の交流が促されている様子がとても印象的でした。

イベントタイムには、フラフープを皆で一斉に回してもらうというイベントを行いました。参加者の方々がフラフープがぶつからないように２m以上の間隔を自発的に取りながら遊ぶ様子、その他の時間帯でも縄跳びをしたり・けん玉をしたり・シャボン玉をしたりと遊んでいるとき、各々が何となく自然と他者との距離を取っていることが実体験として見え、ソーシャルディスタンスの可視化は狙い通りでした。

●考察

通行としての利用が多かった場所に、フラフープを床に設置するという、ちょっとした仕掛けで多くの人々が集まり、この場所を活用して頂けたことは中之島公園の使い方に変化をもたらし新たな魅力の発見に繋がったと思います。また老若男女、誰もが馴染みがあり、大人たちにとってはどこか懐かしい、フラフープやおもちゃで遊ぶことを通して、人々の活動や会話が生まれこの場所を共有するといった体験もできたのではないでしょうか。今、屋外空間が注目を浴びているなかで、中之島公園の新たな魅力の発見にとどまることなく、街中での遊び方を考える契機となればよいと思います。　（文責：水野）

④ばら園水際［バルーンディスタンス］

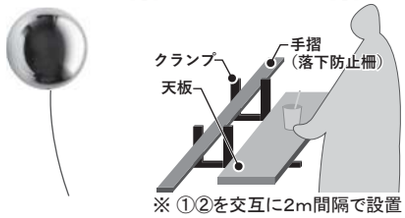
●概要

公園⇔川⇔都市建物群の連続する水都らしさが現れるばら園の土佐堀川沿いに、風船を用いた参加型インスタレーションを考案しました。まずはその場の特徴を生かすアイテム［①②］を土佐堀川と通路の間の落下防止柵に設置しました。各アイテムの設置間隔は約２mとし、公共の構造物を活用すると同時に場に尺度を与え、人と人の距離感の目安をつくりました。そして来訪いただいた皆様には、一つだけお願いをしました。“佇みたくなる場所にブルーバルーン［③］を結え付けて、お気に入りの場所をマーキングして下さい。”①②に不特定多数の手により③が加算されて場が変化し続ける、そして能動的に好きな場所を見つけてもらう事で、いつもより水辺空間に近づき、意識してもらうことがこのインスタレーションの本旨となります。

同時にインスタレーションにより設置されたブルーバルーンは来訪者のお気に入りの場所のマッピングとなり、水辺空間における人々の愉しみ方／集まり方を、風船の密度感／間隔によって履歴化することとなります。ともすれば、ソーシャルディスタンスが叫ばれる時勢を表徴するように、キレイな２m間隔でバルーンが並ぶのではないか…と少しばかり期待しながら当日を迎えました。

【始めに設置したアイテム】

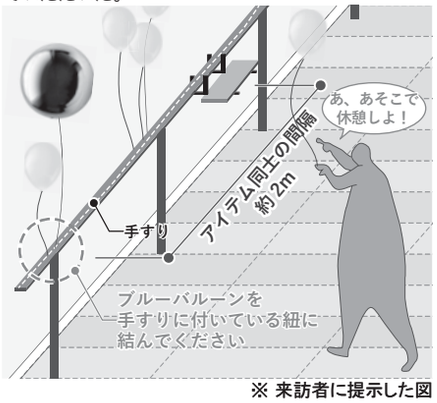
シルバーバルーン［①］　　クランピング［②］



※ ①②を交互に2m間隔で設置

【来訪者へのお願い】

ブルーバルーン［③］をお気に入りの場所に結え付けていただいた。



※ 来訪者に提示した図



来訪者の手により設置されたブルーバルーンや水景を手掛かりに、水辺空間を思い思いに楽しむ人々



アートとして遠くからも公園利用者の目を楽しませた



イベントタイム「チェーンtheバルーン」の様子

●当日の様子

予想以上の来訪者で賑わいました。水際で佇むような行為が同時多発的に、そして一定の距離感をもって起きる状態を予想していましたが、実際的には一人一人の滞留する時間が短いため、プライベートな距離感であるソーシャルディスタンスでの場の形成ではなく、水辺にバルーンが浮かぶ少し大きなエリアとして、離れた位置からも眺めて楽しめる場がつくられていました。ブルーバルーンも特段決まった秩序は無く、ランダムに並びました。場の使われ方としては、フォトスポットとして利用されていた方が非常に多かった印象です。風船が浮かぶ風景を撮影する年配の方から、風船を背景に自撮りする女子大生、風船と戯れる子供の姿をスマホで撮るママさんなど、水際に風船が浮かぶ場を「撮る」行為を通して思い思いに使いこなしていただけました。イベントタイムは風船を数珠つなぎにして水際の風景を時間限定で刷新する試みを行いました。不思議なもので特異な風景が現れると会場に近づく方は減り、少し遠巻きに傍観される姿が増えたことが印象的でした。

●考察

川辺に吹く風をバルーンの揺らぎにより可視化することで建物群としてのスタティックな風景に動きを与え、人々の目を改めて水辺空間に惹きつける、そして新たな魅力を再発見するきっかけになったのではないでしょうか。同時に、写真を撮りたいと思わせるビジュアルの影響力を感じました。スマホが普及し写真が民主化された今、どの世代でも場を楽しむ感情と撮影する行為が連動している事を実感しました。イベント参加者も通過するだけの方もふとレンズを向けたくなる、そして「同じ情景を撮る」という共通の行為を通して何となく場を共有する、そんな非接触ながらも一体感のある街の楽しみ方・参加の仕方を提供できたのではないでしょうか。

（文責：立松）

■U-35座談会

7th actionの座談会は例年と少し趣向を変え、建築や都市空間のリサーチ・ワークショップを行うRAD主宰の川勝氏、水辺のまち再生プロジェクト事務局であり、公共空間の自由使用を謳った「PUBLIC HACK」の著者である笹尾氏をゲストに迎え行った。また会場も、今回のaction開催場所の１つである中之島公園の剣先で開催し、「水辺」を感じながら振り返りを行った。

■7th actionの目的

高畑：6th action「建築とOSAKA」で行ったフィールドワークから、海外の人たちが撮った写真を、後日体系的に整理していったときに、多くの写真に水辺の空間が写っており、やはり海外の人たちは水辺の空間の魅力を自然と感じ取っているのかなと思いました。いざ、僕たちを顧みてみると、大阪にいながら水辺の空間の魅力を感じ切れてないところがあると思ったので、そういうところが感じられるような催し物ができないかなと考えたのがまず１つです。もう１つが、もともと４月に行おうとしていたのですが、コロナの影響で延期せざるを得なくなり、なかなかメンバーにも会えない中、やはり場を共有することは大事だよねという話を委員会でしていました。今、場を共有できる場所ってどういうところだろうって考えると、やっぱり外部空間なんじゃないかと。このウィズ/アフターコロナ禍においても安全安心に場の共有を図れるような仕組みが提案できないかと思い、その２つを掛け合わせて「建築と水辺　今、街を楽しむということ」をテーマに決め、7th actionを進めていきました。

■それぞれの場所でみられた風景

平岡：剣先噴水で行った「水辺カーペット」では皆さん突然現れたレッドカーペットにすごく遠慮気味で、そこを本当に歩いていいのか分からず躊躇している人が見受けられました。しかしその分、このスペシャルなカーペットが強調され、例えば子連れの夫婦が１組だけ、剣先の先端に佇んで景色を眺めることで特別な空間になったり、カーペットの上をまるでランウェイのように胸を張ってを歩く人がいたり、今までにはない新しい風景が見られたと思います。剣先公園は普段から魅力的な空間ですが、そこに少しイベント性を持たせることで、公園を使っている人に刺激を与え、普段と違った魅力ある風景が創られると考えると、このようなイベントが大切なのかなと思います。

粉川：難波橋のふもとで行った「波打つ広場」ですが、ここは普段、ばら園や芝生広場へ向かう人、ランニングをする人など中之島公園の交通動線の要のような場所です。そのため、描いたラインを気にも留めず通過する人も多く、このインスタレーションを感じてもらう人が10人中２～３人くら



ゲスト
川勝真一 氏
RAD主宰
RAD:
Raserch for
Architectural
Domain



ゲスト
笹尾和宏 氏
水辺のまち再生
プロジェクト事務局
「PUBLIC HACK」
著者



座談会の様子

座談会出席者



日建設計
高畑貴良志



竹中工務店
興津俊宏



山下設計
小原信哉



大成建設
水野裕介



日建設計
若江直生



東畑建築事務所
立松裕規



竹中工務店
川﨑菜摘



昭和設計
出来佑也



山下設計
長岡祥太



大建設計
平岡翔太



総合設備コンサルタント
久保廣大



鹿島建設
三谷帯介



昭和設計
森下大右



安井建築設計事務所
粉川壮一郎

いだったように思います。一方で、子どもの目線でみると「あ！線がある」とリアクションをする場合が多く、目線の違いによって見える世界も違うのかなと感じました。また普段は通行動線としての利用しかない場所に、迷路イベントとして遊び場を提供できたことが、すごく異質なものを挿入するという意味で特異点になったと思います。迷路を気にせず歩く人の間を、迷路で遊ぶ子ども達がジグザグ歩いて行く様は、なかなか面白い風景だったのではと思いました。

水野：「フープディスタンス」は中央公会堂の南東にあるデッキスペースで行いました。この場所は普段あまり使われていないような場所ですが、立て看板や無数のフラフープを設置した異様な光景が、場が使われるきっかけになるのかなと感じました。一番良かったのは直径２mもある巨大フラフープです。これを回すとちょうど２mでソーシャルディスタンスを視覚化でき、また物珍しさに大人も子どももこれを使って遊んでくれました。中でも、上手く回せる女の子が、周りにいた子たちに「こうやんだよ」って教えていて、それもいい光景だなと思って動画を撮ってました。

立松：ばら園水際で行った「バルーンディスタンス」では、公園に来た人に水辺に近づける場所を楽しんでもらうという意味では大成功だったと思います。子ども達が「あ、風船だ。ぼくも風船付けたい」と言って寄ってきてくれて、この場所を楽しんでくれていたのが印象的でした。風船の誘目性は高く、遠くからでも皆さん気が付いて、この場所に寄ってきてくれました。また距離を測る目印として４m間隔で設置した鏡面のシルバーバルーンがなかなか面白く、まわりの都市や、水辺の風景を写し込んで、キラキラしながら漂う様子が一際目立っていました。バルーンで遊んでいる子どもを写真に撮るお母さん、その近くで風船のある景色を見ながら休日のひとときを楽しむ親子、少し離れたベンチで、何気ない会話を楽しむおば様など、思い思いの使い方を通して水辺空間での場の共有が行われていたように思えます。

■イベントスケールとキラーコンテンツ

笹尾：中之島のへんてこなところは、道路から見下ろす場所が公園になっていることだと思います。その視認性が高いところをイベント場所として選ばれていたので、遠くからしっかり見えるやり方で見栄えがいいなと思いました。しかも仰々しいものではなく、しっかり見ると当然イベントだと分かりますが、身内でやってるものが少し膨らんだくらいの規模感で、参加する人も、気軽に参加できていたことに非常に好感を持ちました。イベントによっては、占用許可をとった占用区域と、そうではない通行の動線を分離してイベントを行うことが往々にしてあります。難波橋横の「波打つ広場」では、２割程度の人しか気付いていなかったようですが、気付いた人が迷路を体験すればいいわけで、８割の人が気兼ねなく歩けている状態の両方が並行して共存出来ている関係がとてもいいなと思いました。「水辺カーペット」は天神橋の上から見た景色がとても良かったですし、「バルーンディスタンス」ではバラ園橋の西側にいた親子が、「風船のとこ行ってみよか」と言って向かっていくっていうことが起こっていて、おそらく7th actionがあるから行こうっていう人よりも当日来たらやっていたという状況になっていて、誰でも気軽にイベントに参加できる公園の在り方が、凄くいいなと思いながら見せてもらいました。

川勝：僕も見させてもらっていいなと思ったのは、イベント１つずつのスケール感が小さいので、ともするとただフラフープサークルで遊んでるだけにも見える。その一方で、水都 OSAKAの魅力を再発見してもらう為の視点場の展開や、それぞれのイベントを繋ぐスタンプラリーが7th action全体を構造化している。小さなスケールでそれぞれのイベントが存在していることと、大きなスケールで中之島公園全体を一体的に認識できる視点を作り出しているという点がとても面白いなと思いました。

笹尾：フラフープのコンテンツとしての力も凄かったですね。動きがあり、誰もがやったことがあることだからこそ、キラーコンテンツ化するのかなと思います。

川勝：スタンプラリーもとても魅力的でした。

髙畑：川勝さんもまずスタンプ押しに来てくれましたね。

川勝：とりあえずスタンプラリーもらって帰らないとと思ってました（笑）。

■風景に馴染み、様々な使い方を許容する

川勝：「波打つ広場」ですごくいいなと思ったのは、気にならない人は普通に通り抜けることができて、気付いた人は地面にある印みたいなものに沿って、いろんな行為を生み出す可能性があったことです。その１つの機能とか、１つの行為に場所が縛られていない公共空間の在り方が非常にうまく浮かび上がっていると思いました。現在の都市は、昔の機能主義のようにいろんな機能を場所ごとに割り振るのではなく、例えばPokémon GOをしている人はそこがどこであろうと、遊びのための空間になっているし、エクササイズのアプリを起動しながら歩いている人は、そこは単なる移動空間じゃなくて、エクササイズのための場所になっている。そういった様々なモードが一つの場所にオーバーラップしていることが特徴であると考えているのですが、そのことがうまく表れているような取り組みで、非常に好感を持って見させてもらいました。

興津：イベントが始まるまでは、皆さんが地面に描かれた線に沿って歩いたり、何か気にするんじゃないかと思ってたんですけど、意外とそうではなくて、気にする人もいれば、いつも通りに動いている人もいるというような状況でしたね。

出来：波紋を迷路に見立てたイベントタイムは子どもたちで賑わいましたが、それまでは仕掛けた側としては不安になるほどシュールな光景でした（笑）。様々な過ごし方や意識の仕方が混在している状況を許容できる空間を作れたという意味では、良い提案ができたのではと思いました。

三谷：このインスタレーションをやる前にどのテープを貼るか、何種類も貼って試しました。どのテープが一番きれいに見えて、違和感がなく、人が足を引っかけないかなどいろいろ実験したんですけど、当日、見に来られた中村さんが「元からこの公園にあったみたいな感じがする」と言われた言葉がすっと腑に落ちました。僕たちが描い

た図柄や、選んだ素材だからなのか、元からこうだったと言われても不思議ではない空間ができていたことはとても良かったと思っています。

笹尾：確かに「水辺カーペット」もレッドカーペットを歩くというよりは、絨毯敷いてくれてありがとうみたいな使い方をされてる方が多くて、使う人の行為の選択肢を広げることができていて、素晴らしいと思いました。イベントタイムという特別な時間を設けることで空間の表情が変わり、日常とインスタレーションのちょうど間の部分のいい強度の取り組みがそれぞれの場所で行われていたからではないかと思います。

髙畑：日本人はパブリック空間を使うことが下手くそだと言われがちじゃないですか。でも一日中公園に居て、その使われ方を見ていると、実はみんなちゃんと公園を使っているんだと実感できました。例えば周りでイベントやってようが、「いや俺は毎週ここで酒飲んでんねん」っていう人がいるんですよね。レッドカーペットの先で写真撮影をしていても、微動だにせず、その先っぽを占有している。凄くハートが強いなと思うのと同時に、その人にとってその場所はどんなことがあっても自分の場所やし、周りもなんとなく受け入れていて、改めて公園はみんなにとっての場所なんだと気が付きました。

■人との距離や空気の流れを視覚化する

髙畑：今回のactionはコロナ禍に行ったこともあり、それぞれのイベントで人との距離を測れる試みを取り入れましたが、当日の状況はどうだったでしょうか。

平岡：屋外ということもあってか、皆さんそれほど意識することなく、木陰など、それぞれ自分が気持ちいいと思う空間に集まる傾向がありました。

三谷：実際に１m、２mのラインを引くなかで、メートル間隔のラインが、人間の生理的な感覚からするとすごい不思議な距離だと感じました。90cmであれば一歩で行けるが、１mは一歩では届かない、なるほど、ソーシャルディスタンスはそんな違和感があるからディスタンスなんだと思いました。実際の設計においても大規模建築に携わっていると、さらっとメーターモジュールで設計してしまいますが、メーターモジュールは人間にとって不思議なモジュールなのかもしれないということを設計者の視点として考えさせられました。

若江：「フープディスタンス」では様々な大きさのフラフープを地面に並べ、距離を可視化しましたが、そのフラフープがきっかけとなり、知らない人同士が老若男女問わず楽しんでいる光景が印象深かったです。実際のソーシャルディスタンスは取りながら、初めて会う人と人との距離感はとても近づいていたと思います。

三谷：「バルーンディスタンス」は距離の視覚化というより、屋外空間ならではの風の動きや通気性など、オープンエアをうまく視覚化してると感じました。凄く綺麗だったし、普段感じてる風ではあるけれど、目で見ると、こんなに緩やかなんだということが分かって良かったです。

■SNSでの反響

森下：actionの翌日、立松さんがSNSの状況を共有してくれましたが、SNSでの反響はどのような感じだったのでしょうか。

立松：「中之島」や「U-35」、「バルーンディスタンス」といったキーワードをInstagramなどで検索しましたが、15件くらいヒットしました。あげられている写真は、いわゆる映えそうなものが多かったのですが、例えばレッドカーペット上でワンちゃんをローアングルから構えて撮っている写真や、風船を遠目から望遠で撮ってる写真など、４つのイベントすべて投稿されていてました。どの写真からもイベントを楽しんでいただけている様子が伝わってきました。

■街＝外（そと）を楽しむきっかけに

興津：今回の7th actionを行ったことで、いつも見ている公園の景色を違う視点から見るきっかけを得られたと思います。インスタレーションを見るために橋の上など、高いところから俯瞰して見たり、いつもはただ通るだけの場所を近くで見たり。訪れた人のなかにも、同じように視点の変化に気づく人もいて、そうやっていつもと少し違う見方をするきっかけを与えることができたということは、今回大阪の魅力を再発見してもらいたいというactionの目的に対して、次に繋がる成果ではないかと思います。水辺を楽しむという意味では「バルーンディスタンス」が一番成功していたのではないかと思います。普段ではなかなか行くことのない水際の手摺まで人々が行っていて、他のどのイベントよりも水辺に誘うことができていた面白い仕掛けだったと思います。

立松：「バルーンディスタンス」の場所は手摺の手前にベンチがあるため、普段は座って風景を楽しむ人が多いところでした。それが手摺に風船を結わえ付ける動作がきっかけとなり、人々が水辺に近づくということが起き、公園を訪れる人々の行為を少し変えることができたのではないかと思います。

水野：実は、当日の動画撮影のリハーサルとして、休日に「フープディスタンス」の会場で撮影を行いました。その時は良い天気にもかかわらず、ほとんど人が歩いていませんでした。それが、今回仕掛けたイベントによって、これほどまでに人の流れや、人の集まり方が変わるのかと驚きました。何かきっかけを与えることで公園や公共空間の利用のされ方が明らかに変わると実感できたことが面白かったです。

川勝：自分で何かイベントを行う際はいつも、そのイベントに来てくれた人に対して何を残せるのだろうかと考えるようにしています。例えば「フープディスタンス」では、イベントが終わり、フラフープがなくなれば、あの場所でたくさんの人が一斉にフラフープを回したりする行為はできないと思いますが、あの場所が単に通行の為の場所ではなく、普段の遊び場としての利用や、イベントのような使い方ができるということが、訪れた人の身体や感性にインプットされたのではないかと思います。この場所で何かできるかも、ここでこんなことしていいんだと思わせるようなイベントが、これから益々行われるようになり、様々な使い方が人々にインプットされ、魅力的な公園や公共空間になっていくのかなと思いました。

三谷：当日ここを偶然訪れた人は、いつも通りに公園に散歩に来たけれど、いつもと違

うことが起こっていて、その変化に「ありがとう」と思った人が結構いるのではないかと思います。公園に子どもを連れていって、いつもと同じように遊ぶだけではなく、今日は風船で遊べたり、子どもが迷路を見つけたり、いつもと違う少し特別な時間が提供できたのであれば、社会的に意義のあることだったと思います。

川勝：このようなイベントは、デザイン行為であると同時に、場所がどういうポテンシャルを持っているか、どういうアクションを仕掛けると、どういうリアクションが返って来るか、ということに関してのリサーチでもあったと思います。タクティカル・アーバニズム(注1)の文脈は、スモールスケール・ビッグチェンジ、つまり、小さなことからどんどん大きな変化につなげていこうということだと思いますが、イベント当日の様子や、座談会での振り返りから、U-35委員会の皆さんがここからどういうことを引き出して、普段の設計活動に反映されていくのかにとても興味があります。

高畑：我々のactionは、毎年アウトプットと言いながら、どうしてもインプット性が強いものが多かったと思います。そこで今年は例年とは違うアウトプットをしたいと思っていました。しかしながら、いざ始めてみると企画、運営、資金調達まで全部自分たちでやることは、非常に難しく大変でした。それでも今まで3年4年とため込んできたものを、一気に社会に対して吐き出すことができたことは、7th actionの大きな成果だと思います。更に今回のactionを通して、様々な人と繋がりができたので、その繋がりを大切にしながら、また違った形で公共に対して、社会に対して発信していけるような活動ができると良いなと思います。毎年すると息切れすると思いますので、何年かに1回くらいかなと思いますが（笑）。さらには、このようなイベントをスムーズに行う仕組みや体制づくりなども整理しながらこれからもやっていけたらいいなと思いました。

(注1)：市民主導の都市改善運動、またその方法論。社会実験や暫定利用など「小さな変化」を積み重ねて知見を蓄積しながら、施設の建設や制度設計といった都市計画レベルののあり方に影響を与えることを目的とする。

■7th actionを終えて

今回の企画では、大阪の水辺空間「中之島公園」を舞台に、「安全・安心」に人々が集えるよう、「水都 OSAKA ／魅力の再発見」と「With/After COVID-19 時代／場の共有」をテーマにイベントを行いました。コロナ禍にありながら参加いただいた皆様にとって、普段とは異なる使い方や新しい発見など、「街＝外（そと）」を自由に楽しむきっかけとなればと思います。

最後に、ご参加いただきました皆様、川勝様、笹尾様、カメラマン田代様、水都大阪コンソーシアムの関係者様、ご協力いただきましたメーカーの皆様に深く感謝申し上げます。　（文責：出来佑也）









1　あやしい絵展

明治期、あらゆる分野において西洋から知識、技術などがもたらされるなか、美術も西洋からの刺激を受けて、新たな時代にふさわしいものへと変化していった。
このような状況のもとで生み出されたさまざまな作品の中には、退廃的、妖艶、グロテスク、エロティックといった「単なる美しいもの」とは異なる表現があった。これらは、美術界で賛否両論を巻き起こしつつ、激動する社会を生きる人々の欲望や不安を映し出したものとして、文学などを通して大衆にも広まっていくようになった。
本展では幕末から昭和初期に制作された絵画、版画、雑誌や書籍の挿図などからこうした表現を紹介する。



上村松園《焔》
大正７（1918）年
東京国立博物館
展示期間：3/23〜4/4

期　　間　3月23日（火）〜5月16日（日）
9：30〜17：00（金・土曜日は20：00まで）
※入館は閉館の30分前まで
※本展会期中に限り9：30開館（ただし「MOMATコレクション」「コレクションによる小企画　幻視するレンズ」は10：00開場）
※会期中展示替えあり
休 館 日　月曜日（ただし3/29、5/3は開館）、5/6
会　　場　東京国立近代美術館１階企画展ギャラリー
[北の丸公園・竹橋]
東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL.050-5541-8600（ハローダイヤル）
観 覧 料　一般1,800円、大学生1,200円、高校生700円
＊中学生以下および15歳未満無料（要証明）
＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料
＊本展の観覧料で入館当日に限り、所蔵作品展「MOMATコレクション」（4-2F）、「コレクションによる小企画　幻視するレンズ」（2F ギャラリー４）も観覧可

2　凝然国師没後七百年　特別展 鑑真和上と戒律のあゆみ

鑑真（688〜763）は、中国・唐時代の高僧で、律の大家として尊敬を集めた。しかし、日本での戒律の整備を目指していた聖武天皇の意を受けた日本僧・栄叡、普照より懇請され、その地位をなげうち、五度の日本への渡航失敗と失明をものともせず、天平勝宝５年（753）、６度目にしてようやく日本の地を踏んだ。その後、唐招提寺を拠点に、中国正統の律の教えを日本に定着させ、日本仏教の質を飛躍的に高めた。



国宝　鑑真和上坐像
奈良時代（８世紀）
奈良・唐招提寺　通期展示
撮影：金井杜道

律とは僧侶のあるべき姿を示し、戒とは僧俗の守るべき倫理基準である。戒律を学ぶことは、僧侶とは何か、仏教とは何かを問い直すことでもあり、日本が社会変動を迎えるたびに、幾多の名僧が戒律に注目し、仏教の革新運動を起こした。特に、鎌倉時代には、唐招提寺の覚盛（1194〜1249）、西大寺の叡尊（1201〜1290）、泉涌寺の俊芿（1166〜1227）をはじめ、没後700年を迎える凝然（1240〜1321）などの英傑が登場し、戒律の精神にもとづき社会福祉事業などを行い広範な支持を集めた。そして、安定社会に見える近世においても、明忍（1576〜1610）や慈雲（1718〜1805）などによって重要な律の復興運動が展開された。
本展では、日本仏教の恩人と言うべき鑑真の遺徳を唐招提寺に伝えられた寺宝によって偲ぶとともに、戒律のおしえが日本でたどった歩みを、綺羅星のような名僧の活躍と関係諸寺院の名宝を綴ることで紹介する。

期　　間　3月27日（土）〜5月16日（日）
[主な展示替]
前期：3/27〜4/18　後期：4/20〜5/16
※一部作品は上記以外にも展示替えあり
9：00〜17：30
※入場は17：00まで（夜間開館なし）
休 館 日　月曜日（ただし5/3は開館）、5/6
会　　場　京都国立博物館　平成知新館
京都市東山区茶屋町527
TEL.075-525-2473（テレホンサービス）
観 覧 料　一般1,800円、大学生1,200円、高校生700円
＊中学生以下無料
＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

3　東山魁夷　唐招提寺御影堂障壁画展



《唐招提寺御影堂障壁画 山雲》（部分）
1975（昭和50）年 唐招提寺蔵

近代日本画を代表する巨匠・東山魁夷が生涯で最も長い年月をかけて制作に取り組んだ唐招提寺の御影堂障壁画を一堂に展示する特別展が開催される。
清澄で非予情性を湛えた風景画の数々で知られる日本画の巨匠東山魁夷が完成までに10年を費やした障壁画全68面を公開するほか、全国各地を旅して描いたスケッチや下図なども展示し、構想から完成に至るまでの足跡も紹介する。東山魁夷が鑑真和上に捧げた祈りの美を堪能できる絶好の機会である。
奈良・唐招提寺の御影堂が一般に公開されるのは、毎年６月６日の開山忌を含む３日間だけである。また、現在御影堂は修理事業を行っており、しばらく公開の機会はない。本展では御影堂内部を再現展示するため、障壁画の臨場感を間近で味わえる。

期　　間　4月24日（土）～6月6日（日）
※会期中展示替えあり（障壁画は通期展示）
前期：4/24～5/16　後期：5/18～6/6
9：30～17：30（金・土曜日は19：30まで）
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　月曜日（ただし5/3は開館）
会　　場　神戸市立博物館
神戸市中央区京町24
TEL.078-391-0035
観 覧 料　一般1,600円、大学生800円
＊高校生以下無料

4　石内都展 見える見えない、写真のゆくえ



石内都
《ひろしま #131
donor:Masaki, S.》
2020年

石内都は1947年に群馬県桐生市で生まれ、多摩美術大学で染織を学んだ後、写真を始めた。写真に関する専門的な教育を受けず、独学で技術を習得した石内は、従来の写真形式に縛られることなく、粒子が浮かび上がるモノクロームの写真で独自の表現手法を身につける。
本展では初期作の＜連夜の街＞（ヴィンテージプリント）をはじめ、代表的なシリーズの原爆による被爆者の遺品を写した＜ひろしま＞、フリーダ・カーロの遺品を被写体とした＜Frida by Ishiuchi＞＜Frida Love and Pain＞を展示する。
それに加え、これまで発表機会の少なかった薔薇やサボテンを撮ったシリーズ、国内では初公開の＜Moving Away＞、そして新作＜The Drowned＞を展示することで、石内の写真の新たな一面を紹介する。

期　　間　4月3日（土）～7月25日（日）
10：00～17：00
※入館は16：30まで
休 館 日　水曜日（ただし5/5は開館）、5/6
会　　場　西宮市大谷記念美術館
兵庫県西宮市中浜町4-38
TEL.0798-33-0164
観 覧 料　一般1,000円、高大生600円、小中生400円
＊西宮市内在住65歳以上の方は500円（要証明）
＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

本欄掲載の１～４の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（84円）を日本建築協会事務局までお送りください。

事情により開催内容が変更、もしくは中止となる場合もございますので、会場WEBサイト等で最新情報をご確認ください。

国税庁
事業者のみなさまへ
令和5年10月1日から
消費税の仕入税額控除の方式として
「適格請求書等保存方式」
（いわゆるインボイス制度）が導入されます。
インボイスを交付する事業者となるには
事前に登録申請が必要です！
【登録申請受付開始：令和3年10月1日～】
登録申請は、e-Taxをご利用いただくと
手続がスムーズです。
※インボイスとは、登録番号のほか、一定の事項が記載された請求書や納品書その他これらに類するものをいいます。
インボイス制度について
専用ダイヤル
【フリーダイヤル】0120-205-553
【受付時間】9:00～17:00（土日祝除く）
詳しくお知りになりたい方は
国税庁ホームページ（https://www.nta.go.jp）の
「インボイス制度特設サイト」をご覧ください。
特設サイトへ

日本建築協会

月間の動き

2021年1月

常任理事会

第５回常任理事会
１月27日（水） 17：00～18：30
WEB会議
出席者　設楽会長ほか11名
議　事（1）「会誌活性化に向けて」その後の動き
（2）－建築材料・住宅設備総合展 KENTEN2021－協力と優良製品・技術表彰
（3）役員会の今後の日程
（4）第４回片岡安賞「論考コンクール」経過報告
（5）出版委員会新刊発刊報告
（6）大阪都市景観建築賞第４回幹事会報告

編集委員会

第８回広告企画・編集合同委員会
１月27日（水） 18：30～19：10
WEB会議
出席者　勝山委員長ほか９名
議　事（1）２月号特集　私の空間作法
（2）３月号特集　東海支部特集
（3）４月号特集　建築と社会の時代性を考える（仮）
（4）５月号特集　WELL　COME（仮）
（5）６月号特集　論考コンクール
（6）その他　①「建築と社会」活性化の動き　②４月号以降の表紙

第２回建築計画系分科会
１月25日（月） 19：00～20：05
WEB会議
出席者　樋口幹事ほか６名
議　事（1）第５回特別編集委員会報告
（2）2021年４月号
（3）2021年８月号

第８回設備分科会
１月５日（火） 16：00～17：20
WEB会議
出席者　橋本幹事ほか７名
議　事（1）2021年４月号特集
（2）「設備の頁」の企画
（3）2021年設備特集の企画

第４回施工材料分科会
１月29日（金） 17：00～18：10
WEB会議
出席者　山口幹事ほか５名
議　事（1）第５回特別編集委員会報告
（2）2021年４月号担当委員選任
（3）2021年８月号担当委員選任
（4）2021年10月号特集
（5）次回特別編集委員会出席委員選任

第５回法令分科会
１月20日（水） 15：00～16：45
日本建築協会会議室＆WEB会議
出席者　垣内委員ほか４名
議　事（1）法令コーナーの企画
（2）2021年４月特集の企画
（3）2021年９月特集の企画

第８回作品作風小委員会
１月28日（木） 19：00～
WEB会議
出席者　太田小委員長ほか５名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況、予定
（3）gallery掲載報告、予定
（4）その他

第５回特別編集委員会
１月21日（木） 18：30～20：00
WEB会議
出席者　設楽会長、勝山委員長ほか10名
議　事（1）４月号特集内容の検討
（2）５月号以降の展開
（3）４月号以降の建築と社会表紙テーマ案

事業委員会

第５回情報見学小委員会
１月14日（木） 18：00～19：05
WEB会議
出席者　中尾委員長ほか５名
議　事（1）本年度事業
（2）来年度事業の検討

出版委員会

第７回出版委員会
１月26日（火） 16：00～16：55
WEB会議
出席者　西委員長ほか10名
議　事（1）既刊書籍経過報告
（2）制作進行中の書籍
（3）今後の出版テーマ
（4）建築セミナー

教育委員会

第３回工高生教育小委員会
１月26日（火） 18：00～19：30
WEB会議
出席者　谷口委員長ほか５名
議　事（1）次年度第67回工高生デザインコンクール募集規定の件
（2）次年度の日程と開催内容の検討

第３回史料研究会
１月12日（火） 18：00～18：45
WEB会議
出席者　橋寺委員長ほか６名
議　事（1）連載「再読」
（2）会誌アーカイブ閲覧

第10回大阪府住まい・まちづくり普及協議会
１月15日（金） 10：30～12：00
WEB会議
報告・議題
（1）出前講座
（2）キットハウス
（3）その他

未来創生プロジェクト

第９回建築次世代委員会
１月25日（月） 18：40～20：10
WEB会議
出席者　菅原委員長ほか６名
議　事（1）今後の活動計画の検討
（2）学生に向けた映像コンテンツ内容の検討

第６回2040委員会
１月18日（月） 19：30～
PARK Lab.＆WEB会議
出席者　駒井リーダーほか７名
議　事（1）企画内容
（2）今後の委員会活動

第14回U-35委員会
１月12日（火） 19：30～
WEB会議
出席者　平岡リーダーほか11名
議　事（1）活動／予定
（2）次回予定／その他

審査会

第３回論考コンクール審査委員会
１月22日（金） 19：00～21：00
WEB会議
出席者　髙田審査委員長ほか３名
議　事（1）第１次審査
（2）公開プレゼンテーション
（3）最終審査委員会詳細

編集委員会（2020年度）

■副会長
川合　智明
■編集担当理事
◎勝山　太郎
佐藤　栄一
橋寺　知子
西　博康
菅野　忠司
山田　淳
吉村　英祐
■副委員長
○戸川　勝之
■編集委員
中原　岳夫
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
△田中　直人
林　雄太
松田奈緒子
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
桑原　悠樹
下坂　浩和
東　拓郎
△樋口　展寛
三谷　帯介
米山　剛史
渡部　剛
東　一彦
平岡　翔太
★ｲﾝﾃﾘｱ･住宅系
赤川貴世友
東　奈生子
今井　充彦
高橋　伸明
川合　隆之
河西　孝平
△黒栁　亮
ペリー史子
■構造分科会
宇野　綾真
岡田　健
△岸本　光平
古島　正博
正野　和司
瀧野　敦夫
竹本　孝輔
萩原　学
宮久保秀樹
向井　洋一
■設備分科会
有尾清二郎
木谷　晃之
北野　勝也
寺井　千佳
仲村　憲一
夏井　重行
△橋本　直樹
桝井　貴廣
宮崎ひろ志
森山　正和
山本　雅洋
■施工材料分科会
門野　陽
桜井　和男
秋竹　教行
藤丸　啓一
△山口　紀宏
河合　智寛
吉田　正友
岡田　淑子
■法令分科会
△岡田　耕介
垣内　明
河野　学
西　雅昭
福岡　誉顕
■作品作風小委員会
居内　章夫
池上　明
石井眞由美
稲垣　和江
▲太田　栄治
加嶋　章博
菊池　浩輔
倉渕奈千子
澤田　純一
髙木　秀晃
鞆野　淳司
西田　佳代
藤原　寛
平野　尉仁
増田　敬彦
■広告企画小委員会
小川　雄介
金築　雄
小山　昭
野山　将男
藤田　昌宏
▲前田　衛
山辻　直樹

（順不同）

◎委員長
○副委員長
▲小委員会委員長
△幹事

印　刷　２０２１年２月24日
発　行　２０２１年３月１日
発行人　一般社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱中島弘文堂印刷所
定　価　1254円（税込）

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本　　社　〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761／FAX.06-6976-8765

東京支社　〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580／FAX.03-3526-5582

http://www.n-kobundo.co.jp/

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。
1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：４月号～翌年３月号までの１年間
掲 載 料：**48,000**円（消費税込み）
サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。
※原稿は１年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人　日本建築協会　内山・井筒

TEL：06-6946-6981　FAX：06-6946-6984　E-mail：koukoku@aaj.or.jp

図解

建築と構造の接点

日本建築協会 企画

仲本尚志・馬渡勝昭・長瀬正 著

トラブル予防のツボ100

- プラン変更に対応できず柱が邪魔になった
- マンション上階の騒音・振動がひどい
- 鉄骨のあらわし部分が見苦しい
- 構造スリットから漏水した…etc.

建築デザイナー
×
構造エンジニア
協業不足で
トラブルになる
ポイントはここだ！

A5判・256頁・定価　本体2800円＋税

学芸出版社

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811
Fax 075-343-0810

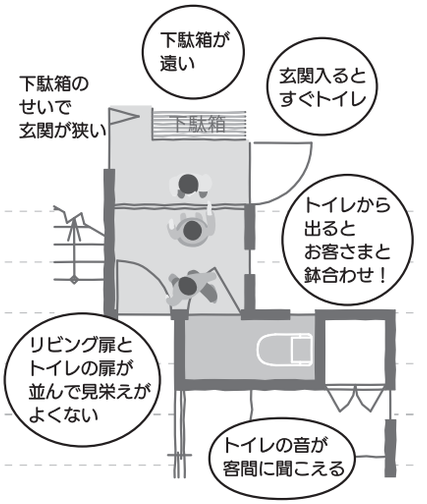
http://www.gakugei-pub.jp/
E-mail info@gakugei-pub.jp

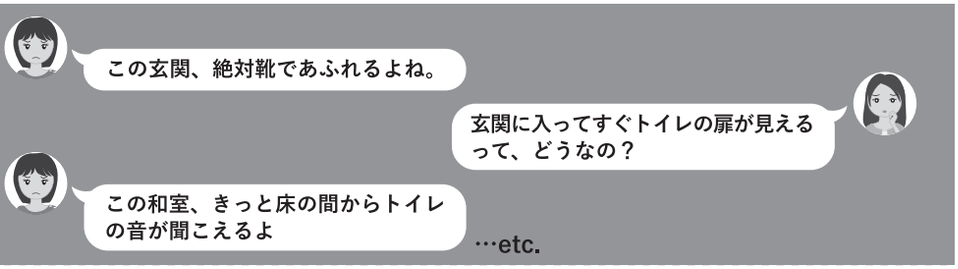
図解

間取りの処方箋

＋暮らしから考える
住宅設計・改修のポイント

8つの空間の
「お困り間取り」と
その改善ポイントを
完全図解





設計実務に役立つ1冊

堀野和人・小山幸子 著　日本建築協会 企画
A5判・184頁・定価 本体2600円＋税

学芸出版社

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811
Fax 075-343-0810

http://www.gakugei-pub.jp/
E-mail info@gakugei-pub.jp